

第75回 日本ユネスコ運動

全国大会 in 東京

— 学びを通して地域を振り返る —

講演録



大会 1 日目テーマ: 寺子屋での学びがもたらしたもの—成果と展望をめぐって

大会 2 日目テーマ: 学びを通して共生社会を創る

2019年

9月

7

日(土)

8

日(日)

会場: 豊島区立目白小学校

主催: 公益社団法人日本ユネスコ協会連盟 共催: 東京都ユネスコ連絡協議会

後援: 外務省・文部科学省・日本ユネスコ国内委員会・国際連合広報センター・ESD 活動支援センター・豊島区・
豊島区教育委員会・としまユネスコ協会・豊島区観光協会・公益社団法人シャントイ国際ボランティア会(SVA)・
公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター(ACCU)

ディスカッション1

「寺子屋は途上国の人びとに何をもたらすことができたか —学習者の声を聴く」

パネリスト:

アフガニスタン: ムハマド・ハニーフ(イスタフ郡中学校校長・元識字学習者)

カンボジア: アン・サムナン(高校生・元復学支援学習者)

ネパール: タラマティ・ハリジャン(ルンビニ文化市議員・元識字学習者)

コメンテータ:

西野 月(杉並ユネスコ協会)

モデレータ:

川上 千春(日本ユネスコ協会連盟事務局長)

(敬称略)

司会: これよりディスカッション「寺子屋は途上国の人びとに何をもたらすことができたか—学習者の声を聴く」をスタートしていきます。このディスカッションでは、かつて寺子屋で学んだ方から、寺子屋での学びによって何が大きく変わったのか、そしてまた将来の夢はどういったものなのか、その辺りを中心にお聞きしたいと思います。

同時に、世界寺子屋運動の高校生スタディツアーに参加した高校生に、実際に自分の目で見えてきた経験をもとに感想を伺いたいと思います。

それではここからは登壇者の紹介も含めまして、モデレータの日本ユネスコ協会連盟事務局長の川上千春さんに進行お願いしたいと思います。川上さんよろしく願いいたします。

川上: 皆さんこんにちは。今回の全国大会では、大会1日目のサブテーマが「寺子屋での学びがもたらしたものの成果と展望を巡って」となっています。そしてこのディスカッションのテーマはここにありますが「寺子屋は途上国の人びとに何をもたらすことができたか—学習者の声を聴く」ということです。

現在世界寺子屋運動は、アフガニスタン、カンボジア、ネパール、ミャンマーの4カ国で展開しています。そのうちアフガニスタン、ネパール、カンボジアの3カ国から、それぞれ寺子屋で学び、その経験を活かして人生を切り開いてきた人たちをお招きいたしました。なお現地では「コミュニティ・ラーニングセンター」と呼んでいることが多いのですが、本日は、「寺子屋」という名称で統一させて頂きますのでご了承ください。

プログラムにプロフィールがありますが、改めてご紹介したいと思います。

お一人目はアフガニスタンより、ムハマド・ハニーフ・ハムタさんです。



ハニーフさんは、首都カブール北部に位

置するパルイスタリフ村の出身で、幼少期にアフガニスタンの長期にわたる内戦の影響により、一家でカブールの難民キャンプへの避難を強いられました。

寺子屋の識字クラスで、読み書きを学ばれて、その後小学校に編入され、中学・高校と進み、教員大学まで卒業されました。現在は故郷のイスタリフ村のゴラムハイラルシヤキット中学校で、校長先生をされています。

次にネパールからタラマティー・ハリジャンさんがいらしています。ネパール南部ルンビニのエカラ村というところからお越しいただきました。



タラマティーさんは、いまから8年前2011年に、世界寺子屋運動のビデオにもありましたが、広報特使である久保純子さんの取材を受けていただきました。その時にカーストのこと、慣習に従わざるを得なかったこと、それから若いうちに教育を受けることができなかった理由について、つらかった経験も含めて語って下さっています。当時の様子は現在もYouTubeで公開していますので、もしよろしければ是非ご覧いただければと思います。

現在は寺子屋での学びを経て、ルンビニの市議員として活躍されています。

3人目はカンボジアから、アン・サムナンさんです。サムナンさんは、シェムリアップ州のタヤック村から来日しました。



先々週、初めて寺子屋の現場を訪れた日本ユネスコ協会連盟の佐藤美樹会長も、現地でお会いしています。

サムナンさんは家計を助けるために小学校を11歳で中途退学され、家の手伝いをしていましたが、寺子屋の復学支援クラスに入り、2年間学んだ寺子屋卒業生です。寺子屋卒業後は村の中学校に進学され、現在は高校に通っています。トップの成績をおさめている生徒さんだと伺っています。

そしてコメンテーターとして、立教女学院高等学校2年生の西野月さんをお迎えています。



西野さんは昨年8月所属している杉並ネスコ協会の推薦を受けて、高校生カンボジア・スタディツアーに参加されました。

ではこれより本題に入らせていただきます。まず元学習者のお三方にどのようなところからいらしたのか、写真を用意して頂きましたので、紹介していただきながら、それぞれの寺子屋での学習体験、ご自身の変化についてお聞きしていきたいと思ひます。

まずアフガニスタンのハニーフさんお願いいたします。

ハニーフ： このあたりは歴史ある地域で、多くのアフガニスタン人が休みの日に訪れる場所でもあります。私たちは、この地域に住んでいます。とっても綺麗で大きな川が流れています。



私の家族写真です。真ん中に私が出て、左側に妻、右側に息子と二人の娘がいます。



私の国では、基本的には女性の写真を撮ってはいけないことになっていますが、特別に今回のために、私が妻を撮りました。
川上： これは当協会連盟が 2003 年にアフガニスタンで初めて建てた寺子屋ですが、ハニーフさんは、寺子屋のことは、どのように知ったのでしょうか。

ハニーフさん： 親戚からこの丘にある寺子屋のことを聞きました。実際に自分で寺子屋に行ってみたのですが、読み書き計算が無

償で学べる上、色々な設備も使えると知り、とても素晴らしいと思いました。



川上： ということはハニーフさんご自身で寺子屋に行くことを決められたのですか。

ハニーフ： そうです。ただ寺子屋のことは知ってから入るまでに、ちょっと時間がかかりました。と言うのも、私たちの国では、学校でもどこに行くのでも、まず親の許可を取らないといけないからです。両親と話して、許しを得て、寺子屋で学び始めました。

母は、全く読み書きが出来ない非識字者だったので、自分がいままで苦労したことを自分の息子にさせたくないとの思いから、全面的に支援してくれました。

川上： 具体的に、どのような支援をお母さまから受けられたのでしょうか。

ハニーフ： 母は、歳も取っていますし体が動かないところもあったのですが、私がすべき家の仕事も、私が勉強できるようにと自ら率先してカバーしてくれました。いまでもたいへん感謝しています。

川上： ハニーフさんご自身は、寺子屋で学ばれて何が一番変わりましたか。

ハニーフ： 寺子屋に入って、私は人としての生き方を学びました。今後生きていく上で必要となるさまざまな知識も、読み書きの中で得ることができました。それはすべて寺子屋のおかげです。

川上： ではハニーフさんの中で一番の変化は何だったのでしょうか。

ハニーフ： 寺子屋に通い始めて、国や社会に自分も責任があることを認識するようになりました。自分の責任において、未来を担う子どもたちを育てていかななくてはならないと考えるようになりました。

川上： これは、ハニーフさんの中学校での写真と伺っています。いま、校長先生として仕事をされているわけですが、どんな時に幸せを感じますか。



ハニーフ： 自分が学校を卒業し、自国の人たちの役に立つことが出来るということに気づけたことが、幸せだと思います。

川上： 校長先生をされていて、ご苦労はありますか。

ハニーフ： アフガニスタンでは、仕事をしながら勉強をしなければならない子どもがかなり多くいます。そういう子どもたちが、できるだけ勉強に集中できる環境をつくってあげることは難しい面もあります。

川上： アフガニスタでは、貧困などで学用品が買えない生徒さんや、家業を手伝わなければいけない生徒さんがいるので、いかに学びの場に結びつけるかということで、ご苦労されているということですね。

ハニーフ： そうです。私は教師として、全力を尽くし、子どもたちのために頑張りたいと

思っています。

川上： ありがとうございます。ではネパールのタラマティさんにお話を伺いたと思います。まずは写真の紹介からお願いいたします。

タラマティ： これは私の家のすぐ近くの畑の写真と店の写真です。



これが私の家の写真です。2年前にやっと電気が通るようになりました。ここは寝室です。





これは私の家族で左側が夫です。二人の孫がいます。この二人、右側の二人は息子たちのお嫁さんです。



川上：村は伝統的にとても保守的で、女性に教育は必要ないという考え方が強いと伺っていますがここに映っている旦那様は、タラマティさんが寺子屋で読み書きを学ぶことについて賛成してくれましたか。

タラマティ：はい。夫が私の背中を押してくれたので、私は夫にすごく感謝しています。

川上：旦那様はタラマティさんが教育を受けることを、後押ししてくれたということでしょうか。

タラマティ：私が学びに行くことを応援し、自分たちと同じカーストの人たちや女性、そして学ぶ機会が得られなかった人たちにとって、「君が一步踏み出すことが力になるんだよ」という言葉をかけてくれました。

川上：それはたいへん心強いですね。こちらは何の写真でしょうか。

タラマティ：これは私たちが夏にナガパンチャミという蛇のお祭りをしている時の様子です。家々の守り神としての祭りがあるんです。



川上：これは識字クラスの写真とのことですが、タラマティさんが学ぶ上で難しかったことは何でしょうか。



タラマティ：文字の書き方を覚えることや計算することがたいへん難しかったです。最初は、自分の名前を書くこともたいへんでした。

川上：タラマティさんは、来日前の事前アンケートで、識字クラスで学び役立ったことをたくさんあげていただきました。

ちょっとご紹介させていただきますと、文字が読めて道の名前や標識が読めるから一人で出かけられるようになったこと。計算して、家計のやりくりができるようになったこと。

また地域社会が抱えている家庭内暴力

や、女子が幼くして結婚しなければいけない風習、カーストのこと、女性差別のことなどについて寺子屋で学ぶことができ、そういった社会の課題に取り組むようになったことと答えてくださっています。

タラマティさんご自身は、寺子屋でご自分が変わったと思いますか。

タラマティ： 寺子屋に入ってまず、学ぶことの喜びを得ることができました。学びたいという気持ちが沸き起こってきました。そして家事全般のやりくりもできるようになりました。知識を得たことで、いままでできなかったことが、ずいぶんできるようになりましたし、社会のことにもより強く関心をもてるようになりました。

川上： そしてこれは地区のオフィスと伺っていますが、現在市会議員として活躍されているタラマティさんにとって、うれしいことは何ですか。



タラマティ： 学びを経て、選挙に立候補し、そして当選したということが、まず何よりも素晴らしいことであり、私自身とてもうれしかったです。

自分の夫が、1日中歩き回って、みんなに応援してくださいと選挙活動してくれた。そういう夫の存在を改めて感じたことも、うれしいことのひとつです、ちょっとずれているかもしれないですけど。

川上： ありがとうございます。そして逆に活動する上でタラマティさんにとって困難なことは何かありますか。

タラマティ： 以前の私はたくさん難しいことが、あったのですが、いまは議員として責任ある立場ですので、色々なサービスや情報が行き届いてないところに行き届かせるために計画立てていくことが、一番たいへんだと思っています。

川上： タラマティさんの活動は、村の人たちはどのように見えていますか。

タラマティ： 私の仕事ぶりを見て、村の人たちはすごく喜んでくれています。ありがたいと思います。

川上： 事前アンケートでは、当初、タラマティさんが活動しようとした時に、無理解から色々な妨害を受けたこともあったようですが、そういった困難を、旦那様と共に乗り越えられて現在があるということかと思えます。タラマティさんありがとうございました。

川上： 次にサムナンさんにお話を伺いたいと思います。ではまずいただいた写真ですね。

サムナン： これは私が住んでいる村の風景です。



私の村に向かっている道路と市場で、色々なものが売られています。

これはわたしの家です。



これは私の家族で、一番左はおばあちゃん、私の右はお父さん、その隣が母さんで、右の方は甥っ子です。



川上： ビデオの中で、サムナンさんが小学校を退学したのは、ご両親の負担を減らすためということでしたが、これは自分で決めたのでしょうか。

サムナン： 私の兄弟は、私も入れて全部で6人です。私が学校に行かなければ親の負担を軽くできると考えて自分で辞めました。でも本当は辞めたくなかったです。

川上： サムナンさんが寺子屋の復学支援クラスに行きたいと言った時には、ご家族は賛成してくれましたか。

サムナン： 応援してくれました。寺子屋に通うことができ新しい希望ができました。これは私が通っていた寺子屋です。



川上： 寺子屋での授業はいかがでしたか。

サムナン： 最初始めた時に一番難しかったのはすっかり忘れかけていた算数で、とくに、分数が難しかったです。他の科目に関してはとくに問題はなかったです。

川上： 寺子屋に通われてサムナンさんご自身が変わったところがありますか。

サムナン： 一番変わったところは、以前小学校通っていた時には怠けることもあったのですが、寺子屋に通うことによって、友達と遊ぶ時間を減らして一生懸命勉強するようになったことです。そして、自分の将来に対する希望が生まれました。そんな中で一番大事な考え方というのは、もう二度と学校を辞めないという意味です。

川上： 寺子屋で復学支援クラスを卒業された後、サムナンさんは中学校に入られました。小学校を退学せずに、ストレートでそのまま中学校に上がってきた子どもたちもたくさんいる中で、サムナンさんはたいへん優秀な成績でトップクラスと伺っています。本当にすごいことだと思うんですけども、どのように勉強されたのでしょうか。

サムナン： 学校で、自分なりの“決まり”を作りました。例えば自分の学習の時間を、自分でしっかり管理できるようにすると決めました。また、目標を立てて、毎日学校から帰った時に必ず2時間ほど復習をしなければならぬと決めました。あと学校の中で自分が一生懸命勉強しなければならないとい

うことも。もし先生の説明の中で分からないことがあればすぐ質問をするということです。

川上： すごいですね。すごいきちっと色々考えて勉強されてきたからこそ、トップクラスの成績なのかなと思います。それでは写真の説明を続けていただけますか。

サムナン： 私が通っている高等学校です。



私の同級生です。



川上： サムナンさんは、将来ホテルのマネージャーになりたいと言っています。その目標のためにいま、取り組まれていることは何かありますか。

サムナン： ホテルマネージャーになるために、5つの目標を掲げました。1番目は外国語、とくに英語を勉強すること。2番目はインターネットなどコンピューターを勉強すること。連絡・コミュニケーションとして非常に重要だと思うからです。次に、マネジメントについても勉強しなければならないと考えています。また、仕事をする上での分業の仕方やチー

ムとしての仕事の管理の方法。そのグループやチームの中で、課題をあげてもらい、その課題を解決するためにどうするかについても学んでいます。

川上： 5つも挙げていただきました。英語を勉強したいとのことですが、私たちとしては、是非日本語も勉強していただきたいと思えますけどいかがでしょうか。(会場から拍手)ありがとうございます。

以上、前半では、3人の学習者の皆さんから色々説明をしていただきました。ありがとうございました。

学ぶことに真剣に取り組まれ、困難を乗り越え人生を切り開いてこられた方々だからこそ、自らの誇りをもっていらっしゃることがわかりました。現在は夢や目標をもちながら頑張ってる姿がたいへん印象的でした。

ここで本日お迎えしているコメンテータの西野月さんから発言をお願いしたいと思います。

西野さんは昨年参加されたカンボジアのスタディツアーでのことなどをお話いただけますでしょうか。

西野： まずこちらが、私が訪れたルエル寺子屋です。



昼間は午前と午後、2つの復学支援クラ

スが実施されていました。子ども達はみんな積極的に発言していて、教室は活気に満ちあふれていました。

そしてこの復学支援クラスに通う生徒の自宅を訪問しました。



この家庭では、女性や子どもたちが焼きバナナを作り、男性が街に売りに行くことで生計を立てていました。このようにバナナの葉の中にもち米とバナナを包んで、焼き鳥の網のようなもので焼きます。一つ 20 円ぐらいで売ります。



ルエル寺子屋では夜間識字クラスがあります。このクラスは昼間働いていて通えない大人や子どもそして昼も夜ももっと学びたいという子どもが、老若男女問わず通っています。

実はこの夜、激しいスコールに見舞われ私たちは、たいへんな悪路の中、車で寺子屋に向かいました。夜間識字クラスに通っている人たちは、徒歩で何 10 分もかけて寺子屋に通っているのです。この悪天候では「今夜は誰も来ないだろうな」と思っていたのですが、到着すると、このように教室にあふれるほど

の人びとがいたことに驚かされました。



さらに驚いたのは、夜間のクラスが、昼間のクラスよりも活気に満ちていたことです。これがこの時の授業の様子です。

ビデオに切り替えます。(自ら撮影してきた動画を上映)

私は実際にカンボジアに足を運び寺子屋を訪問したことで本やネットからの情報では得られないものを実感することができました。それは現地の人たちの学びたいという強い気持ちでした。ありがとうございました。

川上： ありがとうございます。それではこの後は、寺子屋で学ばれた 3 人に、寺子屋への思いを改めて聞いていきたいと思います。

では最初にカンボジアのサムナンさんからお願いいたします。

寺子屋で学んだ経験を踏まえて、色々な思いを持っていらっしゃると思いますが、カンボジアのこれからのために、寺子屋の最も大切な役割は何だと思えますか。

サムナン： 先ほども説明したように、寺子屋は、子どもや大人、学習の機会を得られない人たちに、重要な学びの場を提供しています。今後は、技術も発展し、仕事の内容も変わっていくので、寺子屋で、時代に合

寄せた職業訓練に近い機能を持てると良いのではないかと思います。

川上： ありがとうございます。

それではタラマティさんに伺います。ネパールにおいては、これからの寺子屋はどのような役割を果たすべきだとお考えですか。

タラマティ： やはり、女性が抱える問題や、カーストの差別も含め、村全体の発展のために果たす役割があると考えています。

川上： 具体的にはどんな役割でしょう

タラマティ： まず教育の発展に果たす役割が不可欠だと思います。それから女性たち、子どもたちの今後にも寺子屋が必要だと考えます。そして、人びとの暮らし全般の発展、これは女性の地位向上や子どもたちの保健・衛生のための寺子屋の活動等ですが、こういった活動も必要だと考えています。

さまざまな役割を担う寺子屋を、ネパールにもたらしてくれたことに対して、日本の皆さまに、心から「ありがとう」と言いたいです。

川上： ありがとうございます。ではハニーフさん、アフガニスタンにおいて、寺子屋は将来どのような役割を果たすべきだと思われるますか。

ハニーフ： 日本人たちが、教育に対し多々注力してくださっていることは、たいへんありがたいです。日本人の経験に学びながら、寺子屋が人間愛や思いやりの輪を広げる場所になればと心から願います。

また、寺子屋は偉大な場所だと思っています。なぜなら、男性と女性の間で差別が起こらないよう、女性が教育を受けられるようにすることができるからです。女性が教育を受けられるようになれば、その女性が将来結婚したあと、自分の子どもにも良い影響を与えることができるということを、私たちは現場で実感しています。

川上： ありがとうございます。

それでは、そろそろ時間が迫ってまいりましたので、まとめに入りたいと思います。

三人のお話を伺い、「寺子屋での学びがもたらしたもの」というテーマは、なかなか一言では語り尽くせないものがあると感じました。

ただ、それぞれの立場でたいへんなご苦労されたからこそ、学びに対して真摯に向き合われていらっしゃると思います。

そして、寺子屋でのさまざまな学びを通して得た知識が、個々人の知識の習得の枠にとどまることなく、地域社会において影響力を与える、“インフルエンサー”のような形にもなっていることに感銘を受けました。

寺子屋の今後の役割については、社会の変化やニーズに伴うスキルを人びとに提供していくこと：例えば職業訓練や、村全体の発展や課題に即した活動、女性や子どもたちを対象にした活動、暮らしを向上させるような活動、女性の地位向上、保健衛生などについても、学びを提供していく役割があるのではないかとのご指摘をいただきました。

最後にハニーフさんからは、識字率の低いアフガニスタンの女性たちにとって、寺子屋が、女性も男性も差別なく学べる場になってほしいという言葉もいただきました。私たちがこれまでも心がけてきたことですが、今後とも心していくべき事だと思いました。

本日、お話を伺えたのは、世界寺子屋運動の30年間で受益した人びと131万人分の、3人分だけでした。

皆様ご存知の通り、世界寺子屋運動は、結果が見えるまでにとっても時間がかかる運動でもあります。ですが、本日、私達の思いが確実に現地に届き、より良い地域社会の

構築に大きく貢献しているということを垣間
見ることができたことは、たいへんうれしく思
います。

ハニーフさん、タラマティさん、サムナンさ
んの 3 人の皆さまには、生まれて初めての
海外で、日本に来てくださいました。また月
曜日から試験があるにも関わらず、コメンテ
ータとして西野さんが出席してくれました。
皆さんの益々のご活躍を祈念して、このセッ
ション終えたいと思います。

いま一度 4 人の皆様に大きな拍手をお願
いいたします。どうもありがとうございました。

司会： ありがとうございました。皆様、“寺
子屋のいま”を感じ取っていただけたのでは
ないでしょうか。

最後にもう一度皆様に大きな拍手をお願
いいたします。本日はどうもありがとうござ
いました。西野さんもありがとうございました。

(文責: 関口広隆)

基調講演 1

「成人識字教育とノンフォーマル教育が 持続可能な開発目標達成に果たす貢献」

キーノートスピーカー：

ウルリケ・ハネマン：元ユネスコ生涯学習研究所プログラム・スペシャリスト(敬称略)

司会： 「成人識字教育とノンフォーマル教育が持続可能な開発目標達成に果たす貢献」というテーマで、元ユネスコ生涯学習研究所プログラム・スペシャリストのウルリケ・ハネマン様に、ご講演をいただきます。

ウルリケ・ハネマン博士は、ドイツのご出身です。教育と開発の専門家で、特に成人識字やノンフォーマル教育を中心的に研究されています。ご講演では、世界の生涯学習と識字、ノンフォーマル教育の現状と役割について整理いただくとともに、識字とノンフォーマル教育が SDGs の達成に貢献できるか、という視点でお話をいただきたいと思います。それではウルリケ・ハネマン様どうぞよろしくお願いいたします。

ハネマン： みなさまこんにちは。

まずこの度の主催者である、日本ユネスコ協会連盟そして東京都ユネスコ連絡協議会に、深く感謝の意を表します。今回この第 75 回ユネスコ運動全国大会に招待して頂き、また、経験豊富で、専門的な聴衆の皆様の前で、私たち全員にとってとても大切なテーマについて話すことができ、大変光栄に思っております。



世界寺子屋運動は、過去 30 年間平和の文化を促進するために最大限の取り組みを進めてこられて、大きな成功を収めてこられました。この平和の文化を発展させるためには、「人の心の中に平和のとりでを築く」がなくてはならないと言われます。また、教育に対する人権の実現、特に成人の識字教育とノンフォーマル教育に対する人権の実現が、不可欠です。

持続可能な開発のための 2030 アジェンダで唱えられた「SDGs(持続可能な開発目標)」から、一つ覚えておくべき重要なメッセ

ージがあるとすれば、それは平和なしには持続可能な開発はない、持続可能な開発なしには平和はありえない、ということです。学習の機会がないということは、経済・社会的な発展・環境の持続可能性や、永続的な平和と安定の進歩を損なうものです。生涯学習は、人間の発達と社会の変容において、重要な役割を果たします。学校教育を通じて、基本的な能力と教育を受ける機会が与えられなかった、または獲得できなかった全ての人々にとって、これは特に重要なテーマです。

世界寺子屋運動の長い歴史は、識字と計算能力が人間の脆弱性を減らし、持続可能性を高めることに役立つことを示しています。この講演で皆様にお伝えしたいひとつの重要なメッセージは何かと言うと、識字教育とノンフォーマル教育で、SDGs の全体的な目標である私たちの世界を変える可能性を最大限に実現するためには、生涯学習の視点が重要だということです。

以下順番に説明していききたいと思います。

- まず SDGs の達成に、識字教育とノンフォーマル教育はどのように役立つのか。
- 二番目に、識字教育とノンフォーマル教育の可能性を最大限に活用するために、どのように生活と学習をうまく組み合わせることができるか。
- 最後に、生涯学習の観点を、関連する政策や戦略によりよく統合するにはどうしたらいいか。

という問いに答えていききたいと思います。

-

私の講演は、以下の五つの部分から構成されています。

1. まず、生涯学習の機会はすべての人のためのものなのか。
2. 二つ目は、生涯学習の原則を、識字教育にもノンフォーマル教育にも適用するというのは、何を意味するのか。
3. 三つめは、識字教育とノンフォーマル教育は、SDGs の達成にどのように貢献できるか。
4. 四つ目は、識字教育・ノンフォーマル教育に生涯学習の原則を適用するにあたって、どういった傾向と課題があるか。
5. そして五つ目、今後の方向性です。

【1. 生涯学習の機会は全ての人のためのものなのか？】

こちらの画像をご覧ください。ネパールのカトマンズ近郊にあるファーピンの寺子屋（コミュニティ・ラーニングセンター）で、この大変ためになる絵を見ました。コーディネーターはこう説明してくれました。「人が最も長く学習をするのは成人期である」と。そして「その学習の大部分は、ノンフォーマルまたはインフォーマルな学びだ」という話でした。またコミュニティの発展のために成人学習と教育が、非常に重要だということも、彼は強調していました。先ほどのディスカッションでも強調されていた点です。この洞察は、持続

可能な開発のための新しいアジェンダに、どの程度反映されているのでしょうか。

国連がまとめた野心的な 2030 年に向けてのアジェンダ＝SDGs には、「我々の世界を変革する」という副題がついています。17 の SDGs ゴールそして 169 の関連するターゲットがあります。それを達成するためには、教育が不可欠です。そのため、生涯学習という概念が、教育に関わる SDG の 4 番に入っていて、国連のすべての加盟国は、「すべての人に包摂的かつ公正な質の高い教育を確保し生涯学習の機会を促進するものとする」と規定されています。言い換えれば、生涯学習の概念が SDG の 4 番の指針となっているわけです。

生涯学習とは何でしょうか。生涯学習とは、広義には「すべての年齢の人々のための学習活動をカバーする学習と生活を統合すること」と定義できます。あらゆる生活の文脈、つまり家庭・学校・職場・地域・社会などで、フォーマル、インフォーマル、ノンフォーマルに提供される教育で、幅広い学習のニーズや要求を満たすものと定義されています。

開放的・人道的・民主的な価値観の上に成り立っていることで、生涯学習は、あらゆる形態の教育において、基本原則・理念・概念的枠組みとなりました。そして、それらは人々の生活の質の向上を目指すものです。それには包括的かつあらゆる年齢の学習者に良く浸透した、誰もが柔軟に生涯学習キャリアを追求できる教育システムの発展が求められます。成人及び正式な教育から除外されてきた人々のニーズに対処するた

めに、特別な措置や資金の増加が推奨されています。しかしながら、そういった「すべての人のための生涯学習」の主張は、SDGs 目標 4.6 においては、「2030 年までに国連加盟国が全ての若者及び大多数の成人の男女が読み書き能力及び基本的計算能力を身につけられるようにする」と、範囲が限定的になるのです。

この中身をちょっと分析してみましょう。「全ての人のためにすべての人に教育を＝EFA」とは異なり、SDGs 目標 4.6 では、すべての成人を対象にしているとは言っておらず、相当な部分の成人、とのみ述べています。男性女性に等しく言及していて、女性だけを特に対象にするとは言ってはいません。また EFA の目標では、すべての成人の基礎教育と継続教育への公平なアクセスとありますが、SDGs ではそうなっていません。

他方 SDGs 目標 4.6 では、若者と計算という二つの追加的な要素が含まれています。そして識字の概念が、文章上明示的に拡大されています。その文言とは、「2030 年までに世界中のすべての若者と成人が基礎教育の終了時に達成されるレベルに相当する機能的識字能力？および計算能力を習熟すべきである」というものです。この定義は、EFA 目標 4 の精神を十分に反映しています。つまり全ての成人の基礎教育への公平なアクセスを伴った、成人識字率向上という概念を反映しているわけです。それだけではなく、達成されるべき最低限の識字と計算能力のレベルをも設定して、全ての人々がそれを達成すべきだといっているのです。つまり、識字能力と計算能力を独立して扱うのではな

く、より広範な基礎教育の枠組みの中に統合することの必要性を強調しています。識字能力は、「基礎教育の中核に位置し、他に依存しない学習のための不可欠な基盤」なのです。

ではここで基礎教育とは何なのかということを考えてみたいと思います。基礎教育というのは、少なくとも 9 年間の初等及び前期中等教育で構成され、無償で義務であるべき教育です。その後の更なる教育、あるいは積極的な社会参加のための備えをするものです。学ぶ能力・識字能力の獲得、計算能力、そして日常生活に適用される科学や技術の知識などの基本的なニーズを満たすものです。復学支援教育というのは、通常の年齢で基礎教育を修了できなかった人々に提供されます。

SDGs 目標 4.6 という識字に関するターゲットは、今世界に存在する三つのグローバルな定量的ターゲットの一つで、2030 年までにすべての人々の普遍的な基礎教育を実現すべきだというものです。他の二つというのは、4.1: 初等および中等教育のターゲット、それから 4.2: 就学前教育を少なくとも 1 年間やるべきというのですが、4.6 は、それらと並ぶターゲットなのです。

さて基礎教育というのは、様々な状況で意味が変わってきます。正式な学校教育の観点からみると、通常基礎教育というのは、国で規定された義務教育の全期間をカバーし、国家によって満たされるべき市民の権利だとみなされます。あらゆる市民がこの最低レベルの教育にアクセスができるべきなの

です。今日、通常 12 年間の後期中等教育を修了するというのは、脱工業化された国においては標準的になっています。しかしサハラ以南のアフリカの多くの国では、普遍的な初等教育すらまだ保証されていません。また 2030 年までに普遍的な基礎教育が達成される可能性も低いわけです。つまり、識字と計算の学習がどうあるべきか、他の学習分野とどう統合されるべきか、どういった最低能力水準あるいは達成水準を設定すべきか。これはそれぞれの国の状況・ニーズに合わせて設定しなければなりません。

各加盟国は、この若者・成人の識字に関して、SDGs 指標 4.6.1 が、どう達成されているか報告しなければならないことになっています。指標の定義は、ある年齢群で一定の識字と計算能力の達成度はどれくらいなのか、男女別に示すようになっています。単純に識字の人、非識字の人と分けるのではなくて、習熟度のレベルの連続体で、特定の文脈で変わってくるという考え方を反映しています。

【2. 生涯学習の原則を、識字教育にも、ノンフォーマル教育にも適用するというのは、何を意味するのか】

生涯学習の原則を、識字・ノンフォーマル教育に当てはめるといえるのはどういうことでしょうか。

生涯学習の原則を、ノンフォーマル教育・識字教育に適用するということは、識字の能力という、それこそ個人の生涯にわたる識字のコンペテンシーを発展させていく機会を提供することができるということです。もっ

と言うと、識字を主としたさまざまな教育において、学びと学習者を中心に据えることによって、その人の全人的な可能性を引き出すことを意味します。学びの文化と学びの需要を、有効な戦略と周囲に広がりうる環境で増進していくことは、生涯学習志向の識字を円滑にするもう一つの指標と言うことができます。幅広く申し上げるならば、この生涯学習の原則を活用していく上では、統合された識字、全人的な識字、分野全体にわたる識字、そして多分野のアプローチの識字を発展させていくことが必要になってきます。

私は生涯学習識字という分析上の枠組みを設けて、識字教育の政策・実践にどういうトレンド・問題があるのか、生涯学習の観点から検証してみました。それには三つの要素があり、互いに密接に関係しています。まず 1 番目、識字は生涯学習のプロセスであるということ。そして 2 番目、識字は生活上多くの側面を持つものであること。また 3 番目に、全人的な生涯学習システムの一部であるということです。順に紹介させていただきます。

まず、生涯学習のプロセスとしての識字についてですが、人びとの識字のコンピテンシーを伸ばしたらいい良くていたり、あるいはレベルを保っていいということ、継続教育の過程として見ていく必要があります。この過程は、就学前、就学中、就学後にも、また、フォーマルな学習や、ノンフォーマル・インフォーマルな学習をも通じて実現されます。識字とは異なったコンピテンシー段階ごとに学習を継続していくことで、生涯学習体系を展開していくなかで薦めていくことが求めら

れます。習熟の度合いが異なっている学習者がいる場合は、柔軟に学習を進めたり、別ルートでの学習をもったりすることが可能であるべきで、それにより学習者の継続意欲を促すものである必要があります。

次に、識字が生活の中での多面的な部分にわたる学習プロセスである、ということについてですが、このプロセスでは、様々な場に既に存在するリソースを活用します。識字を学ぼうという刺激のある学びの環境であり、またスキルを実践する機会を提供できる場でもあります。家庭、職場、コミュニティ、メディア、インターネットや、文化センター・図書室そして美術館など、様々な公共の場がそれに当たります。学習者という需要側からの識字環境を強化していくと、当然のことながら、人びとが日々の暮らしで欲していたり、必要としていたりする、経済、社会、文化上の活動に、識字をつなげていく必要が出てきます。

また、生涯学習システムに向けた一連の、全人的で、セクター全体もしくはセクター間に関わる改革の一環として識字に取り組むには、予防的アプローチを強化しながら、補完的な面および異なる年齢層とで、同時に取り組む必要があります。さらに、生活のすべての段階で、そして幅広い生活状況での学習をサポートする、柔軟に制度化された学習システムを作っていることが必要です。包括的な識字教育を他の重要な開発の優先事項につなげていくということを必然的に伴います。政治上の長期的取り組み・パートナーシップの発展・財務の安定は、識字学習を国家政策・計画、そして国家のプライオ

リティ優先順位として組み込む上で、大変重要な要素となります。

【3. 識字・ノンフォーマル教育は、どのように SDGs の達成に貢献しうるのでしょうか】

それではこの識字・ノンフォーマル教育は、どのように SDGs の達成に貢献しうるのでしょうか。

一般的な概念として、生涯学習は持続可能な開発に重要な役割を担っていると言われています。学びがなければ、今起きていたり、これから発生したりするであろう大きな地球上の課題に対処することはできません。それには行動や態度、もしくは心理的な姿勢を、大きく変えていく必要があるからです。

まず識字と簡単な計算や基礎教育という課題に取り組んで、将来自分自身で学んでいく基礎を作っていないと、SDGs を達成するのは困難になりましょう。

青年と成人の識字・ノンフォーマル基礎教育は、直接・間接的に、17 項目すべての SDGs 目標にわたり影響しています。いくつかの事例を、ご紹介させていただきたいと思えます。

様々な SDGs に対して、成人識字・ノンフォーマル基礎教育がインパクトを持っているという証拠はたくさんあります。SDG の 1 番目「あらゆる場所で、あらゆる形態の貧困に終止符を打つ」に対しては、既存のデータから、15 歳以上の成人があと 2 年長く学校で

学習できれば、6000 万人の人びとが貧困から救済されると推定されています。

また、母親の教育レベルが、子どもの栄養レベルと相関しているという別の証拠もあります。さらには識字・ノンフォーマル教育の延長線としてプログラムが行われると、農家の生産性を上げ、ひいては食糧安全保障、栄養状態の改善を目指すこともできます。これは SDGs の 2 番目となります。

さらには成人識字と基礎教育が、SDG 3 の「あらゆる年齢のすべての人々の健康的な生活を確保し、福祉を推進する」を達成することにポジティブな影響を与えるか、ということですが、母親が読むことができると、その子どもが 5 歳以上まで生き延びる可能性が 50%高まります。予防接種を受ける確率も 50%、そして学校に就学する子の数も 2 倍にもなります。母親の教育年数が 1 年上がるごとに、幼児死亡率が 5%から 10%と下がっていきます。

それ以外の事例も多くあります。これは単に一つの事例にしか過ぎませんが、生涯学習の原則を、識字・ノンフォーマル教育に当てはめるということが、人々の生活に影響を与えていくことに密接に関与してることです。

文字の読み書きのできる家族・学びのある家族、読み書きのできる人のいるコミュニティ・学びのあるコミュニティ、読み書きのできる社会・学びのある社会への働きかけということにもつながってきます。このような家族・コミュニティ・社会は、依存しない、自信

に満ちた、学びを実際の生活で活用できる学習者から成り立っているのです。

「コミュニティ・ラーニング・センター(CLCs)」で成人識字・ノンフォーマル教育プログラムを実施するのは、世界寺子屋運動で進められて来たアプローチですが、SDG の4つ目の目標群すべてを達成することに貢献できます。と同時に、貧困(SDG1)、栄養(SDG2)、健康と福祉(SDG5)、ジェンダーの平等(SDG5)、水と衛生(SDG6)、働きがいある人間らしい仕事(SDG8)、持続可能なコミュニティ(SDG11)、そして平和で包摂的な社会(SDG16)にも貢献できます。

世代間をつないだ識字と生涯学習のアプローチを用いた家族識字・学習プログラムを通し、識字とノンフォーマル教育を提供していくことは、SDG4の各ターゲット(4.1、4.2、4.5、4.6、4.7)の達成に貢献します。と同時に、SDG1(貧困をなくそう)、SDG2(飢餓にゼロに)、SDG3(すべての人に健康と福祉を)、SDG5(ジェンダー平等を実現しよう)、SDG8(働きがいも、経済成長も)、SDG10(人や国の不平等をなくそう)、そしてSDG16(平等と公正をすべての人に)にも貢献します。特に、SDG5とSDG8は、それぞれの国における格差を払拭するということ、それからSDG10は、国内の不平等の削減さらに平和で包摂的な社会作りにつながってきます。

【4. 識字教育・ノンフォーマル教育に生涯学習の原則を適用するにあたって、どういった傾向と課題があるか】

さて、この中で何をしていくのかということを考えていきましょう。そもそも識字教育とノンフォーマル教育に、生涯学習原則を当てはめていくことに対しては、どんな傾向と課題が特定できるだろうかということを考えなくてはなりません。

そもそも生涯学習の概念には、共通の理解はありません。多くの場合まだ成人教育と同一視されています。識字についても同様です。生涯学習のプロセスとして識字に取り組む方法についても、共通の理解はまだないと言わねばなりません。4.1 及び 4.2 を除くと、全ての教育に関する 2030 アジェンダのターゲットは、青少年及び成人を対象としています。しかしこれらのグループは、例えば政策とか計画とか戦略文書においてはあまり目立ってはいません。

2015 年以降の顕著な傾向の一つとして考えられるのは、学習成果それから読解力と計算力の測定に重点が置かれているということです。ただしこれは主に学校での子供の早期読解力には当てはまるものです。

識字能力に大きな課題を抱えている多くの国は、予算が厳しい状況にあります。その結果、子どもや青年向け初等中等教育と、青年向け職業訓練、それから高等教育という狭い分野に焦点が絞られています。多くの場合、評価を実施したり、成果を重視したりするアプローチと組み合わされて、職業教育重視主義および画一化に向かう傾向が見られます。

識字と識字を計測するアプローチの概念はいろいろあり、意見の違いがあります。ほとんどの国では推定に基づいた識字率を報告しています。例えば最終学歴や世帯調査、人口調査データに基づいて推定を行うのです。一方成人の識字や計算能力のレベルを判断するために、テストに基づいて行うテストベースの調査を利用し始めている国もあります。こうした識字に対する異なるアプローチは、SDGs ターゲット 4.6 の進捗を計画したり、実施したり、モニターしたりする上での課題をもたらしています。

それぞれの国の現状の違い、学習ニーズには多様なものがあること、そして、成人識字プログラムが複雑で多様な特性を持っていることゆえ、識字の課題を解決することができますが厄介になってきます。学習者や政府の実践に見合うよう、テスト項目用に、何らかの形の基準や、皆の納得するインディケータ、実力のレベルといったものを、柔軟に当てはめていく必要があります。

ユネスコの「効果的な識字・計算実践データベース(LitBase)」に蓄積された 200 以上の成人識字教育プログラムの例を分析すると、識字・計算というものが、大抵、健康、人権、市民権、リーダーシップ、ジェンダー、子育て、環境保全といった様々な「生活上のスキル・技術」につながっているということが明らかになります。

ほとんどの識字プログラムは、持続可能な開発の三つの側面(注: 経済、社会、環境)のうち、少なくとも二つと組み合わせるということを目指しています。しかしそれに焦点

を当てているだけというものはほとんどありません。

学習を人々の生活に近づけるといふ、生涯学習の原則には、すなわち自然にお互いにつながっているものをまとめるということが含まれてきますが、それには組み合わせを行う、統合を試みる必要となってきます。例えば家庭内識字や家庭内学習など、識字・ノンフォーマル教育を統合していこうというアプローチには、たくさんの例があります。家庭内学習のプログラムは、教育システムの様々な構成要素、すなわち幼児教育であるとか就学前教育、そして初等教育、成人教育／コミュニティ教育などを統合していくというものです。これらを組み合わせると。家庭での学習とつなげていくということです。

またその他の識字の統合アプローチ例としては、健康・栄養及び環境への意識化が挙げられます。数多ある政策・戦略文書では、例えば収入向上活動とか実践的なスキルトレーニングや、社会経済開発プログラムを、広く識字に関連付けています。これが実際に政策の中にどのくらいあって、どのくらい実際に現地で実行されているかということにはわかりませんが、こういった分析があるということを今申し上げております。このようなプログラムは、通常は小規模なものがほとんどで、多くの場合 NGO や自主的なコミュニティ・ラーニング・センターで実施されているものです。

しかし識字教育に関しては、いくつかの長期的な課題が継続していることがわかります。識字の政策と実践の長い歴史を振り返

っていますと、特定の課題が繰り返し発生していることがわかります。意思決定者は往々にして、作業の大きさとその複雑さを過小評価してしまいます。例えば、学習プロセスの継続性、関連する学習や開発分野と識字・計算能力の組み合わせ、関連分野学習の機会を国家の学習システムへと統合していくことなどは、ほとんど考慮されていません。全体として介入への投資が少なすぎるのです。

【5. 今後の方向性】

「すべての人に教育を(=EFA)」という目標が終わってから四年経っているのですが、この EFA 目標 4 への中心的批判は、SDG 目標 4.6 にも当てはまります。EFA 目標 4 と SDG 目標 4.6 は、両方とも全ての青少年と成人の識字率を高めるという野心的な目標に欠けているのです。基礎教育後への新 2030 教育アジェンダは、多くの国にとって非常に野心的すぎるものです。ところが、EFA 目標 4 と比較して、SDG 4.6 の識字率ターゲットの場合、この野心さのレベルはかなり低くなっています。

さらには、識字の目標と、その他目標との間に明確な繋がりが相互の連携が見られません。成人識字は、教育における部門全体のアプローチでの不可欠の要素としてではなく、独立で単独の活動として提示されています。しかし識字の課題は、就学前・初等教育・中等教育そして青少年及び成人教育というすべてのサブセクター、および子ども、若者、成人といったすべての年齢集団で、取り組んでいく必要があります。

最後になりますが、識字目標を設定する際に課題になるのは、初歩的な識字スキルが十分であるかどうかと考えてしまうということです。

学習の継続性や、最低限の基礎教育の習熟度を達成することの重要性は、EFA 目標 4 では不十分な記載に止まり、また SDG 目標 4.6 の場合は、本文ではなく説明文の中に追いやられています。すなわち識字能力と計算能力というのは、基礎教育の一部として明確に特定されていないのです。これは非常に大きな問題であると私は考えています。

生涯学習がその可能性を広げることができることへの希望、これももちろんあります。それと共に懸念もあります。若者と成人の識字が、教育セクター全体の政策や戦略、計画に含まれず、無視され続けているということ。これが大きな懸念の対象です。識字・ノンフォーマル教育は SDGs の達成に重要な役割を果たします。しかしそのためには、識字・ノンフォーマル教育を、生涯学習の観点から捉え直し、統合されたマルチセクターのアプローチを通じて、人々の生活に近づけていくことができなくてははいけません。それができて初めて、私たちは教育によって自分たちの生活を変える可能性を、最大限に引き出すことができます。これが私の最も重要だと考えているメッセージでありまずし、これは最初に申し上げた通りです。

そこでこの先どのように進んでいったら良いだろうかということにつき、6 項目にまとめてみました。

- (1) まず、恵まれない人々とコミュニティに対して、優先的に焦点を当てること。これは関係者の使命と責任を明確化しつつ、セクター間での協力を通じた、全人的な対応を作成する必要につながってきます。
- (2) 政策レベルで識字事業実施することが緊急の課題であるということは、何度も強調する必要がありますが、ただ非現実的な目標を立ててはいけません。活動の継続性と質、活動の全体的な質を上げていくためには、短期的な解決に走ることがあってはなりません。
- (3) 若者・成人識字向けの生涯学習戦略では、識字と学習が、学習者の生活にどのように適合するだろうか、つまり学習者にとって何を意味するのか、潜在的な興味はどこに生まれてくるだろうか、彼らが直面するであろう困難はどこにあるか、ということをしかりと理解する必要があります。もっと耳を傾けて学習者の声を聞くということ。これが重要です
- (4) 特定の学習者や地域社会のニーズに合わせて、学習機会の状況を考え直して作っていく必要があります。そのためには、すべての人の最低限の中核となるコンピテンシー(つまり基礎教育)を保

証し、公的部門の責任と紐付けることが必要です。

- (5) そして、成人識字を必要とする側についても検討する必要があります。識字と学習に対する統合的なアプローチ、さらにまた識字を発展させていくような環境を作り出していくよう、進めていく必要があります。識字を考えるにあたって、もっとクリエイティブに考えていきましょう。そしてその上でもっと魅力的な世界を作っていく必要があります。それはもう識字と呼ぶ必要もないのかもしれないし、もっと違う名前を付けた方が良いのかもしれないとすら思います。
- (6) これらの状況に基づく政策とプログラムを支援するために、識字・ノンフォーマル教育が、SDGs への変革と達成に、どのように貢献できるかについて、更なる研究が必要であると考えます。

以上です、ありがとうございました。

(文責: 関口広隆)

パネルディスカッション

「世界寺子屋運動と SDGs」

パネリスト

北村友人 東京大学大学院教育学研究科准教授

高木要志男 富山ユネスコ協会会長

池田昌代 ”世界寺子屋運動”名古屋実行委員会事務局(公益財団法人名古屋国際センター交流協力課)

アブドゥル・モティン SOJAG 代表(バングラデシュ NGO)

モデレータ

笹井宏益 玉川大学学術研究所高等教育開発センター教授

(敬称略)

司会: 皆様、お待たせいたしました。それではこれより。パネル・ディスカッション「世界寺子屋運動と SDGs」をスタートさせていただきます。

まずは本日のパネリストとモデレータをご紹介します。まずお一人目は、東京大学大学院教育学研究科准教授北村友人様。お二人目は、富山ユネスコ協会会長高木要志男様。三人目は、”世界寺子屋運動”名古屋実行委員会事務局、公益財団法人名古屋国際センター交流協力課池田昌代様。最後にバングラディッシュ SOJAG 代表アブドゥル・モティン様。皆様よろしく願いいたします。

そして本日のモデレータは、玉川大学学術研究所高等教育開発センター教授で、日本ユネスコ協会連盟世界寺子屋部会部会長の笹井宏益様でございます。

この後は笹井様どうぞよろしくお願いいたします。



笹井: 皆さんこんにちは。本日は、寺子屋一人ひとりの学習者の方からの成果や意義を、先ほどお話しいただきました。また、これからの方向性については、ウルリケ・ハネマンさんからご指摘いただきました。

これから始まるパネル・ディスカッションでは、改めて色々な分野、地域、学校で活動している方から見て、世界寺子屋運動ってどういうもので、これからどういう方向にしたらよいかについてお話しいただいて、みなさんと一緒に今後の方向性を探っていける、そういうセッションにできたらなって思っております。

まず始めに各パネリストの方からお話を頂いて、その後ディスカッションという形にしたいと思います。

トップバッターは、東京大学の北村先生からお願いしたいと思います。



北村： こんにちは、東京大学の北村です。よろしくお願いいたします。

先ほど千葉先生が、ジョムティエン会議の話を読みました。ジョムティエン会議のあった 1990 年に、「万人のための教育 Education for all EFA」という国際的な運動が始まりました。これは、途上国に基礎教育を普及する運動で、ユネスコが 25 年間にわたってコーディネーション行っていました。私は、2000 年から 2003 年にかけて、ユネスコで EFA をコーディネートするユニットで勤務しておりました。その後大学に移りまして、国際的な議論・研究、そして実務にも関わっています。

そういう視点から、この SDGs という目標を掲げた時代を見ると、この時代って一言で言えば先を見通すことができない時代だと思います。「ソサエティ 5.0」とか「Industry4.0」とかさまざま言われていますが、先がどうなるのか分からない。ハネマンさんも千葉先生とのやり取りの中で喋っていましたが、何を学ばばいいかわからない。

このように非常に複雑な時代に、どんな学びを通してどのような資質や能力を、子どもたちは身につけていくべきか。子どもに限らず大人も含めて、世界寺子屋運動に何が求められているのか、私見になりますけれども個人的な意見を簡単にさせていただきたいと思います。

2000 年ミレニアム開発目標は、途上国を対象として合意され、その後 SDGs が 2015 年に採択さ

れたのは、皆様ご承知の通りだと思います。この MDGs と SDGs は、根底にあるものは共通しているんじゃないかと思っています。

MDGsとSDGsに共通する視点



THE UNIVERSITY OF TOKYO

©北村友人

4

この上方にあるのは、人間に関わる領域、下方にあるのは社会に関わる領域。左側が成長、右側が生存とか存続です。このように図示すると MDGs の 8 つのゴールも、SDGs の 17 のゴールも、人間と社会がどのように存続しながら、なおかつ成長して行けるのか、そしてそれを通して持続可能な社会を実現して行くにはどうしたらいいのか、ということを考える国際目標だったと思います。

持続可能な開発とか持続可能な社会と言ったとき、我々は「世代間の公正」と「世代内の公正」という問題に関して考えます。今の世代が豊かな暮らしをすると同時に、将来の世代も豊かに暮らせるようにする。こう考えた時に、持続不可能な状況というのは、豊かな生活を送ることができない人たちがいて、もうすでに起こっている、または起こりつつあるわけです。

世代内の公正については、まさに日本のように豊かな国のなかでも、もちろん格差の問題が最近特に顕在化してきています。ただ、途上国と比べた時には、世界には非常に厳しい状況で生きている人たちがいて、これはもう持続不可能な状況なのです。

それからまた、環境破壊をしたり、天然資源等を使い尽くしてしまったりすると、将来の世代が持続不可能になるということを、世代間の公正と言って

いるわけです。
この目標もしくは概念について、よく皆さん、特に真面目な方ほど誤解しているんですが、将来の世代のために我慢しなきゃいけない、例えば、石油を使いすぎちゃだめだ、我慢しようとかと考えているようです。でもガマンって言葉、実はどこにも入っていないんですね。みんな豊かで自分たちの生活を日々満喫して享受できる、そういうことが持続可能です。我慢してしまったら、実はもうその時点で持続不可能に陥っているかもしれません。だから考え方としては、みんなが豊かでいられることをどうしたら実現できるのかっていうのが、この目標が掲げていることです。そこで誰かが我慢を強いられたりすることではないことを申し上げます。

ただその中で、限られた資源をどういう風に配分して、誰一人取り残さないようにするのかを、SDGs は目指しているわけですが、そのような SDGs を実現するためには、やはりそれを担う社会を作っていく人を育てていくことが必要で、新しい時代の学習観とか学びのあり方を、どのような資質とか能力を身につけるべきかという課題があります。こういった時代に求められる資質や能力ってどんなものでしょう。

「ソサエティ 5.0」というのを最近の日本政府はよく言っていますが、それがなんだかはよく分かりません。みんな実はわからないのです。どんな時代になるのかよくわからないのに、そこを生き延びてそこを支える人材育てろと言われても、どんな人がそんな人なのかは、誰も実は分からないわけです。

これは内閣府が出している報告書から取ってきたもので、どんな能力がこれからの時代必要とされているか三つ示しています。

①、②、③とありますが、これらはそんな新しい能力ではありません。

求められる資質・能力

- **Society 5.0**: 人と機械が複雑かつ高度に関係し合う社会
- 知識・技能、思考力・判断力・表現力をベースとして、言葉や文化、時間や場所を超えながらも**自己の主体性**を軸にした学びに向かう姿勢
- 全体をシステムとして**デザインする力**

- ① 文章や情報を正確に読み解き、対話する力
- ② 科学的に思考・吟味し、活用する力
- ③ 価値を見つけ出す感性と力、好奇心・探求力



©北村友人 8

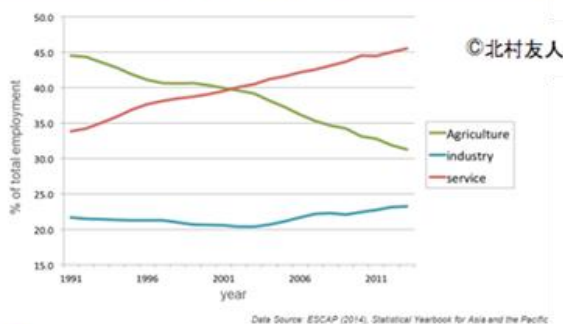
例えば日本であれば学校教育を通して、今までもずっとこういった能力を、身につけてもらおうとしてきたのです。世界寺子屋運動の中で各地の寺子屋でやっている学びというのも、基本的にはこういった能力を育むための学びをしていると思います。

ということは時代がどんなに複雑になったり、先が見通せなくなったりしても、人間という存在がいきなり大きく変わるわけではないのです。やはり人間にとって一番基本的な能力を、これからもまずは大切にしていかなければいけないということを、僕らは忘れちゃいけないと思います。

最近の SDGs の話とか、ソサエティ 5.0 とか、あるいは AI がこれから発達してシンギュラリティが起こって AI に乗っ取られるとか、色々な不安ばかり書かたてられています。しかし、人間って存在がそんなに大きくいきなり変わるわけではなくて、また、人間がもっている能力はまだまだ十分に使われていないものもたくさんあるわけで、その能力を育むために、今まで教育のなかで大事にしてきた能力を、まずは大切にすることを第一に考えなければいけないんだと思います。

ただ、とは言いましても、社会はやっぱり非常に変化しています。産業構造もどんどん変化して、今サービスセクターに従事する人たちの人数が、たくさん増えてきている。労働で求められるスキルというの、非常に複雑な作業を求められる。

産業種別による雇用の変化 (アジア太平洋地域)



THE UNIVERSITY OF TOKYO

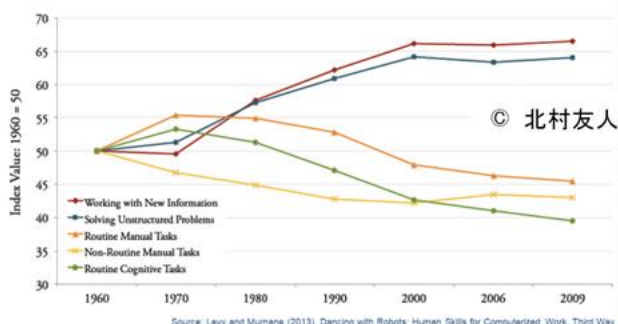
9

これはちょっと前にオクスフォード大学の研究者チームが出した報告書で、2030 年ぐらいには 2015 年にある職業の半分ぐらいがなくなるでしょう、なんてことが言われていますが、これってすごくリアルな話でもあります。

今から 30 年前に寺子屋運動が始まったときと今を比べてみると、多くの職業が当時はありませんでした。今あってないもの。それがこの二つですね。インターネットに関するもの、それから携帯電話に関するような職業。社会がどんどん変化して、その中で技術の革新がどんどんどんどん急ペースで進む中で求められる能力とか資質というのは、やはりちょっと変化してきているところがあるかもしれない。

求められるスキルの変化

アメリカにおける労働需要の変化

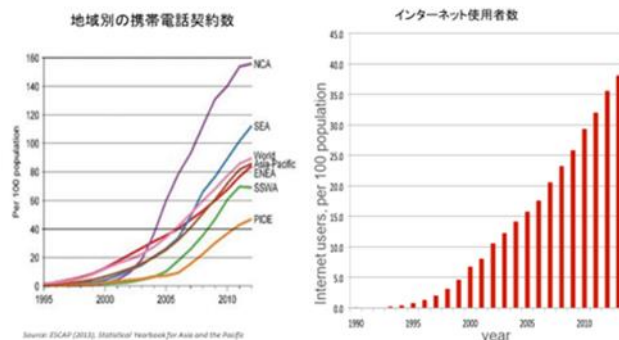


THE UNIVERSITY OF TOKYO

10

技術革新とその急速な拡がり

(アジア太平洋地域)



THE UNIVERSITY OF TOKYO

©北村友人

じゃあそこでは何が求められているのかというと、かつてはそれを身につければ、10 年 20 年役に立つような知識やスキルがあったと思うんですが、今はそういったものがどんどん古くなってしまふ。ということは、何か知識やスキルを身につけたからもう学びを止めていいわけじゃない。これ先ほどハネマンさんがいっていたとおり、ライフロングに、一生涯を通じて学び続けなければいけない。また正解が一つとは限らない。いくつもあるかもしれない。場合によっては正解もないかもしれない。そういう中で学びというのは、やはり学び方を学ぶことです。知識を身につけたい、スキルを身につけるだけ、というよりは、そういった知識やスキルはどのように学ぶか、という学び方を学ぶことです。

皆さんもよくご存知かと思いますが、このことを 90 年代半ばにユネスコでは、「学びの四つの柱」ということで示しました。四つの柱の一番上は知識。知識を学ぶと二番目はスキル、そして三番目は、知識とスキルを使って他者とともに生きることを学ぶ。そして自分らしく、人間らしく生きる。すごくシンプルですが、すごく影響力のあった概念だと思います。

ただこの概念は、今少し見方を変えなければいけない。以前はすごく静的な学びのイメージですね。知識やスキルがあれば、一回身につければ体系化された知識をつけられるからしばらくずっと使え、

という。でも今それがどんどんどんどん変わっていく。動的ダイナミックな学びが必要になっているからです。

ですからどんどんどんどん新しい知識やスキルを身につける箱のことを、ユネスコでは自分自身や社会を変革する、変容することを学ぶという風に、今提唱しています。

ただ忘れてはいけないのは、先ほどソサエティ 5.0 のところで対話する力とか、読んで文章を読んで理解する力とか、探究心とかっていうものをあげましたが、基本的には人間の能力っていうのは、そんなに大きく変わるわけではない。ただ学びのあり方を変えていくことが大事なのです。

それから実は、もう一つ変えなきゃいけないことっていうのがあります。先ほど持続可能な開発の概念の中で、我慢するっていうことではなく、いかに皆が豊かになるかって話をしましたが、最近こんな議論が起こっています。フューチャーデザインっていいんですが、いかに人間は我慢することができるかっていう議論です。

我慢しないってことは大事で、みんなが豊かであることが大事なのですが、やっぱり資源が限られたりしていく中で、どこかで我慢も必要になってくる。その時に人というのはどうやって我慢するのだろうかっていうことを、倫理学者、哲学者、環境学者、そして経済学者といった人たちが真剣に今議論しているんですね。

皆さん日常の中で、自分の家族のためとか親しい友人のためには、色々我慢することあってもそれが苦にならないでしょう。例えば僕は娘が今 12 歳ですが、娘のためなら、娘の大好物ハンバーグを作って、娘がもっと食べたいって言ってもおかわりなかったら、僕の方も「じゃ食べろ」って言って食べさせて、僕はそれを喜ぶわけですね。そういう風に、我慢しながら人間は喜ぶことができるって言うのは、実はこれ人間のすごい特性だと思います。

ただその我慢を、家族であるとか同じ社会に生きている人にはできても、じゃあ今まで見たことも

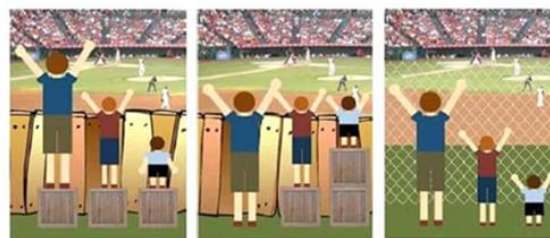
会ったこともないような人たちにも、同じようにできるのかっていうのを問われているのが、これからの時代。そういった我慢の喜びというものを学ぶってことも、これからの学びにおいて非常に重要になってくるんじゃないかなとも思っています。

学びの中で、今身近なところで我慢できる、それをどこまで広げていってかかっていう話をしました。先ほど千葉先生がおっしゃったように、具体的な色々成果があるものから出発して、それからハネマンさんがおっしゃっていたような大きな抽象的な目標とか目指しているところにたどり着く。その出発はすごく具体的な所っていうようなことをおっしゃっていましたが、同じことが言えると思います。学びそのものは、やはり身近なところからですね。身近なところで子どもたちにしても、大人にしても、自分で理解できることから学ぶ。

その機会を一番作ってきたのが、世界寺子屋運動なんじゃないかなと思います。いきなり学校にそれまで行ったこともない人が、寺子屋のようなところで、様々に地域に根ざした学びを積み重ねるなんて言うことが、その後の学校教育に参加する上でもすごく役に立つなんて言う経験もあるかと思えます。そして、その中でどのようにリテラシーを身につけていくのか、これが非常に大事なことじゃないかなと思います。

最後に、僕が最近よく紹介するスライドをご紹介します。こういった学びを通して持続可能な社会を作っていきたいんです。

資源の配分・再配分



平等 (Equality)

公正 (Equity)

システムの転換

Source: Direct Course (<http://directcourseonline.com/equality-justice-inclusion/>)

かつては資源をどういうふうに分けるかということが大事だったんですが、SDGs ではそれを後世に正しく分けるって事が大事だって言う風に言われています。これを見ればすぐわかりますよね。ただこの右の人の立場になってみると、たとえば、高所恐怖症だったとすると、こんなふうだと安心して野球の試合見られないかもしれない。あるいは心の優しい人だと、なんだか他の人に気兼ねしちゃうかもしれない。自分だけたくさんもらってしまっただけ。

公正な学びってというのは、ある時点ではすごく大切なことですし、これからもやっていかなければいけないんですが、それと同時に最終的には、こうしてしまえばいいと。システムそのものが変わってしまえば、皆が本当に対等な立場で学び合える。

世界寺子屋運動ってというのは、僕のイメージでは、実はこの右の 3 番目のものなんですね。これを理想とされているんじゃないかなと。今までの学びの在り方とか教育のあり方っていうものに対して、新しいシステムで新しい学びのあり方を提供しよう。そうすると学校教育に必要なだけの色んなリソースが必ずしもないところでも、高い質の学びが実現する。そういった学びを、今まで目指して来られてきたんじゃないかなと考えています。

これからも色々な形で学びのあり方そのものは変わっていくと思いますが、この右端目指して世界寺子屋運動がさらに発展していくことをすごく期待しているということを、最後の僕のコメントにして、まずはこの発表を終わらせていただきます。ありがとうございます。

笹井： どうもありがとうございました。続きまして富山ユネスコ協会の高木さんをお願いしたいんですけども、日ごろからいつも寺子屋運動の書きそんじハガキキャンペーン等に協力いただきまして、ありがとうございます。高木さんご自身は教員の生活が長くて、その仕事を通して、あるいは地域での活動を通して、寺子屋運動をどう言う風に捉えているのか、話していただきたいと思います。よろしく願います。



高木： 今紹介にあったように私は元教員で、ただいまユネスコ協会に関わらせていただいています。私はずっと教員で、65 歳で退職して 5 年間経っているんですけども、自分自身もそうですし子どもたちもそうですが、何か学び続けるって言うことが、自分を見つめることになるし、また新しい出会いがあったり、発見があったりするかなと思っています。それで、学び続けるというのは、実践に他ならないのかなという風に勝手に結論付けております。

今日は、学び続けること、特にユネスコ活動を学ぶことで、児童生徒にや子どもに何が響くのかということ、それと世界寺子屋運動と SDGs の関連性（これが一番難しいなと思っているんですけども）、こういったことを少しお話ししたいと思っております。

最後に勤めた学校がユネスコスクールでして、そこに行った時に、ユネスコスクールとして何ができるかなって思って色々職員と話しする中で、まず自分自身がユネスコのことを勉強しなくちゃいけないだろうと思ひまして、ユネスコ協会に入らせてもらいました。ここにもいらっしやいますが当時の会

長の松波さんが、色々ユネスコスクールに支援して下さったんですね。「スタディツアーに行く時にこんなものを持っていきたいので、子どもたちなんかあるかね」とか、あるいは、帰ってきた時にその様子を話して下さったりとか。そういうことが非常にありがたくて、自分も学びたいという事が一つありました。もう一つは、2018 年の 3 月に、カンボジア寺子屋モニタリングツアーに行きませんかと誘われて、参加をさせていただきました。

ちょっとびっくりしたのですが、北村先生と同じスライドを持ってきました。

何故このスライドを持って来たかっていうことな

学ぶとは・・・何を学ぶのか

●ドロール報告書（1996年）『秘められた宝』

- 知ることを学ぶ learning to know
- 為すことを学ぶ learning to do
- 共に生きることを学ぶ learning to together
- 人間として生きることを学ぶ learning to ④高木要志男

んですけど、学び続けるということがどういうことなのかってことを考えた時、中西進先生という文学者・国文学者のエッセイの中に、to be が書いてあったのですね。To be という語があって、また他にもあるよ、っていうことも書いてあったので、早速図書館に行って当たりました。この日本語に訳されたのを見て、改めて生涯教育というのを考えなければいけないなという風に思いました。

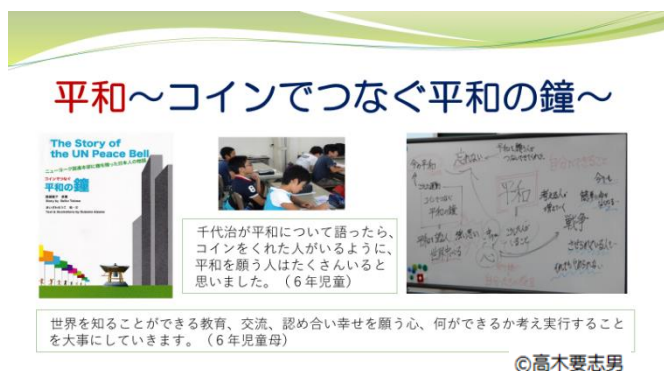
私はユネスコの活動を学ぶユネスコスクールの学校にいて、職員の皆さんとどんな授業がいいのかね、教育計画がいいのかねと考える中でたどり着いたのは、非常に漠然としたでっかいことなんですけど、生きる構えを学ぶっていうことかなと思うんですね。

子どもは高学年になっていけば自立心が芽生えます。特に 3、4 年生あたりは旺盛な興味関心があって感受性が豊かなので、これを使わない手はな

という、子どもが持っている可能性といったものを感じました。

ここからは退職してからですけども、ユネスコの活動する中で、どうしても教員上りというのは、授業をしたがりですので、何人かとご相談させていただきながら、ユネスコ教室っていうのをしました。「コインでつなぐ平和の鐘」という本があるので、これを子どもたちに読み聞かせて、スライド方式で話してあげるとかですね。世界寺子屋運動リーフレット作りをやったり、出前授業をやったり、地域活動に参加したりします。

ちょっと分かりにくいスライドなのですが、去年はこれで平和って事をテーマにやりました。



来ていた子たちは 5、6 年生でしたけど、平和って概念は難しいんですね。難しいので、こういうことを触れてある絵本とかこういうので考えられないかなと思いました。

リーフレット作りですが、これは子どもたちが作ったものです。



まだ途中過程のものもたくさんあります。小学校高学年にと案内出したんだけど、なぜか小学校2年生も中学生の子も来ました。リーフレット作りの中で私が何に感心したかというと、中学校の生徒が、「小学生もよく理解していて、みんなすごくいい作品だと思う」って素直に書くんですね。「ユネスコ教室も何回もすることでもっと協力してくれる人が増えると思う」、「人の役に立てるように小学生の皆さんと協力していきたい」と。この中学校はすぐ隣に小学校がある山間の学校で、風土がそうさせるという動きもあるんですけども、小学生から中学生までいても、何らかのものができのかなという感触を掴みました。



ちょっと細いんですが、「平和の鐘を鳴らそう」の運動の時に、ユネスコスクールの子たちがボランティアをしたりしてくれました。真ん中に写っている子たちはユネスコスクールの子じゃなくて、たまたま来ていた生徒なんですけども、学校で事前に平和ってことをテーマに学習した感想の一端を述べている。

右は、富山国際大学の学生の皆さんが、SDG かるたというのを作って、それを色々なところに行ってやるというものです。

子どもたちに何が響くかということですが、今日もビデオに倉木麻衣さん出ていました。作ったバスケットといった実物を見せるとか、映像とか実物とかそういうものが、やっぱり非常にいいのかなと思いますね。直接(現地に)行けば一番いいんだろうけれども、なかなか行けないので、実

際のものを見る、触るのがいいのかと思っています。

例えば、カンボジアのことを紹介するときはどういう紹介の仕方がいかなと考えると、映像見せるなど色々あるんですが、5、6年生であれば、この国旗の色が何を表しているとか、色や形が表すものが何かってようなことを子どもたちに言うのです。彼らに想像させると結構的を外したようなことを言います。



これはユネスコ協会連盟のパンフレットからとってきたものですが、当然想像させるとこんなことが出てくる。私が面白いなと思ったのは、(文字の読み書きができないと何が起こるか聞いたときに)、見積書を作れないっていう子がいたことです。おそらく会社みたいなお店をしているお子さんらしくて、そんなことを言っていました。

現地の人々の体験談を紹介します。復学支援のクラスに行った時だったか、現地の子どもたちに聞くと、楽しいって言うんですね。もう汗だくでやっていて、中学・高校にも行きたい、給食を楽しみにしているって言うんですね、そんな生の言葉が聞けて良かったなと思います。毎日楽しそうにやっているんです。



富山での実践に戻ると、これは先生のお家でやっているんですけど、とっても楽しそうですね。和気あいあいとして先生、おじさん、おばさんが掛け合いしながらやっていました。これかるたをやったやつです。絵札を取って、絵札があらわす問題や解決策を話し合う形です。

僕の答えは、実践としての寺子屋運動。SDGsは難しくてよくわからないですけど、生きることを根幹とした実感のある交流。人として生きることを学び続けるユネスコです。

笹井： はい。それでは続きまして、名古屋国際センターの池田さんからお話を伺いたと思います。池田さんは合わせて世界寺子屋運動名古屋実行委員会事務局の方で、我々も本当にお世話になっています。ありがとうございます。

そういったご経験の中から色々話しいただけると
思います。宜しく願い致します。



池田： 名古屋国際センターの交流協力課の池田と申します。名古屋国際センター交流協力課の職員が、“世界寺子屋運動”名古屋実行委員会の事務局担当を致しております。最初のところで笹井先生が、「今日は色々な専門家の方が…」とおっしゃられていましたが、私はこの事業の担当になりましたのはここ数年ですので、会場にいらっしゃる皆さんの方が、この運動に関しては詳しいことと思います。今日は名古屋国際センターと、名古屋実行委員会についてお話しさせていただきたいと思います。

ちなみに、スライドの中でも何枚か出てくるこの子は「はがきちゃん」と言います。世界寺子屋運動名古屋実行委員会のマスコットキャラクターです。



イベント等に行く、大きな着ぐるみがあるのですが、ずっと使っているのが本当に汚れてしまっ

て、「書きそんじハガキ」のようになってしまったのですが、とても人気のあるキャラクターでございます。今日はセンター職員が手作りしましたこの“ミニ・はがきちゃん”が、私の応援と一緒に名古屋から参りました。

まず名古屋国際センターについて少しだけ触れさせていただきます。名古屋国際センターは地域の国際化の促進を目的に、1984年に設立しました名古屋市の外郭団体でございます。相談事業、多文化共生事業、国際交流・国際協力の事業、そして貸施設と留学生会館の運営を致しております。

プログラムに世界寺子屋運動 30 年の歩みというものが載っておりましたけれど、名古屋国際センターは、1990年6月に私どものホールで開催をされました国際識字年記念の「世界寺子屋運動 NGO フォーラム名古屋 1990」の実行委員会に参加をいたしまして、これに向けまして同年の3月から書きそんじハガキキャンペーンを開始いたしました。

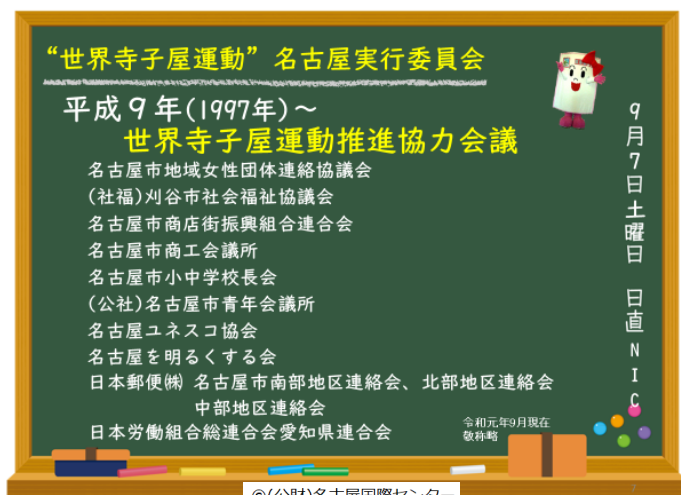


翌年の 1991 年には、このフォーラム実行委員会を発展的に解消いたしまして、“世界寺子屋運動”名古屋実行委員会を結成いたしました。以来私ども名古屋国際センターが実行委員会の事務局を務めております。

イベントブースへの出展の他、皆様のお手元にも資料として入れていただきました独自のリーフレット、チラシ、それから回収箱などを作成、配布をいたしまして、書きそんじハガキキャンペーンの広報

をいたしております。また、隔月で発行いたしております私どものセンターの広報誌では、様々な事を取り上げていくんですけれども、年に一回は必ず寺子屋運動あるいは書きそんじハガキキャンペーンについて特集し、各国の支援状況を掲載して、読者の皆様にご報告をいたしております。これらの活動の結果、2019 年 3 月までの書きそんじハガキ回収枚数は 4,494,729 枚となりました。

また、1997 年には「世界寺子屋運動推進協力会議」も発足をいたしました。私どもセンターの強みを活かしまして、公的な団体を含む地域の団体にお声がけし、ご参加をいただきまして、現在名古屋市内外の 12 団体で構成しております。年 2 回の会議などを通して事業計画にご助言をいただき、特に年賀状のシーズンには各団体の広報誌などを通じて、書きそんじハガキのご寄付を会員の方へ呼びかけをしていただいております。



例えば、この中の刈谷市社会福祉協議会様は、この社協内に実行委員会を持っていらっしゃることで、市内の小中学校、市役所や市民センター、社協さんの関連の福祉施設ですとか刈谷市内の色々な製造業の企業さんへ、独自チラシの配布をし、刈谷市全域で寺子屋の PR をされています。

あるいは、日本郵便株式会社様の名古屋の三地区の連絡会様には、名古屋市内の旧特定郵便局に書きそんじハガキの回収箱を置いていただいたり、チラシを置いていただいたりしていますが、一

昨年度、連絡会の皆様がお声がけをくださりまして、愛知県全域の郵便局へと箱を置いてくださるところが広がりました。そのため、もともと市内 280 局ぐらいに置いていただいていたのですが、500 局ほど増えまして、現在県内 770 局ぐらいがハガキの回収箱を置いてくださっています。地域に根付いた郵便局が協力してくださることで、その郵便局で見た方から「私の所にもハガキの回収箱ください」と事務局の方へ問い合わせをくださるようなこともあって、本当に推進協力会議の皆様には運動の地域への広がりにご協力を頂いております。

名古屋実行委員会の方では、昨年、一昨年はちょっと届きませんでした。近年およそ年間 10 万枚の書きそんじハガキを集めております。ここにも推進協力会議の皆様には大きなご協力を頂いております。

当実行委員会では、当初からただ書きそんじハガキを集めるということだけではなく、「識字教育支援のためであるということ」、それから「ハガキや手紙」と「文字と識字」ということ、「誰でもできる国際協力への一歩の入り口としての書きそんじハガキキャンペーン」、これらのストーリーを大切に活動してまいりました。

近年でも、イベントへ出展する際や大学での講義の際、学生さんが社会見学として私どものセンターを訪問する際のプログラムなどで、現地の活動報告だけではなくワークショップなどを取り入れまし



て、世界寺子屋運動と SDGs と両方の理解の促進と周知に努めております。

寺子屋運動そのものの意義というものを伝え広めるための活動を今後も展開するということで、地域における SDGs の達成に関わることのできる人材の育成に携わることが、少なからず、寄与できているのではないかと考えております。



笹井： ありがとうございます。それでは4人のパネリストの中の最後になりますけれども、アブドゥル・モティンさんからお話をいただきたいと思います。

モティンさんはバングラディッシュで SOJAG (ベンガル語で目覚めという意味) という名前の団体を立ち上げて、大垣ユネスコ協会と国際交流をずっと続けてこられた方です。よろしく願いいたします



モティン： 皆様こんにちは。まず主催者の皆様にお礼申し上げます。この 30 年間、世界寺子屋運動を推進してこられた皆様、日本ユネスコ協会連盟の皆様、感謝申し上げます。私はアブドゥル・モティンと申します。私がどういう仕事をしてきたかと言うと、地域開発の実務家でもあり活動家でもある、そういう人物です。教育をあらゆる人に届けたいと考えています。字が読めなくても生きていくことはできますが、識字というのは当然必要です。

さて、SDGs の 4 番「教育」の中で言っていることですけれども、教育がなければほかのいずれの目標も達成ができません。ということで、教育は私の人生の中でも非常に重要なテーマとなっています。

私のキャリアですが、社会開発ワーカーとして仕事を始めました。バングラディッシュ独立戦争の後すぐ、1975 年のことですけれども、大学を中退してその分野の仕事を始めました。当時私は、自ら学んでそして人々を開発に向けて率いていきたいというふうに考えていました。

山下さんは、古い友達ですけれども感謝を示したいと思います。1978 年、南アジア諸国との交流プログラムを導入されました。それを国連が引き継いで、国際開発サービスという国連のボランティアになっています。

私は 79 年にそれに参加して、5 年近くのスリランカでサルボダヤという組織で仕事をしていました。その後ネパールに行きまして、自分のための仕事をしたいというふうに考えました。帰国して友人たちと話をして、我々で青少年のためのクラブを作れないだろうかという話をしました。様々なサポートサービスを、様々な組織から得ようと取り組んだわけです。当初から、日本のユネスコ協会連盟から支援をいただきました。他に誰もサポートしてくださなかったところ、日本ユネスコ協会連盟からサポートをいただきました。今日私どもの組織は確立した存在となり、様々な社会・経済開発を推進することができています。

30 年前、世界寺子屋運動が立ち上がった時、私は実はその場に立ち会っていました。そして 30 年経ってこの世界寺子屋運動がいまだに続いているということ、とても嬉しく思います。日本ユネスコ協会連盟がこれまで長年こういった取り組みを継続してこられたことに、敬意を表します。続けることがいかに大変かということ、私はよく分かっています。

開発に関する実務家・活動家という観点から言えることは、教育というのは、まず社会問題の解決に資するものでなければなりません。社会的な資本を経済的な資本の前に作らなければならない。逆だと経済的な資本が社会に色々な問題をもたらしてしまいます。

30 年前に来日した時、私は寺子屋を作ってほしいとお願いをしました。また、識字の先生に対する給与や文房具などの支援などもお願いしました。今日様々な社会問題がバングラディッシュには存在していて、それに対応しなければいけません。政府だけでは対処できない。こういった社会の問題を

SDGs に関して取り組むには政府だけでは足りません。市民の関心が必要です。市民も入ってきて責任を持って行動する必要があるということです。政府がそれを支援するということは可能かもしれませんが、バングラデシュの状況では政府がそういった問題を解決することはできないと考えています。

過去 30 年、経済面では様々な進歩がみられました。そして社会の面でも色々な進歩がありました。30 年前日本に来た時、私の国の識字率は 40% 未満でしたが、今は 70% を超えています。そして我々は成長する中で開発に関する課題にも直面し、それに対処していかなければなりません。基調講演者の方から、幾つかこの課題について既に説明がありました。非常に良いプレゼンテーションだったと感謝しています。社会や市民社会が主導権を持って、様々な活動に従事していくべきだと私は考えています。

さて、1990 年に国に戻り、寺子屋運動に関わりました。これは今でも続いているので、これから紹介します。教育というのは継続的なプロセスで、1 年 2 年のプロジェクトではすみません。一生涯をかけて取り組むプログラムだと考えています。10 カ所にこういった寺子屋を作っています。初等教育の就学率は 90% ぐらいまで上がっています。しかし中途退学率も高いという状況で、5 年生まで終了できない子どもたちもたくさんいます。なぜそうなのかというところを考えて、対処していかなければならないと思っています。

それではスライドをご紹介します。この村の中にこの寺子屋を作りました。30 人の生徒が学んでいます。これは私たちが提供していると寺子屋です。ナオガオという村です。

お母さんたちも関心を持って見えています。教育、そして識字率が今後この地域で向上していくということが期待されています。これが先生で、こういった形で教えています。地面の上の座布団をしいてその上に座って、学習をしています。

Education Program
Terakoya Approach
Naogao Terakoya Center
No. of Students : 30



©SOJAG

これまた別の村です。こちらも 30 人の生徒が学んでいます。(写真省略)

次です。リゴルグラムという村ですが、この施設は 25 年前に建てられました。(写真省略) そろそろ修理が必要です。ちょっと古くなってきました。でも地域社会が主導権を持って維持を行っています。また別の村です。お母さんたちにも教育をしようとしています。母親たちが関心を持ってくれるようにということで、取り組んでいます。子どもたちと長い時間を過ごす母親たちにとって、幼児教育は非常に重要だと考えています。学びに行くという習慣ができれば学校に通えるということで、これを重視しています。

これはまた別の寺子屋です(写真省略)。机、イスを提供することができていませんが、こういった形で学習を続けています。こちらは別の寺子屋です(写真省略)。ゴラカンダというまた別の村で提供しています(写真省略)。シングスリーですね、これが最も古い施設です(写真省略)。ここで母親たちを集めてこの地域社会でミーティングを行っています。毎週こういった会合を開いて、子どもたちが通い続けるようにという働きかけを行っています。

政府の初等教育ですが、そこで学んでいる生徒たちにもご指導を行っています。これが小学校初等教育の状況です。女兒の教育に力を入れています。村の中で女性が色々な重要な判断、意思決定

をしていますので、女性に力を入れています。早期結婚ですとかレイプといった問題がありましたので、

Education Primary level



それに反対の意思を表明するデモ行進しているところです。政府に対策を求めている行進です。私のいる村でこういった行動がなされています。そして女性たちが意思を表明することは過去にはなかったことです。

この村の長老たちと女子生徒たちが対話をしているところです。こういった形をこのクラスを行って、女子生徒たちは学んでいます。女子の教育も向上しています。

寺子屋について皆さんに感謝します。寺子屋について申し上げたいのですが、寺子屋は人々に力を与えるものです。エンパワーメントの手段です。どうやって良い人生を生きるかを学べるところです。子どもたちがそこに行き、人生における規範や識字について学ぶところです。以上ですありがとうございました。

Educational Activities at High School level



Educational Activities at High School level



笹井： ありがとうございます。ではあまり時間は
ありませんが、少しディスカッションをやっていき
たいと思います。

北村先生には、SDGs とこれから 10 年 20 年先
に求められる人間としての資質といったお話をいた
だきました。SDGs のゴールなどテーマが大きくて、
それと我々の日々の生活の中での学びや実践と
どういう風に結びつくのかなって思ったのですが、
いかがでしょうか。

北村： ありがとうございます。時間も限られていた
ので、少し抽象的なこと含めて、大きな話だけで終
わってしまったので、「だからなんだろう」と疑問は
あるかなと思っていたのでありがとうございます。

元々国連の方でも 2015 年に SDGs を採択した
後に、これを国にレベル、地域レベルに解釈して自
分たちなりの SDGs を作ってくださいということはず
っと言っています。つまり SDGs の 17 の目標は、
あくまでとっても大きな世界で今大きな課題とされ
ていることではありますが、すべての国・地域が同
じような課題を持っていると言われると違います
よね。都市部の課題、農村部の課題、また途上国
でも非常に経済的な課題に直面しているところもあ
れば、もっと人権だとか、様々な問題がある中で、
自分たちに合った目標というのを考える、その参考
にするのが SDGs です。まずそこから出発しなきゃ
いけないと思うんですね。

先ほど豊かであるって話をしましたが、学びのあ
り方ってことを考えた時に、自分が豊かであるため
に何が必要なのか、そのために必要な学びを通し
て育まれる能力資質がなにかということを考える必
要があります。その意味で先ほど人間が身につけ
なければいけない能力とは、どんな時代でもある
意味変わらない部分があるといいましたが、とても
強調したかったことは、寺子屋でやっているような
非常に基礎的な識字とかです。読み、書き、計算と
いうものは、本当に一番基礎になることです。そ
こをまず身につけないと、僕が話をしたような新し

い時代の変化に対応とするとということもなにもない
のです。一番基本的なところを寺子屋はまず大事
にしていると思うのです。

僕はカンボジアの寺子屋に学生たちを連れて、
回らしていただいたことがあるのですが、寺子屋ご
とに課題が違うので、やっている内容が全然違っ
たりしますよね。自分たちなりの課題に向けて基礎
的な能力を身につけた上で、例えば水上村で必要
なものとは違うという話をするなど、色々なパ
ターンがあると感じました。大事なものは知的な基礎
体力をつけつつ、子どもたち、大人たちが生きてい
く上で、豊かに生きるために必要な職業的な能力
は何かを考える。先ほど女性、女の子、女子校生
たちのキャンペーンの話がありましたけども、そ
の場合は人権という観点から自分たちを守ること
の意識を高めることを考える。

答えがなくて申し訳ないのですけれども、それぞ
れがそれぞれなりの学びを考え、そしてその中で
育むべき能力を育む、それが地域、ローカルなど
から始まるという事しかないのではないかなと思
います。それが SDGs でも大事なことではないか
なと思っています。まだやっぱりちょっと抽象的で
したね。もう少し具体的にできれば良かったのですが、
すみません。

笹井： 今の北村さんとの話との関連でちょっと高
木さんにお聞きしたいんですけども、先ほどのプレ
ゼンテーションの中で、寺子屋がやっていることを
知るとか理解するっていうのは、生きる構えを学ぶ
とおっしゃいましたよね。生きる構えを学ぶという
のは、すごく基礎的な、これから生きていくうえで基盤
となるようなそういう資質に考えてよろしいでしょ
うか。寺子屋の運動がそういうような意味を持つのだ
ったらすごく嬉しいなって思うんですけど、いかがで
しょうか。

高木： はい。生きる構えという非常に大きな命題
みたいなことを申し上げましたけれども、具体的な

©SOJAG

©SOJAG

ことを言うと、例えば先ほど中学生の男の子が、小学生のリーフレットを見て「よく理解しているなー」と言ったように、そんなリスペクトというか、敬意を払うというか、思いやりを持つということとかですね。

もう一つは難しいことを言っているのではないのですが、ユネスコの活動で、例えば大人の方が来て、小学生・中学生がボランティアでお水を配る。お水を配る時に声をかけると交流が生まれる。自分の知らない世界も含めて、それに入れていける。これが良さかなと思っています。先ほど SDGs かるたをご紹介しましたが、ボランティアをすることで色々なところでかけて、かるたをする、楽しむことによっては、「あれこれどういう事？」「チョコレートを作っている子どもたちがいるの？」とか、素朴な疑問が生まれてきて調べようとする、なにか学ぼうとする。そんなことが根底にあります。

先ほどの最初のディスカッションのところで、サムナンさんのお話になっていたことを聞いていて、やり遂げる意志というものを強く感じました。この方は、自分には困難はあるにしても、やり遂げるんだ、学び、学校をどうしても最後までやるんだっていう、強い意志を持っていますね。それは非常に大事なことです。またタラマティさんの話を聞いていると、社会に関心を持つとか、学ぶことで社会に関心を持つてくることになります。ハニーフさんも、人間らしい道・生き方とおっしゃっていましたね。

ハネマンさんの話を聞きながら、もしかしたら自分の中に、生きる構えなんか言っていながらですね、識字と非識字を分けてしまうような概念があるな、識字と非識字を連続の過程として見ていないな、ということに気付くのです。子どもたちが感性が豊かな時に、そういうものを何か学ぶ機会が提供できればいいかなという思いです。

笹井： 池田さんにお聞きします。同じ趣旨の質問なんですけど、書きそんじハガキのキャンペーンを通して地域の人たちが、世界の人たちの非識字者の状況や貧困の状況についての認識を持って理

解してくれるんじゃないかという話がありました。それは、好奇心や興味関心が課題意識の第一歩になるという風に理解してもよろしいでしょうか。じゃあ私も書きそんじハガキを持っていきますよというふうに、その輪が広がっていったと理解してもよろしいでしょうか。

池田： そうですね、例えばイベントなどで写真を示すこともあります。また先ほどのスライドにも出てまいりましたが、国際センターに登録してくださっている在住の外国人の方に講師になってもらうという事業があって、その中で支援国のひとつであるネパールの方に、ネパールの現状をお話いただくと、「世界にはそういう状況があるんだね」、「そういうことがあるんだね」「じゃあ私にできることは何かしら」と考えてくださる方は本当にたくさんいらっしゃいます。

「ハガキで何か協力できるのであれば」とご自分が活動されている社会福祉協議会で寺子屋運動を紹介していただき、その利用者さんたちもまた、「私たちでできるんだったら」と言ってダンスに眠っているハガキを出してきてくれる。知ることを行動の一步につなげてくださっているということには寄与できているのかなと思います。

笹井： なるほど、そうすると変な言い方なんですけれども、書きそんじハガキキャンペーンというのは、単純に寄付集めという行為じゃなくて、世界の人々の生活の状況を知ったりとか、そこに対して何か応援してあげたいという気持ちを起こさせたりとか、重要な役割を持っているという事なんですかね。

池田： そうですね、寺子屋運動というものを一つのツールにして、世界の状況を知っていただくということは、私たちも意識していることです。貧困であるとか、不平等であるとか、教育もそうですが、「こういうことを改善してかなきゃいけないね」とか、「こういうゴールがあるよね」とかということが、SDGs

という言葉が出てきて言いやすくなりました。しかもともと、寺子屋運動というものを通して、そういうことはずっと続けていたんじゃないかと思えます。

笹井： わかりました。また北村さんにお聞きしたいんですが、その入り口やモチベーション、課題意識をみんなに持ってもらった、その後のアクションやその次の段階に行くために、どういう教育的な配慮や活動実践が求められているんでしょうか。

北村： ありがとうございます。僕はよく高校生対象に SDGs ワークショップのようなことをやって、グループワークで考えてもらう機会があります。例えばこのあいだ金沢の高校でやった時には、金沢の子たちが自分たちの金沢という街、石川という県について色々考えると言う事をやりました。

これは ESD (持続可能な開発のための教育 = Education for Sustainable Development) ですね。ESD 的に考えた時に、課題を見つけてその課題をどう解決するかということ、参加体験しながら学ぶというのが ESD で非常に大事にされていますが、金沢の子たちに SDGs のワークショップをやった時には、先ほど申し上げたように SDGs に掲げられているような目標を自分たちのものにして、2030 年までにどうすれば金沢が持続可能な街になるか考えようという話をしました。

彼らは、色々考えて調べる中で、新幹線が通るようになって、金沢は今すごく観光客が来て一部の観光産業はすごく潤っているのですが、それが必ずしも石川の全体とか金沢の人たちみんなに波及しているわけではないし、そこでは実は取り残されている人たちがいるって言うことを、高校生たちはすごく見て考えた。まずそういう風に気づくことが大事ですよ。

今度は気づいた上で、新幹線が通って観光がすごく発達してきた数年間のいくつかの新聞を見比べてみました。そうするとですね、それをすごく良いことだってもてはやしている新聞と、その課題

をすごく追究している新聞と、色々な新聞社があるわけですね。彼らは新聞を読んだりすることによって世の中でも、こういう風に色々な形でそれが伝えられているってことを知る。

高校生たちには、色々な新聞の社説あるいは一面を読み比べてみようとか、あるいは、最近海外の通信社ロイターなども日本語のサイトがあって高校生でも十分読めるので、読み比べてみようと言っています。英語が得意な方は英語で読んでもいいんですが、世界のトップニュースと日本のトップニュースがこんなに違うとかを見る。そのようにまず学ぶ、知るということから始まるのがすごく大事だと思います。知った上で、まさに高木先生のお話の中にもあったような形で、それに対してはどういう風に自分たちは向き合っていけばいいのか、その先に考えていくプロセスがあると思います。まずはきちんと知るところから始まるのが大事じゃないかなと、個人的にはいつも思っています。

笹井： ありがとうございます。同じ質問なんですけども高木さんはいかがですか。

高木： この後どうなっていくのが望ましいということですかね。

一つ事例的な事を言うと、寺子屋リーフレットワークショップをやってみたら、2 年生が来たって言いましたね。これは全く想定外だったんです。その子ができたリーフレットを自分の村、山間の家に一軒一軒友達と持って行って、137 枚集めてきたんです。そして、それで終わりかと思ったら、その後「12 人の子どもが一か月学校に通うことができます。ありがとうございます」と書いたポップアップカードを持って一軒一軒回ってきました。

そこまでのエネルギーはなぜ働いたのかなって思うんです。とにかく自分なりにワークショップで実感したものがあって、それを行動に起こして、そしてまたあまり知らなかった人たちとお話ができたと

ということなのでしょう。逆に大人は元気をもらって喜んでおられるという、そういう状況があります。

先ほどのカンボジアの寺子屋のビデオも、ワークショップのなかで少し紹介しましたが、そのなかで何かを楽しく学んでいるです。そういう生きることにつながる学び、実感できるような交流ができればいいと思いますし、そのことがユネスコの活動かなと思っています。

笹井： モティンさんにお聞きします。先ほどのモティンさんの話の中では、このような継続的な国際交流でバングラデシュの人たちの意識や行動が徐々に変わっていくということでした。またそれは政府の政策ではなかなかできないということをおっしゃいました。なぜ政府の政策ではうまくいかないのでしょうか。

モティン： 私たちの国は途上国ですけれども、国連の統計でも経済成長が続いていて、まもなく中所得国になれる状況にきています。他方で、私たちの今の教育水準、識字率の水準で、これから前進していくことができるかどうかということが課題です。

政府も一生懸命やっていますけれども、国民の参加レベルがまだ高くないということを懸念しています。そのような状況なのに目標を達成できるだろうか、と考えています。ミレニアム開発目標(MDGs)は、なかなか良い結果を出しましたが、SDGs を達成できるかということには懐疑的です。

ただ社会の方から色々なイニシアティブが出てきています。市民社会団体が活発に活動していますし、数多くの NGO が活発に動いています。経済開発に関わる活動も多くなされています。

しかし私が一つ怖いと思ったのは、社会開発活動の優先順位が下がっているということです。これは今でもやはり必要です。というのも人々の所得が技術によって影響を受け始めているからです。

バングラデシュの例をご紹介します。バスの運転手・トラックの運転手はたくさんいるわけですが、読み書きできなくても運転が出来るわけです。車の修理ができて運転ができれば良かったわけです。農業に従事する人も多いわけですが、あまり考えなくてもできた。しかし現代的な農業においては、識字能力が必要となってきます。でもそれが追いついていません。バングラデシュは、国レベルで見ると大きな進歩をしています。特に経済成長という意味では進捗が見られます。しかし医療・教育に関しては、十分なスピードで進んでいないので、もっと介入が必要です。様々な団体などが関わっていますが、そういった人々を組織化していかなければならないし、またそれを政府が主導しなければならないと思っています。

今回お招きいただきましてありがとうございます。連盟の皆様、そして大垣ユネスコ協会の皆様、パートナーとして過去 30 年ご支援して下さったことに、深く御礼申し上げます。ありがとうございました。

笹井： ありがとうございました。最初のセッションのウルリケ・ハネマンさんからの話も含めて、みんな結構同じことを言っているような気がします。同じ事とはどういうことかと言うと、まず生きていくために基礎的な学びというものがとても大事であるということです。「リテラシー」と呼ばれる読解力・国語力や「ニューメラシー」と呼ばれる計算力・数的思考力という基本的な能力が、人間が社会的に生きていくために必要だ、という点では皆同じです。

では、それを使って自分自身の良い豊かな人生をつくるために、あるいはそれを使って住みやすい地域社会を作っていくためには、どうすればいいのか、ということを考えなくてはならないということを指摘しているのも、皆さん同じで、それには生涯学習(ライフロング・ラーニング[Life Long Learning])という視点が大事だという話がありました。つまり、50歳になっても60歳になっても70歳になっても、継続して学び続けることです。

生涯続ける学習には、色々な学びがあります。学校だけではなくて色々な学びがあって、色々な経験を積むことがとても大事だし、それを継続するということはとても大事だということが一つの視点として挙げられていました。

もう一つは、ライフ・ワイド(Life wide)ってことをおっしゃいました。一つの学びあるいは一つの経験から、色々な広がりが出てきます。その広がりをどんどん広げていって、そこから得た経験を自分のものにしていく「ライフワイド・ラーニング[Life Wide Learning]」が、とても大事ですということです。要するに縦軸と横軸、時間軸と空間軸両方での学びがとても大事です。学校にはすごい有利な点、色々な機能があると思います。

でもライフワイド・ラーニングのためには、学校という機関だけではダメで、直接社会と連続しているような場で学ぶ、直接色々な経験ができるような場で学ぶ、色々な人が集まれるような場で学ぶということがとても大事で、それが地域の学びの拠点という意味だと思います。

それは実は寺子屋で見られるものです。寺子屋で学び続けるなかで、継続的でしかも色々な学びが経験できて、それが自分の収入向上に繋がったり、差別の廃止・克服に繋がったりなど、色々な対話に繋がっていきなりするでしょう。学校ももちろん大事ですけど、学校外のノンフォーマルな世界での学びの拠点というのが、非常に大事ではないかというお話を、皆さんがされていなくと思います。

モティンさんの話を聞いていると、ある種の社会運動として寺子屋の活動をするのが、実は遠回りのように、非常に近い道なんだと思います。政府の政策を別にどうこう言うつもりはありませんし、大きな意味を持っているとは思いますが、やっぱり草の根の活動を続けていくということが社会の民主化、社会そのものを豊かにしていくことにつながっていきます。政治と社会を分けた時に、政治の世界の民主化は、色々な政治・制度の改革とかしなければいけないのかもしれないかもしれません。けれども、例え

ば差別をなくす、男女差別をなくす、貧困をなくす、みんな公正に対応するとかいった社会の民主化、成熟化という上では、民間の社会運動が大きな役割を果たしているんじゃないかなと思います。

我々の寺子屋の活動は、限られた地域で限られたことしかできません。世界には何億人も非識字者っているわけですから。でも、その実践を識字教育を通して、寺子屋を通して広げてきたっていうことは、大きな意味がありました。

午前中からのセッションと午後一番目のセッションを通して考えてみると、世界寺子屋運動は、一人一人の豊かな人生を作っていくうえで、また、民主的な地域社会を作っていく上で、大きな役割を担ってきたんじゃないかなって思いました。これまでのセッションで出ていたご意見は、色々な視点を提供するものもあったり、あるいはこれまでの成果というものを提示するものであったりと、さまざまなタイプがありましたけども、期せずしてみんな同じ方向を向いていて、我々にとってとても嬉しいことだと思いました。

最後にもう少し時間ありますので、四人の方お一人お一人から、寺子屋運動の今後に何を期待するかを、一言ずつおっしゃっていただきたいと思っています。

モティン： 私の考えとしては、やはり寺子屋というのは人に力を付与する、エンパワーメントだと思います。寺子屋は、リーダーシップを持って社会の中で学ぶという点で、先陣を切るべきだと思っています。ネパールとアフガニスタンから大変いい事例がありました。寺子屋があるからこそ、女性が地域の議員になられたという話しがありました。その女性が、カーストの中ではアンタッチャブルという大変低いカーストの中にいるのですが、今ではリーダーとして活躍しているということでした。これこそが寺子屋の力です。寺子屋は継続するべきだと思いますし、今回ここで同席をさせて頂いております先生方の

力を借りて、社会的な教育のための運動につながっていきたいというのが私の将来の希望です。

北村： エンパワメントというのは本当にそうだなと思いながら伺っていました。寺子屋っていうのはやはりコミュニティの拠点だと思います。そこに人が集まる、集まることで新しいことが生まれる、そういう場になっていくことが今後さらに期待されるのだと思います。

今後の展開ですが、技術をどう活かしていくかという点が挙げられます。かつてはたくさんの方に支援をしていたところから、絞って集中して現在はいくつかの国で展開しています。それでも寺子屋は全国にあるわけではなく、固まった場所にありまして、他方で、例えばカンボジアのような国ですとだいぶネットが発達しているところがありまして、Wi-Fi を持っていけば結構どこにいてもネットが繋がります。

今まではフィジカルに、実際に、物理的に会うことで生まれる学びが寺子屋ですごく大事で、それがコミュニティの拠点として大きく機能していきましました。今度はそれをさらにネットワーク化して、遠くの所ともつながることで、学びの輪を広げていくようなことも検討していただけたらいいなということの一つ期待しています。

もう一つは学びの輪を広げるという意味では、やはり日本の人たちと現地の人たちとのつながりの輪も、もっともっとさらに広がっていくことを期待したいと思っています。

高木： ユネスコの活動は、草の根の運動だと思っています。もちろん大人は大人で、世界遺産の下草刈りとか色々な事やっています。けれども、やっぱり子どもたちにそのようなボランティア活動を、どう結び付けていくか課題です。子どもたちにとって今日の記念動画もそうでしたが、私はいつも分かりやすい教材って何かなって風になっています。身近なところから想像し、考えることができるものを

ぜひ見つけて、子どもたちにぶつけてみるっていうことをやってみたいです。

例えば世界寺子屋運動をやっていく時に、書きそんじハガキキャンペーンの開始の時など色々の機会があるのですが、その際に平和の課題は避けて通れないと思って、例えば谷川俊太郎さんの『へいわとせんそう』を使って、「へいわのボク」と「せんそうのボク」といった比較をずっとしているんですね。こういうものが一つきっかけになるかなと思います。もう一つは北村先生がおっしゃった交流ですね。そこがやれればいいなと思っています。

池田： 今書きそんじハガキキャンペーンで回収をされていて、ハガキ流通量が減ってきたということを実感いたしますし、郵便局さんの方からもそのようなお話を以前からよくお聞きしています。そのような中であっても、世界寺子屋運動というものが、「ハガキ一枚から」「誰でも」始められる、という国際協力活動であってほしいと思います。

地域でこの運動のこと、運動を含めて SDGs のことをお話しすると、学生さんなんかは、授業を受けたり講義を受けたりして今自分が学んでいるということ、もう一回改めて考えて、これからも学び続けて世界を色々なことを知りたいと言ってくれる子もいるんです。なので、そういう「きっかけ」を与えるものでもあってほしいなと思っています。

また寺子屋運動では、識字だけではなくて職業支援とかもやってらっしゃいますから、そういうことで世界全体が良くなっていく、ということも、続いて欲しいなと思います。

名古屋国際センターとしても名古屋実行委員会としても、運動を支援し続けることと広めていくこと、両方に関わっていくことで、私たちも共に学んでいくことのできる運動であって欲しいと思います。

笹井： ありがとうございます。もうそろそろ時間ですので、これでこのセッションをお開きしたいと思います。

います。みな様四人の方に盛大な拍手をお願いいたします。ご清聴ありがとうございました。

(文責:関口 広隆)

総括セッション

「これからの世界寺子屋運動の役割と展望」

コメンテータ

北村友人 東京大学大学院教育学研究科准教授

高木要志男 富山ユネスコ協会会長

池田昌代 “世界寺子屋運動”名古屋実行委員会事務局(公益財団法人名古屋国際センター交流協力課)

ノン・ブッタ 日本ユネスコ協会連盟カンボジア事務所長

ヤマ・フェロジ 日本ユネスコ協会連盟カンボジア事務所長

ファシリテータ

笹井宏益 玉川大学学術研究所高等教育開発センター教授

(敬称略)

司会: 皆さま、大変お待たせいたしました。いよいよ本日最後のプログラム、総括セッションをスタートしていきたいと思えます。

まずは登壇者をご紹介させていただきます。パネリストは先程ご登壇いただきました、北村友人様、高木要志男様、池田昌代様、続きまして、新たに日本ユネスコ協会連盟カンボジア事務所長のノン・ブッタ様、同じく日本ユネスコ協会連盟アフガニスタン事務所長ヤマ・フェロジ様。皆さまよろしくお願ひいたします。ファシリテータは、引き続き笹井宏益先生にお願いしたいと思います。それでは皆様いよいよ最後のセッションですどうぞお楽しみくださいませ。

笹井: 今日最後のセッションということで、皆さん方から頂いた色々なご質問とかコメントに基づいて、ここに登壇している方々の色々なお話をお聞きしたいと思います。総合的なテーマが、「これからの世界寺子屋運動の役割と展望」ということで、皆さまには、これからこうあって欲しいんだよねっていう

世界寺子屋運動の未来像を、単刀直入に書いていただきました。たくさんの方からご質問あるいはコメントを頂きましたが、時間の関係もありますので、全部を取り上げることはできないので、あらかじめご了承くださいと思います。

まず、SDGs と学校教育との関係についてです。学校教育と寺子屋運動と結びつけるという可能性も含めた SDGs を、学校教育の中でどういう風に取り上げていったらいいのかについて、高木さんからお考えを教えてくださいと思います。

高木: 私は SDGs というより ESD から入りました。ESD というのは、間違いなく「持続可能な社会づくりの担い手を育む」教育です。学校教育という観点で、私が学校にいた時、職員の皆さんという協議をする中で、やはり教育課程をどうするかというところから本当に話をしていました。

それぞれ各教科でやるべき内容は、具体的にあるわけですがけれども、その関連性をどう見るか、見出すかというところに苦心しました。まずは地道な職員の研修ですね。それをやりながら、今の学校

教育、新学習要領で、SDGs の目標、ターゲットの理解を行うということは、やはり避けて通れないかなど理解した上で、ESD をもう 1 回捉え直し、ESD に軸足を置くといいなと思っています。

もう一つは、「誰一人取り残さない」という決意が、教育では非常に難しい、かけ離れたようにも思われることです。しかし、よくよく考えてみれば教育の根底には誰一人取り残さないというものがあります。手間がかかるから放っておけばいい、というのはいけません。手塩にかけると言いますが、手間はかかります。でもどの子も取り残さないというような決意をもって臨むことが、教育の中に浸透していればそんなにずれないなというのは私の思いです。

笹井： わかりました、同じ質問ですけど、北村さんいかがですか？

北村： ありがとうございます。今高木先生のおっしゃったこともまさに同じように考えています。先生がおっしゃった、教科をつなげた教科横断型・領域横断型の学びが大事だということが、来年度から導入される新しい学習指導要領で、ものすごく強調されているわけです。SDGs の目標の中で掲げられている様々な課題というのは、一つの分野から解決しようとしてもなかなか難しいので、様々な角度から考えないといけない。学校教育の中で、子ども達にそのように風に考える習慣をつけてもらうということで、教科横断型・領域横断型の学びが重視されるわけです。

小学校の先生はまだなんとかできます。自分で色々な教科を教えているので。ところが中学・高校になると、それぞれが専門の教科を教えているので教科横断の学びが難しいということ、よく先生方がおっしゃいます。

ただ実は、学習指導要領の中でもカリキュラムマネジメントをしましょうと言って、色々マネージして教科をつなげる話を自分ではしていますが、最終的に先生がいくら繋げても、子どもが自

分で繋がられていなかったら意味がないということが抜けてしまっています。先生が一生懸命つなげることを考えているのですが、子どもにはヒントあげるだけでいいです。最終的に、子どもたちはすべての教科を受けているので、自分で繋がられるようになることが大事なんです。「理科で習ったこのことって、社会で習うこのこととすごく関係があるよね」、といったことを自分で繋がられる力を育むためのヒントを、先生方が提示することがまず一つすごく大事だと思いますね。

二つ目に、高木先生が誰一人取り残さないという話をされました。それも本当にこの SDGs の時代の教育ですごく大事な事です。ただ、先ほど僕がスライドで最後の方に、平等に台を分けただけでは見えない子がいるから、「背の低い子には台を高め」という図を見せました。そして最後は「システム変えちゃいましょう」というスライドを見せました。実はこれはインクルーシブ教育でよく使われるスライドです。障害を持った子が通常の教室に入って、障害を持っていようがなかろうがみんな一緒に、というのがインクルーシブ教育の考え方です。

今のインクルーシブ教育は、真ん中の図までなんです。つまり一緒に教室で学ぶために、色々な機材を提供したり、サポートティーチャーで先生が入ったり。でもそうすると、その子は自分が特別扱いされている事をすごく感じるわけです。だから 3 番目。3 番目って何かと言うと、例えば目が見えない子が教室にいたら、先生が教え方を変えなくてはいけません。目が見えようが目が見えなからうが、分かる教え方を先生が考えるというのが SDGs 時代の新しい学びのあり方なんです。それがシステムを変える。学びそのもののあり方を変えるというメッセージです。

SDGs の時代は、そういう形で様々な今までにない課題に向き合った時にも、どんどんと変わっていかなくてはならない。大変ですが、それができれば楽しみながら、こんなこともできる、あんなこともできる、という発見をしながら、そのこと自体が豊かな

体験になる、そういう教育のあり方っていうのが求められているのではないのかなと思います。

笹井：なるほど、ありがとうございました。次の質問です。たくさんの方からいただいたんですけど、「寺子屋運動の認知度が低いとか知らない人が多い。ではどうすればいいでしょうか」。これはコメントですが、ちょっと難しい質問です。池田さん、書きそんじハガキキャンペーンにもつながる話だと思いますけど、どうやって広げていけるでしょうか。

池田：例えば、私たち名古屋実行委員会が、毎年頑張ってる様々なイベントにブース出展させていただいていると、「今年も持ってきたよ」と言ってハガキを持って来てくださる方っていらっしゃるんですね。一つは「地道に」というところがあると思います。

あと私たちもまだなかなかできてはいませんが、普段アプローチができる場所だけではなくて、ここ盲点だったね、とか、こういう人とつながっていけばもっとこっちの方にも広がっていくのではないかとアイデアはいつも出して、人とのつながりを大切に知っていただくことじゃないかなって、今私たちが実行委員会で考えているのはそういうところですね。そして地域の方々を知って頂けるようにしていきたいと思っています。

笹井：高木さんはいかがですか。

高木：広げていくとき、ターゲットをどこに置くかという事が一つあります。私は自分が入った会社の関連する提携会社で、社員の方に朝礼とかミーティングをする機会があります。その時に、事前に自分の書いたものを配って、「こういう運動がありますよ」と伝えています。小難しいことを言ってもアレなので、「マイケルジャクソンさんのことは一つの大きなきっかけになっていますよ」とか、「具体的にはこんなことで支援しているんですよ」、ということを簡単にお話しします。その話を聞いた人がみんな理

解しているかという、まだ不発に終わっていて、すっかり忘れていたりします。後でもう一度、この団体に書きそんじハガキの感謝状を持っていった時にお話するということもあり、リーダーの方に丁寧に説明をすることによって、また広げていただけると感じます。

認知度とまではいかないです。マスコミ新聞報道にも取り上げていただけますけれども、それで広がったか、というのはなかなか難しいので、教育の場とそういう社会の場など、どこでやるかというターゲットを見ながら取り組んでいます。

笹井：なるほど、寺子屋の認知度だけではなくて、寺子屋運動が持つ意義と言いますか、意味と言いますか、そういうものを奥深く理解してもらい、その理解者を増やす。もしできればそういう人たちにも少しでも実践して欲しい、そういう風になってもらうために、とういことですね。

例えば高木さんも含め、ユネスコのレポートの四つの学びの一つ「Learning Live Together」、「共に生きることを学ぶ」とことを、色々な方が触れていました。私は、寺子屋運動のことを知って理解することは、それを学ぶいい機会だと思います。

明日のセッションでもうすこし詳しく議論されるのかなと思っていますけど、地域には色々な外国人の方もいるし色々な活動やっている方もいて、そういう人たちの存在なり言動を受け入れて、その人達と共に生きていくために、寺子屋運動を上手に活用できないかなと思います。その辺は北村さんいかがでしょうか。

北村：今笹井先生おっしゃった通りだと思いますし、高木先生の SDGs のお話しにしてもそうですが、寺子屋運動はすごくいい教材になると思います。先ほど、高校生の話をしたの時に、知ることが大事だと申し上げましたけれども、何を知っていて何を知らないのかっていうことを、考えていただくきっかけになればいいと思います。

寺子屋運動とは関係ないエピソードですが、浜松で日系ブラジル人の方がたくさん住んでいるところのある中学校で、学校の先生が国際理解教育をやりたいかったので、是非日系ブラジル人のお母さんに学校に来てもらって、ブラジルの社会や文化のことを紹介してもらおうと考えたんですね。これはとっても素晴らしいですよ。

ところが、自己紹介してもらう時に、「どうせ紹介してもらうなら英語で紹介してもらえれば英語の教育にもなるし国際理解教育にもなる」ということで、英語で紹介してくださいってお願いをしたんです。これがどんなに不思議なことか。日系ブラジル人の方ですから、ポルトガル語が自分の言葉ですよ。英語で紹介してくださいと言われたお母さんは本当に困ってしまったという話があるんです。日本の中では、外国の人っていうと英語が話せると思ってしまうことがあるようです。

寺子屋のことを学ぶ中で、皆さんもしかしたら、本当はこんなことだったのかそんなことが起こるのか、ということに色々気づかれる場面もあるかと思えます。日本人の視点から見て日本人の常識が通じないとか、世界では本当はこんな社会があったり生活があったりして、人々が生きているんだとかいうことがあれば、それはとっても素晴らしい教材になると思えます。

そういう形で知るための教材として寺子屋を色々な場面で活用していただくと、そんな活動があるんだ、そんな社会や国があるんだ、そんなことがあるんだな、って知っていただけるんじゃないかなと思います。

笹井：ありがとうございます。他にいくつも質問ありますが、その中で寺子屋の自立性を促すことについてのものがあります。

寺子屋の自立には、経済的な面があり、とくにカンボジアのいくつかの寺子屋では自立をしつつありますよという報告がありました。他方でいただいた質問のなかには、経済的のみならず、社会的に

も運営的にも自立ということが大事じゃないかという意見も、たくさん頂きました。例えば、学んだ人が教えるとか、学んだ成果を得た人が、また寺子屋の運営に協力していくみたいなものがとても大事ではないでしょうか。

今回はコメンテータとして、ブッタさんとフェロジさんのお二人がいらっしゃいますので、自立をすることについてその現場の第一線で寺子屋を運営されている方から、あとでまとめてお話を聞いてみたと思います。

寺子屋での教え方について、学んだ人が仮に教える立場になってもいいじゃないかとか、あるいはアシスタントになってもいいじゃないか、という意見があるって事はお話しました。このような循環するような形の運営というのは可能ですかね、北村さんいかがでしょうか。

北村：もう 10 年ちょっと前になるのですが、カンボジアには、日本ユネスコ協会連盟がやっている寺子屋以外にも、たくさんコミュニティ・ラーニングセンターがありました。でもその多くがもう活動を止めてしまっている。それで、なぜそういうことが起こったのかということ調査したことがあります。学生達も連れて行って、大規模に調査をしました。

結局閉じてしまったコミュニティ・ラーニングセンターというのは、基本的に政府からの支援にとっても依存していました。そのため、公的なお金が入らなくなった時点で、もう立ち行かないってことで閉めてしまう。それに対して寺子屋がとても違うのが、自分たちでそれをどういう風に運営していくのかを考えていることです。

最初はもちろん支援があります。しかし、先ほども寺子屋を卒業した子の映像もありましたけれど、最終的に、自分たちでそれをどういう風に自立的に運営していくのか、ということを最初から考えながら支援をされていますよね。やはりそのことが、他の多くの閉じてしまったコミュニティ・ラーニングセンターと比べて大きな違いだと思います。

他の閉じてしまったところはどうだったかって言うと、中央政府だけではなくローカルな行政機関とかに、「こういうの大事だから作ろうよ」って言われて作ったものです。寺子屋の場合は、自分事として、自分達のここにこれが必要だから作らなくてはいけない、というところから始まってそこに支援が入る。最初は外部の支援に頼るけれど、どうやって自分たちがそこを自立的にしていくのか。自立的なサイクルを作るために、当然そこで学んだ人が今度はそこに教える側として戻ってきたりとか、運営する側で戻ってきたりというこのサイクルを、自分たちで作っているから自立できるんだと思います。ですから僕はこの事は、寺子屋が 30 年かけて築き上げてきたすごく大きな財産だと感じています。

笹井： はいありがとうございます。ちょっとまた別の質問ですが、ユネスコ協会、特に地方のユネスコ協会としては、現地に行きたいとかスタディツアーで行きたいとか、現地と交流できるようにしたらどうなのっていうようなコメントとかご質問もたくさんあったんですけども、高木さんと池田さんは、そういうことについてはどういうふうにお考えますでしょうか。

高木： まず、世界寺子屋運動の一環で大事な活動として、書きそんじはがきの回収がありますよね。それを契機にして、会員の方々がその運動をものすごく一生懸命やってくださっています。どういう意味があってこれをやっているという知識理解はできていても、それを自分たちなりに実感したいという思いは、皆さんとはいいませんが持っている方が結構いらして、その機運が高まって、富山ユネスコ協会でも 7 年前くらいに現地に行きました。

私は去年行きましたが、7 年前に行った時の状況の記録とかビデオ、写真が残っているので、私が見てきた時の状況と比べながら、例えば「持っていたこれが大事に残っていますよ」とか、「今この子たちはこういう風に、前とはちょっと違いますね」

みたいなそんな話もそういうお話をしながら、より感動を深めてもらいました。

毎年行かれる地域の方もほかではいると聞いています。富山はなかなか毎年ってわけにいかないのですけれども、是非そういう機会があって、意思が強くなれば行きたいとは思っています。

池田： 私がこの事務局運営を担当してほんの数年前、という話を先のセッションでしましたが、本当にラッキーなことに、今年の 3 月にカンボジアへ行かせていただける機会がありました。今日会場にも、その時ご一緒させていただいたユ協の方々、何人かいらっしゃいます。

まさしく実感を持って、現地を見ることで考え方が取り組みへの熱量というものが変わるということ、自分で体感してきたものですから、行きたい、交流をしたいという思いはすごくよく分かります。おそらくこの会場にも何名か、ご自分の経験の上で、もっと交流したい、もっと現地へ行きたいということを書かれた方もいるんじゃないかなと思います。

ですから、日ユさんにご協力を頂いてスタディツアーをする、あるいはスタディツアーに参加する機会がある、のであれば、是非、行って頂きたいと思っています。

名古屋実行委員会でもこの 10 年ぐらいやっていなかったのですが、今年度スタディツアーを計画しているところです。それまでは 5 年に 1 回ぐらい現地へ行っていました。

スタディーツアーを実施するために、私ども実行委員会は毎年少しずつ積立をしています。行くことに向けて計画と言いますか、目標立てて、やっていただけると良いと思います。

あと、さきほど北村先生からお話がありましたが、日本にはたくさんの外国人の方が住まわれていますので、在住の方達からお話を聞くということだけでも、随分と考え方が変わります。私も講義やワークショップで「現地を見てきました」とお話をしますが、うまく伝わらないこともあります。ですが、同

じことをその国から来た方がお話をすることで、「よくわかった」とか「じゃあもうちょっと私も考えてみる」とつながります。

そういった地域の人材と言いましょか、地域の方々にお力をいただく。普段こういったことにかかわっていない方にも協力していただくということも、一つ、現地へ行くことができなくてもできること、ではあるかなと思います。

笹井： ありがとうございます。100 人を超える方からコメント、ご質問いただきまして、本当にありがとうございます。これはここでは紹介できなかったところ含めて、連盟の方で受け止めて今後の運動に活かしていきたいと思っておりますのでご了承いただきたいと思っております。

ではこのセッションの最後に、お二人のコメントからそれぞれ 3 分ぐらいでコメントを頂ければと思いますので、まずブッタさんからコメントをお願いします。

ブッタ： こんにちは。世界寺子屋運動に関して、その実施と全貌につきカンボジアの状況をお話したいと思っております。

その前にまず、なぜ私がこの世界寺子屋運動の中で仕事をするようになったか、お話しします。一番初め、私は国連高等弁務官事務所(UNHR)で仕事をしました。緒方貞子さんがトップを務めていた時に、お手伝いをすることができました。そこで仕事をしているうちに、私はもう少しやりたいと思いはじめました。

そして次に国連開発計画で仕事を始めました。そのときには、持続可能な開発を進めていくためのプロジェクトを行っており、10 年以上働きました。

寺子屋運動について知った時、大きな感動を抱きました。というのは、草の根レベルで仕事をするということがいかに重要かということ、身をもって知ったからです。EFA とかこのミレニアム目標とか

そういったものはいろいろありました。ESD もありました SDGs もあります。そういった色々な戦略的な枠組みがたくさんあり、多量の「紙」を発行していたのです。ところが、世界寺子屋運動の場合には活動が中心であったということです。つまり実際に技術的に色々やることができるので、私はここで仕事をしたいと感じました。

カンボジアの世界寺子屋運動の展開について、どうやって実行してきたのか、具体的な活動はどんなふうなのか、ということをお話をしたいと思っております。

「コミュニティに根ざした形で SDGs の開発目標を果たすことを考えていく」、「それを CLC すなわち寺子屋でやっていく」ということが、寺子屋の活動です。ここで一番大切なポイントは「参加」ということです。

持続可能な開発を進めていくためには、参加を抜きに語ることはできません。人々が寺子屋運動に参加していくということによって、彼らが自分の問題だという考え方を持つことができます。そして自分の問題になった途端に、持続可能性というものが現実の問題として浮上してきます。

寺子屋の人びとは、寺子屋運営のガイドラインを作りました。このガイドラインに則った形で持続可能性を担保しました。寺子屋運動の中で、どうやって透明性を高めていくのかということも考えました。それから何か仕事をするときには、自分で名乗り出て率先してボランティアをやる。そして、さらにこのプロセスにも参画するし、その作成の段階から入っていく。

持続可能性を確保するためには、参加がとても重要だということを言いましたが、それに加えて財政面での自立も必要です。寺子屋運動が何年にもわたってその地域社会を支えていく。例えば、5 年間という取り組みを行っていく。最初にエンジンをかけてもらってその後は自分で動く、走るということになります。そしてそういった形で何らかの活動を根付かせていくことができるわけです。

寺子屋を設置するときには、人びとが果たすべき責任を示します。一つの寺子屋でメンバーとして 12 人が参加します。村民から選ばれた人たちですが、ボランティアとして入ってきました。例えば一人は 1 ヶ月のうちに二日間 CLC の活動に携わる、そんな形で 2 日ずつのローテーションを組んでいきました。そうすると全部で 24 日になります。こんな形で参加を進めてきました。そしてさらに建築士も関わっていました。

それからオーナーシップという言葉も重要だと思います。自分の問題としていくということです。ということで参加が重要である、オーナーシップも重要である、それがとても重要であり、成功の鍵を握ったということを申し上げたいと思います。カンボジアの話でした、ありがとうございました。

ヤマ： ありがとうございます。ヤマ・フェロジと申します。自己紹介をさせていただきます。カブール事務所で色々な仕事に携わってきました。日本ユネスコ協会連盟カブールオフィスの責任者を務めており、大変光栄に思っております。

この世界寺子屋運動のアフガンでの展開は、治安の問題があって容易ではありませんでした。実施当初から治安状況が非常に悪いので、治安の問題に取り組みながらこのプロジェクトを実施してきました。

私の観点から言いますと、寺子屋を実施していくためには、政治的・社会的そして経済的な支援が必要です。もちろん持続可能にするためには、その政府の支援も必要ですし、人々の参画も必要です。学校と同じようにこういった寺子屋に対しても、継続的なしっかりとしたサポートが必要です。

例えば、地域の人たちが、最初からオーナーシップを持って運営をしていくことは、期待できません。寺子屋は元々法的に、その運営をするという権限がないからです。政治的なサポートというのは、政府からのサポートです。政府が寺子屋に関して責任を持ち、教師を提供する。そして教師に対

して給料を支払うということが必要です。子ども達への教育の良い成果を出すためにはそれが必要です。

社会的なサポートとは何か。これは地域社会の人々のサポートです。ブッタさんが言ったように、地元の人たちの参加ということです。寺子屋の人々が学ぶという場です。そうでなければ単なる施設にすぎません。寺子屋では学校教育と同じものを提供するわけではありません。ノンフォーマルな教育です。誰かの家でやるというわけではありません。こういったノンフォーマルな教育を必要な人に届けるために、この寺子屋という形態が非常に適しています。

経済的な支援に関しては、やはり政府の支援が必要です。人々の支援に頼り続けることはできません。寺子屋が作られた国々において、政府が責任をもって持続可能な実施を担保していく必要があります。このマネージメントは非常に重要です。

これまで 17 の寺子屋をアフガニスタンに作りました。アフガニスタン政府は、全ての CLC 寺子屋について責任を取ってくれました。アフガニスタンの事務所は将来的には閉鎖するかもしれませんが、政府がきちんとこれを運営していくことを期待していますし、それができると期待しております。それが SDGs の目標の 4 番、「質の高い教育の達成」に寄与していくと考えています。

ノンフォーマル教育の質というのは他のプロジェクトと違うわけですね。しっかりとした教室がある。そして学ぶためのこの空間もあるということでもあります。以上です、ありがとうございました。

笹井： 二人ともだいたい似たようなお話でしたが、非常に素晴らしいコメントだったと思います。というのは、キーワードとして社会参加、参加ということとが出されたからです。学ぶということに参加する、あるいは何かと一緒に実践するという事がキーワードでした。

もう一つのキーワードがオーナーシップ。自分の問題として考えるということをおっしゃっていただきました。これからの寺子屋の未来において、それがとても大事だと思います。そういったことを実現する上で、一つの「社会運動としての世界寺子屋運動」ということが必要になってくると思います。

そのためには多くの人の協力、あるいはご寄付というものが、その善意が社会運動としての寺子屋運動を支えていると改めて思います。政府というセクターも大きな役割を果たしますが、それが出来ない領域がやはりあります。草の根の地域社会における色々な識字の普及であったり、あるいは所得の向上であったりなど、ノンフォーマル教育分野のことは、政府の政策ではなかなかうまくいなくて、それよりも民間の社会運動は同じ目線に立って、対等な立場で運動を進めていくことがとても大事なことだと改めて思いました。

今日は本当に長丁場で、ここまでお話を聞いていただき、また質問をしていただき本当にありがとうございました。皆さんのこれからのユネスコの活動、それから日々地域での活動に多少なりとも参考になったと個人的に思っています。そういう意味ではとても良い機会であったと思います。

改めて 5 人の方に盛大な拍手をお願いしたいと思います。それではこのセッションはこの辺で終わりにさせていただきます。お開きさせていただきます。どうもみなさんご協力ありがとうございました。

(文責: 関口 広隆)

パネルディスカッション

「学びを通して共生社会を作る」

パネリスト:

三田一則: 豊島区教育長

小林普子: 特定非営利活動法人みんなのおうち 代表理事

キリーロバ・ナー ज्या: 株式会社電通 ビジネス D&A 局 B チーム クリエーティブ・ディレクター

モデレータ:

関口広隆: 日本ユネスコ協会連盟事業部部长

(敬称略)

司会: 皆様おはようございます。昨日に引き続きありがとうございます。第 75 回日本ユネスコ運動全国大会第 2 日目となりました。これよりパネルディスカッション「学びを通して共生社会をつくる」をスタートさせていただきます。

それでは皆様にパネリストとモデレータをご紹介します。まずお一人目は、豊島区教育長三田一則様でございます。続きましてお二人目は、特定非営利活動法人みんなのおうち代表理事小林普子様でございます。3 人目は、株式会社電通ビジネス D&A 局 B チーム クリエーティブ・ディレクター、キリーロバ・ナー ज्या様でございます。モデレータは、公益社団法人日本ユネスコ協会連盟事業部部长関口広隆でございます。

関口: 皆さんおはようございます。75 回の全国大会 2 日目になりました。初日の昨日は「寺子屋の学びがもたらしたもの」ということで、発展途上国への国際協力の面に注目して議論を進めました。本日のサブテーマは、「学びを通して共生社会をつくる」ということで、日本の中での文字の読み書きの課題を取り上げたいと思っています。

新聞・雑誌・テレビなどで、日本国内での外国にルーツを持つ人々の人数が急増していること、それからその世帯の子どもさんたちの日本語の問題、学習の問題というのが、非常にクローズアップされています。それと同時に、日本の中での経済の格差によって、子どもの教育にもその格差が及んでいるということが紙面を賑わせております。

SDGs の中では、誰も置き去りしないということがテーマになっておりますけれども、日本ユネスコ協会連盟の私たちも、国内の文字の読み書き、教育の問題に直面せざるを得ない社会的状況になってきています。本日はこの問題に早くから取り組んできた皆様にパネリストにお迎えしまして、私たちは今後何をできるかということを考えていければと思います。

パネリストの一番初めの豊島区教育長の三田一則さんは、都内の公立小学校の教諭としてもずっと教育にあたってこられて、2009 年から豊島区の教育長を務めていらっしゃいます。例えば 10 年間で 10 万本の苗木を植える学校の森づくりなど、非常にユニークでオンリーワンの事業展開を進めていらっしゃいます。



本日は、学校や教育行政の側から見た、国内での文字の読み書き学習の課題について語っていただきたいと思っています。

次のパネリスト小林普子さんは、新宿を拠点に子どもと子育て支援、外国ルーツの子どもたちの家庭支援をずっとやっています。



子どもたちがのんびりしたり学習したり、ご飯を食べたり相談したりと色々なことに使える居場所を、2017 年の 8 月から開設されて子どもたちがずっと詰めています。

18 年には、博報堂の国際文化・多文化共生教育部門の博報賞を受賞した活動を展開されています。

お三方目、株式会社電通のナージャ・キリーロバさん。通常ナージャさんと呼びしていますので、こちらでもナージャさんと呼びさせていただきます。

ナージャさんは旧ソ連生まれなんですけども、子ども時代に、ロシア、日本、イギリス、フランス、アメリカ各国の地元校で教育を受けたという経験をもとに、「アクティブラーニング、こんなのだらう研究所」といった教育の新しい提案をされています。



実は今日お持ちしたのですが、『ナージャの5つの学校』というタイトルで、クスクス笑ってしまうような中身の本を出しています。教育関係の方が多くと思いますので、皆様の学校の図書館にも一冊ずつ装備して頂ければ良いかと思います。ナージャさんには、ご自分の経験をもとに、外国ル

ーツの子どもたちの学習についてこんな考えもあるんじゃないか、というようなことを視点に、お話いただこうかと思います。

それでは早速、三田さんからの発表をお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

三田：皆さんおはようございます。今日はコメントーターということで進めさせていただきます。豊島区教育委員会教育長の三田一則と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

今この写真に写っているのは私なのですが、これは新しくできた庁舎 10 階の屋上の森の中で撮った写真です(スライド①)。

「え、屋上 10 階のところにこんな森があるの？」そうなんです。区内の全ての小学生 7000 人あまりにアンケートでどんな森を作りたいかという相談をして、川が欲しい、池がほしい、たくさん木がある森が欲しい、ということで設計して作った森です。そんな夢を私たちは頂きながら、10 年間で 10 万本の苗木を、この一番緑化が遅れている区内で緑化政策を進めてきた。

本校も、実は私が教育長になってから設計施工全部手掛けてきた学校で、エコスクールなんです。緑の恩恵をたっぷり頂いている学校であります。また、21 世紀の新しい AI の時代に生きる子どもたちに必要な、そういう能力をつける施設でもあります。

せっかく豊島区が会場になったので、少しだけ豊島区の紹介をさせていただきます。ここにありますようにこれが今お話しした庁舎でございまして、ここまでが区役所、ここから上のビルはマンションです。日本で初めて、役所と民間が一緒になって施設を作った一体型の区役所です(スライド②)。

それから 2014 年、23 区で初めて豊島区は消滅可能性都市という指定を受け、大変大きな衝撃が走りました。「え、豊島区はなくなるの？」という話です。私たちは区長を筆頭になんとかしなくてはいけない、ピンチをチャンスに変えようと活動をおこなってきました。若い世代の出生率が低い、若い世代の定住率が低いということが、一番の指摘の要因になりました。

様々な女性にやさしいまちづくりとか、住み続けたいまち学び続けたいまちという、様々な政策を一気に展開してきて、ちょうど今年の 1 月新年会で、区長が消滅可能性都市からの脱却宣言をしました。持続発展都市ということで宣言をいたしまして、ちょうどユネスコの皆さんと同じように持続発展させるという決意で、私ども教育行政も進めております。

その他にも、ソメイヨシノ発祥の地、駒込に昔染

井村がありまして、その植木職人が江戸時代末期に開発した美しい桜が、今では全国の桜の 7 割を占めるに至りました。そのような特徴のある街でございまして。

それからこのスライドをご覧いただきたいのですが、今日できたら是非見学していただきたいなと思っております(スライド③)。雑司が谷が未来遺産の指定を受けました。日本ユネスコ協会連盟のみなさんのおかげでございまして。そういうこともあって、この場所が会場に選ばれたのかなと思っております。池袋の駅から 10 分ぐらい歩いたところにこうしたものが残っております。

それから西口の反対側には自由学園明日館、重要文化財になっております。いずれも重要文化財でございまして。あるいは漫画の聖地トキワ荘、今このトキワ荘はお休み処というところですが、ミュージアムを作っていて、2020 年が完成予定ということで着工されております。そういう区でございまして。

さて、今日の本題でございまして、私共豊島区が進める日本語指導です。海外から定住者が増えてきています。日本の中で豊島区は実は人口が増えていて、10 年前は 26 万人程度だったのが、今は 29 万人を超えました。ということで人口が増えている街なのです。その 1 割が外国人であり、その関係で外国人がここで読んで、学ぶことが、ここ数年で一気に変化が出てきております。

これは東京 23 区のうちの 13 区が日本語教室を設置しているということを示しています(スライド④)。本区は 2 校で 5 学級設置しております。それから右側のこのグラフは、特にその中で上位の 7 区が、年ごとにどう変わってきたかということですが、昨年度の新しいデータで言うと、豊島区は 5 番目になるんですかね、4 番目か 5 番目。ちょうど一番多いのが、お隣にいらっしゃいます小林先生の新宿区です。それから荒川区、北区、豊島区と、こんな形で急激に外国人児童生徒が増えているということでございまして。

それからこちらのグラフは、豊島区の日本語指導の必要な児童生徒にどのぐらい変化があるかということです。この折れ線グラフは小学生の数です。この黄色い線が中学生の数で、この青い線が小学生の中で外国人児童生徒。こちらのスケールで見てください。そうしますと約 4~5 年間ぐらいで 1.5 倍に増えています。

それから中学校は、子どもの数も横ばいでなおかつ外国人児童生徒も横ばいという感じでありま

す。豊島区の中学校は、公立の学校が 8 校、私立の中学校が 9 校あります。子どもたちは進路指導をした上で、進路の選択が私立、公立と別れていきますので、中学校は微増ということですが、小学校が非常に増えています。

どこの国のお子さんが多いかと言うと、一番多いのが中国、次はネパール、フィリピン、英語圏のヨーロッパ、それからアメリカ、そしてミャンマーと続いておりまして、今や 21 カ国のおさんがいます。

区では今、次の時代のということで、2019 年から 2029 年までの 10 年計画の見直しをしております(スライド⑥)。その一つのフレーズでございませうけれども、この 10 年間でどういう風な変化が見られるのだろうか、ということ言いますと、外国人児童生徒の増加が、かなり見込まれています。小学校では 3.3%、272 人から 395 人。そして中学校では 3.5%ってということで 104 人から 113 人へ、というようなこととございます。

これも年度に色々な政治的な関係とか経済的な変動がありまして、予想つくかどうかというのは、分からない部分がございます。しかし間違いなく言えることは、母国の多言語化、さきほど申し上げた 21 カ国の言葉に、どうやって対応するかということ、毎日私共胸突き八丁で求められているというのが現状でございます。

したがってこれからの重点である言語、文化、生活。外国人児童生徒の増加に伴って日本語指導を徹底してやっていきたいということで、そのための教室確保や指導教員の養成、それから多言語対応の通訳機能を、もっと一般化できないかということで、「イマすぐ通訳」というのは商品名で恐縮なのですが、通訳機能を持ったシステムを導入していくことを考えております。

そこで日本語指導の中核になっているのが、私どもの教育委員会の施策である教育センターと教育委員会の事務局で、連携しながら、まず日本語学級の設置、それから日本語教員の加配を行っております。設置校は先ほど 2 校と申し上げましたが、池袋小学校と豊成小学校。仰高小学校から朋有小学校、西池袋中学校というところに、教員の加配をして対応しています。教育センターには日本語を指導教室の設置をして、設置校ではないところの子どもたちが追級して来られるようにということで対応しています。しかしながら実際に通って来られるのは中学生がほとんどです。数が少ない国の小学生にどう対応したらいいのかということは、私どものまだまだ課題になっております。

それから通訳派遣という事業で、中国語、スペイン語、ポルトガル語、ネパール語、タガログ語など 31 人の通訳の方を登録させて頂き、常駐の方もいますが、予約制で対応しています。中国籍のおさんが先ほどグラフで見ていただいたように大勢いますので、基本的にはそのように対応しております。「今すぐ通訳」というものを昨年から導入しまして、タブレットパソコンを使ってテレビで相手国の通訳さんが出てくださいます。そこでテレビ電話で会話をしながら、顧客が「どういう風に考えるのか」、「どういう意味なんだ」とかということを直接伺うことができるってシステムを、重点校に導入をさせて頂いて大変評判がいいのですが、高額な費用がかかってしまうということから、もう少し簡便な方法はないかということで、色々検討しているところでございます。

それから放課後対策事業ということで、学童保育の制度は全国的にあるかと思いますが、本区ではスキップと言って、放課後に誰でも必要に応じて全員が学校にいて遊んでいいよということになっています。その中でも個別に支援を要する、外国語の指導も含めて支援を要する子がいると、スキップの職員は別におりますのでスキップの職員は困ってしまいます。学校と連動なかなかできない。それでスクールスキップサポーターという、半分子どもたちの学校の時間を面倒見てもらって、その慣れた人が放課後対策のスキップに来てまた同じ子に対応して頂くという、新しい制度も導入して今やっております。

そうは言っても、どんどん外国人の子どもが増えていますので、通訳の養成とか指導者をもっと増やしてほしいとか、それから今新しい機器でポケットトークというシステムがあるということで、こういったものも導入して欲しいとか、検討すべき課題は山ほどございます。

これは教育センターの中の様子でございます(スライド⑦)。雑司が谷の地下鉄の出入り口のところにこの教育センターがあります。これは所長です。この先生が日本語教室の中心になってスタッフでやっている先生です。子どもたちはこういう風に追級してきて、それぞれのグループに分かれて先生方から個別の指導を受けるようにしております。

それからセンターの中の様子ですけど、教材についても、これは文科省から出されている DLA というテキストですが、その他に外国人マニュアルという色々な国に翻訳したマニュアルを使って、生活

に適應できるような工夫をして子どもたちに対応しています(スライド⑧)。

日本語を学ぶにあたり、今年はどんな目当てをもって頑張るかなという事をまず決めてもらいます。そして職員の中で月に応じて、日本の伝統や文化をそれぞれ違いが有りますし共通点もあるということから、取り入れて活動に活かしています。

これは一般的に色々な語彙を増やすための工夫です。それからこれは地理的な理解をするもの。何度も何度もこういうものを教室のコーナーに設置し、子どもが学ぶ機会を作っております。

もう一つは、分かり合うとか心を通じ合うということ。やはり一番大事なところですが、言語活動が足りないところをユニバーサルデザイン化して、例えば教育センターの部屋一つを、きちんとルビを振ってひらがなが読めるようになったら位置関係がこれで理解できるというような工夫とか、それからこれは区で作っているパンフレットですが、バーコードを当てれば自分の国のガイドブックを調べることができる、ということもやっています。また、黒板のあちこちに日本語で理解していくために必要なものをユニバーサルデザイン化して設置をしています。いつでも取り出して自分が調べられるような資料も置いて、充実をさせているところがございます(スライド⑨)。

これは日本語指導で人数の多い学校の場合、日本語学級が教育センターの日本語教室を利用し、個人の語学力に応じて指導にあたっています。算数や英語や実技教科は、他の児童と一緒に取り組むという点では、活躍できる場をできるだけ作って、適應できるような工夫をしております。自国の出身の国の文化や宗教について、あるいは食事やお祈りや持ち物などについての配慮をすることは心がけて行っております。

本区は区内にたくさん私立の大学がございますので、立教大学を初め学習院さんはすぐ向かいにあります。こういうところで留学生のお力も借りたり、その担当の先生方のお力も借りたりしながら、ボランティア活動で日本語の指導にあたってもらうところも関わってもらっています。

日本語教室設置校以外の学校では、追級をしたりテストにルビを振ったりとかして、初期指導の通訳には派遣を要請して、できるだけ他の子どもたちと一緒にできるというような工夫をして行っております。

これは教科ごとに出して頂いた課題となっているところ。やはり教科によって理解が進むと、言

葉の壁からなかなか分かりにくいと言うような部分があります。こういう事には私たちがどう挑戦していくかってことは、それぞれの現場を抱えているものの大きな課題だと思っております。

まとめます。昨年日本語指導を受けて卒業した中学生がこんな文を書いて卒業してくれていましたので、ちょっと紹介したいと思います(スライド⑩)。

「日本語教室の思い出。私は 2018 年の 1 月 5 日に日本に来ました。日本語教室に 2 月 15 日に入りました。みんなの前で自己紹介をした時は恥ずかしかったです。先生たちの話は少しだけわかりました。今では日本語がほとんどわかります。カタカナと漢字は難しかったけれど、日本語教室で練習したのでうまくなりました。学校の勉強では国語は少し難しいですが、その他の教科はほとんどわかります。人の話も最初は分からなかったけれど、今では大体わかります。」

という風に、この中で自分が理解してきたことを綴っています。そして、

「楽しく日本語を教えてくれた。僕は日本の社会と仕事を一緒にしたいんです。だから日本語教室が終わっても、日本語の勉強を続けていきたい。今までも日本語を教えてください、先生たちにはとても感謝しています。ありがとうございます。」

このような文章を書いて、私の目の前で読んでくれました。先生方と一緒に嬉しくなって、思わず大きな拍手で送り出したことを思い出します。

成功する例、なかなか思うようにいかない例、それから保護者からもっと日本の学校は厳しくやってくれないとか、色々な要望もあります。熱心な先生方と一緒に成果をあげて、外国から日本に来た子どもたちに日本語を通して、社会に共生社会の一員として生きていくことの大切さを、しっかり学び取れるような応援をしていきたい。そんなふうに考えております。私からの提案は以上でございます。

関口：三田さんありがとうございました。行政は本当に予算が足りない中で、例えばユニバーサルデザイン化を図るとか、留学生の力を借りるなど色々な工夫をされて、21 カ国にも渡る多国籍の子どもたちの対応されているご苦労が非常によくわかりました。

スライド① (©三田一則)



スライド② (©三田一則)

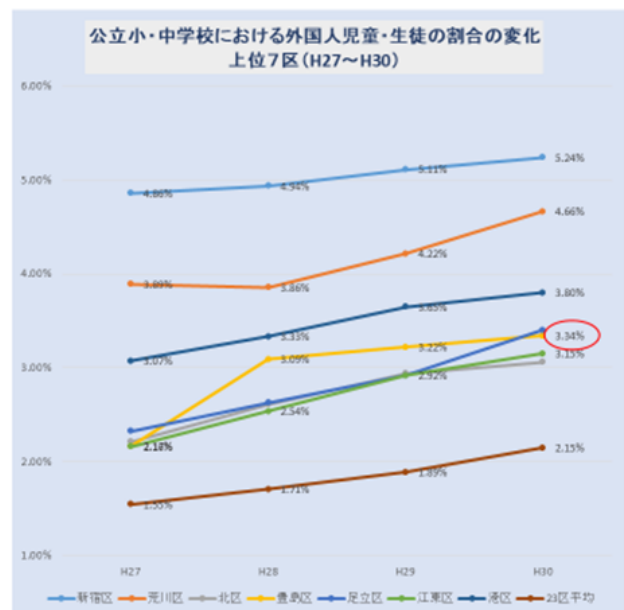


スライド③ (©三田一則)



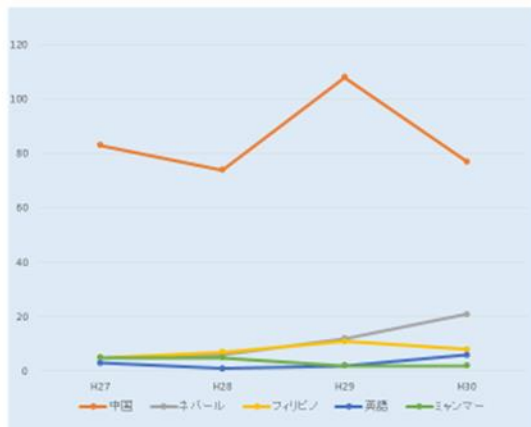
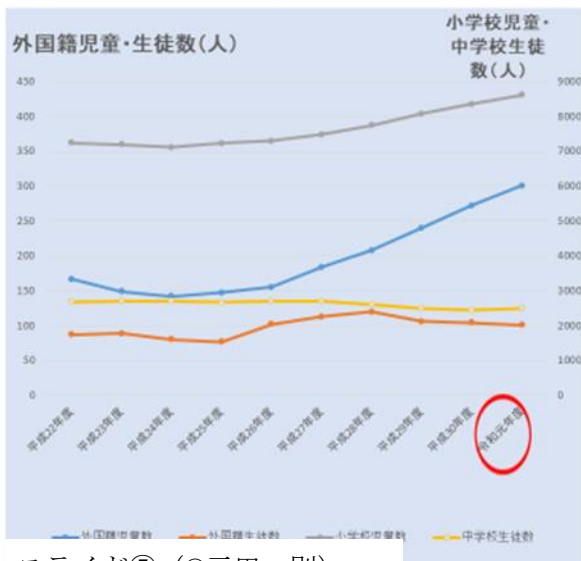
2 日本語学級設置状況と外国人児童・生徒の割合の変化

	小学校		中学校		設置校数(市区)	学級数(市区)
	設置校数	学級数	設置校数	学級数		
港	2	3	1	2		
新宿	1	2	1	1		
墨田	1	2			1	2
目黒	1	2				
大田	1	3	1	2		
世田谷					1	2
渋谷	1	2				
豊島	2	5				
北	2	5	1	3		
板橋	3	5	2	3		
足立					1	3
葛飾	2	3	1	2	1	2
江戸川	2	4	2	5	1	2
計	18	36	9	18	5	11



スライド④ (©三田一則)

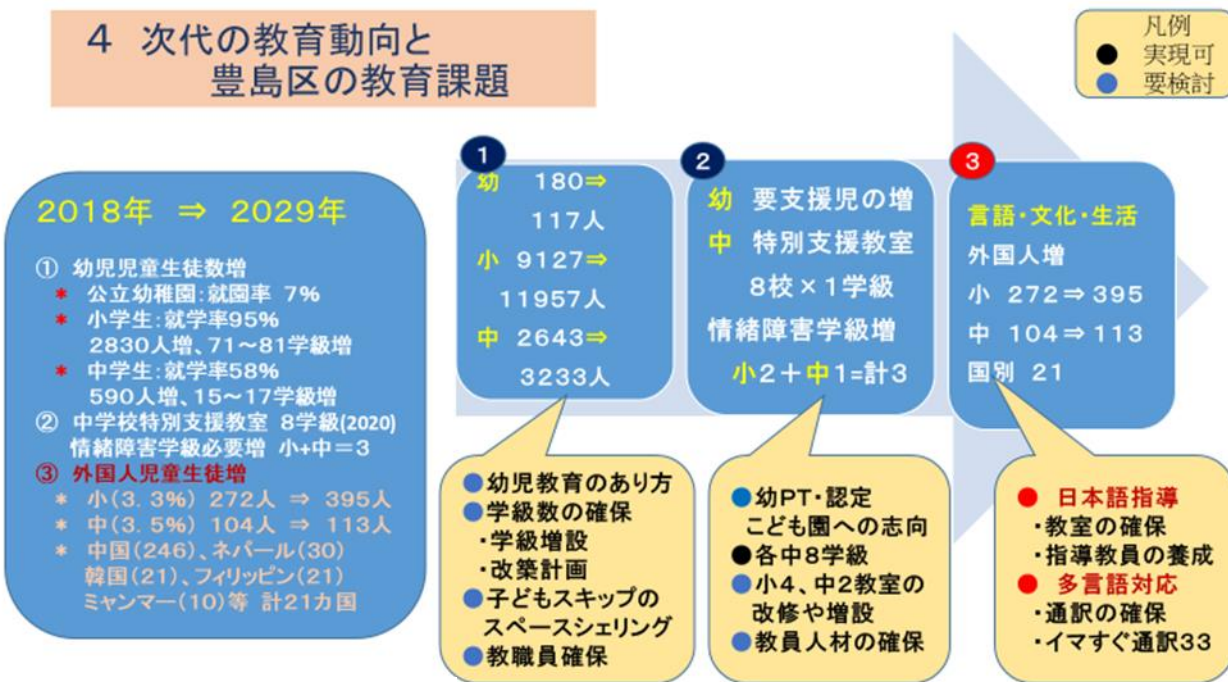
3 日本語指導が必要な児童・生徒の母国語別の人 数



- ・転入時の日本語能力のばらつき
- ・中国語を母国語にもつ児童・生徒が多い。
- ・定住型と一時滞在型の家族
- ・近年、ネパール語を母国語にもつ児童・生徒の転入が増えている。

スライド⑤ (©三田一則)

4 次代の教育動向と 豊島区の教育課題



スライド⑥ (©三田一則)

9 日本語教育の拠点 ⇒ 豊島区教育センター



スライド⑦ (©三田一則)

10 日本語指導 ⇒ 子供の目線で教材づくり



スライド⑧ (©三田一則)

11 分かり合う、心通うユニバーサルデザイン



スライド⑨ (©三田一則)

日本語教室の卒業生

日本語教室の思い出
中学校

私は、二〇一八年の一月五日に日本に生まれました。日本語教室に二月十五日に入りました。みんなの前でじこしよがいをした時はすかしかたです。先生たちの話はすこし分かりました。今では、日本語がほとんど分かりました。カタカナと漢字はむずかしかったけれど日本語教室で練習したので、うまくなりました。学校の勉強では国語がすこしむずかしい

ですが、その他の教科は、ほとんど分かりません。人の話もさしよは、分かりなかつたけれど、今ではだいたい分かります。日本語教室の先生たちがやさしく、楽しく日本語を教えくれました。しょう来、学んだ日本語を使って日本の会社と仕事をいっしょにしたいと思っています。だから日本語教室が終わっても、日本語の勉強をつづけていきたいと思っています。今まで日本語を教えてください、先生たちには、とてもかんしゃしています。ありがとうございます。

スライド⑩ (©三田一則)

さて次ですけども、NPO 法人みんなのおうちで活躍されています、小林普子さん、よろしくお願ひいたします。

小林: NPO 法人みんなのおうちの小林です。どうぞ宜しくお願い致します。一応 10 分ということですが、その割には枚数が多いので、割と早口で話して行きます。

まず表紙にある写真(省略)は、毎年 12 月の最後の土曜日にやっている交流会です。

教室に通っている子どもたち、その両親、親御さんあるいはボランティアの人たちが集まって、毎年約 100 人、あと卒業生も集まっています。100 人超える子どもたちも集まって、親御さんが作った多国籍の料理で、日本人側は忘年会、子どもたちはクリスマス会という風な形で、毎年 12 月に行っております。今年も 12 月 21 日に予定をしております。象徴的な写真なので、皆さんにまずと思ってお見せしました。

新宿の姿ですが、豊島区と新宿は非常によく似た環境にあります、先ほど教育長さんからもありましたように、新宿は外国の人が一番多いということで、人口動態で 1970 年に 1.5%だったのが、今年 4 月には 12.2%にまで増えているということで、やはり年々増加してきています。これは働く人たちということなんですけれども、これに伴い子どもたちも非常に増えているということで、教育長さんから豊島区の学校でのサポートについてお話がありましたが、多分新宿もほぼ同じような事をしております。

という中で、私は NPO として、学校の外側でどのように、あるいは新宿区民としてどのように、この人たちと付き合っていくかということ、15、6 年にわたって行なってきたので、その経験を少しお伝えしたいなと思っております。

新宿の外国人住民の在留資格は、留学生が非常に多いです。40%近くが留学生になっておりまして、その関係で毎年 1 月の成人式の話が NHK のテレビで放送されるんですけども、成人の約 5 割、50%が外国籍の方ということで毎年非常に話題になっております。日本語学校が約 50 校あり、あるいは早稲田大学が非常に多くの留学生を受け入れているということもあって、新宿に留学生が非常に多いということになっております。

一方、留学生が多いということは、すごく流動性の高い外国人ということになっておりまして、そういう意味では、新宿は学校教育以外の部分でもかな

り苦労が多いかなと思っております。

豊島区の方でも一番多いのが中国人ということが先ほどありましたが、新宿も中国の方が非常に増えております。新宿の場合は先ほどちょっと指摘したように、二番目が韓国の方。それは皆さんご存知のように、新大久保にコリアタウンと言われているようなところもありまして、韓国の方が多いです。ただ増え方としては政治的なこともあり、増減は色々です。外国人の年齢別構成も、やはりちよつど 20 代が 40.7%ということで、留学生が多いということと関連しているというふうに思っております。これが外国籍の方の状況です。

新宿に来た子どもたちに対して、日本語サポート指導を行政のサービスという形で行っております。時間数としてはざっくり申しますと、中学生の場合一番長い子どもたちで 100 時間ぐらいのサポートがあります。下に表がありますけれども、これは 1 年間に日本語サポート指導を受けた人数です。平成 16 年度からの数字を示しております。この数字が示しておりますように、日本語サポート指導を受けた人数は、毎年約 100 人を超えています。この 100 人を超える子どもたちというのは新たに入ってきた子どもたちなので、累積していつている数字です。

二番目と致しましては、外国ルーツの人々の最初の授業。これは NPO としてということになります。NPO としてまずどんなことをしたかと申しますと、子どもを連れて親のための日本語教室というのを最初に立ち上げました。背景には 2004 年 6 月高田馬場近くのマンションで、外国ルーツの女子中学生が男の子をマンションの踊り場から突き落としたという事件がありました。これはかなり大きな社会問題になりまして、それを受けて文化庁の委嘱事業として子どもを連れて親のための日本語教室というのを立ち上げて、それを引き受けるという形で教室を開催いたしました。

これに伴い NPO としてツアーを組みまして、外国人子育て家族と地域の子育て家族の愉快的週末旅行として、新潟の方へのスキーツアーを組みました。その時に参加した親御さんから言われたことが、「一番心配なのは子どもの教育なんですよ」と。ではこれをどうやって解決していくかなと思ひまして、次の事業に移っていきます。

この親子日本語教室は、現在大久保小学校で週 1 回継続して行われております。

NPO との協働事業ということで、先ほど申し上げた親御さんの子どもの教育が非常に心配だとい

う声もありまして、「こどもクラブ新宿」を、新宿区と NPO の協働事業として 2007 年に立ち上げました。

なぜ立ち上げたかという背景には、先ほど申し上げたように平成 10 年～平成 15 年頃から 100 名を超える子どもたちが来日して、新宿区内の小中学校に編入しているという事実があります。それから、その子どもたちは日本語が十分でないために、なかなか学校の授業についていけない、あるいは学校に馴染めないという現実もありました。また、多くの保護者の方が夜働きに出ているということで、家庭に取り残される子どもたちも多い。日本語があまり分からない中で取り残されていくということもありました。

だからほとんどの子どもたち、多分 100%近い子どもたちが、望んで日本に来ているわけではなく、親に連れられて仕方なくてきてしまった。日本語を学ぶ動機もあまりない、友たちもない、という子どもたちが多かった。そのようなことの問題を解決するために教室を立ち上げました。

また教室の目的は、不足する日本語の学習をする、一人で解決できない宿題をする、ということでした。当然親御さんも日本語が十分できるわけではないので、学校から出された宿題をなかなか一人で解決できない。あるいは学校でも授業で分からない時に、手をあげて先生に「これがわからないです、教えてください」となかなか言えないから、教室に来た時は母語で充分に話してもらうことで精神的安定にも繋がった。ボランティアと交流することで、大人の日本人と会話をする機会も設けました。

目的はいくつかありますが、子どもたちが高校に入る際の多くのケースで、経済的に困窮している方も非常に多いので、できれば公立学校に入れるところまでサポートしようということで教室を立ち上げて現在になっております。

教室に参加している子どもたちというのは外国籍だけではなくて、日本国籍を持った子どもたちも多くあります。外国籍の子どもではなく外国にルーツを持った子どもと言った場合、どのような子どもたちかと申しますと、両親とも外国の方、例えば両親とも中国の方あるいはタイの方という中で生まれたお子さん。その場合は両親もお子さんも外国籍でありつつ、母語も外国語である。もう一つは国際結婚という形で生まれたお子さん。多くの場合はお父さんが日本人でお母さんが東南アジアの方というケースが多いです。もう一つは親御さん、お母さんが母国で離婚して子どもを置いてきた。その子ど

もを日本に呼び寄せるという形の子どものもので、このような子どもたちは日本国籍があるけれども、日本語がうまく話せないという子もたくさん含まれております。

そのような子どもたちが教室に来て何をしているかと言うと、多くの場合小学生クラスでは宿題、あるいは親御さんがフォローできない部分のところをフォローしている。中学生クラスになりますと週 3 回開いております、どこまで行っても高校に進学させるという前提のもとに、学校の中での科目をサポートしております。特に数学、英語、化学、社会。国語の指導は非常に難しいというところがありますが、子どもの様子を見て国語も勉強するようにしております。

その中で見えてきた問題はいくつかありまして、日本語学習という点におきましては非常に大きな問題があります。新宿では初期指導ということをしておりまして、その初期指導が終わった子どもたちが教室に入ってきておりますので、多くの子どもたちがすでに教室の中で勉強するという場面に遭遇しております。その中で日本語を勉強している余裕がないという気持ちになっておりまして、教室に来た時には日本語の勉強はもうしたくない、学校の勉強を何とかしてほしい、ということで日本語指導はほとんどしておりません。かといって十分な日本語の語彙があるかと言うと、不十分ということもありますので。教科を通して教科書を読みながら日本語の語彙を増やしていくという方法で、少しでも日本語の語彙を獲得できるように、あるいは学校の教科書が理解できるようなサポートを教室で行っております。

子どもたちの年齢に応じてやはり日本語の習得というところに大きな差があります。中学校で来た子どもたちは高校受験に際して、小学校の低学年で来た子どもたちよりも意外と高校に合格していくということもあります。というのは、言語習得という部分において、やはり抽象的概念を母語で学んだ子どもたちの方が学習効果はあがる。小学生の時に来た子どもたちは、二つの言語を上手く高レベルのところまで持って行けないとか、あるいは小学校の時点で学力が非常に見えづらいということもありまして、なかなか学力を伸ばすことができないという状態で、高校受験に遭遇していくということもあります。だから教科学習に関しましては、来日前の国でどのような教育を受けてきたかによって、かなり差があります。日本に来てからの学習は、子どもたちにとって非常に困難ではあります。

学校教育の問題なんです、色々最近では改善されまして、教育委員会に「入りたいです」と言った場合、断られるということはほぼなくなりました。以前は外国人が日本の学校に入れないと言われるケースもありましたが、最近はそのようなことはほぼ改善されてきております。高校の教育の壁は先ほど申し上げたようなこと、あるいはその先の大学に行こうと思った時に高額な授業料が払えないし、ビザによっては奨学金を借りられないという現状もありまして、かなりの資金がかかるということで、なかなか高等教育には進めないという現状です。

そのため、高校を卒業した後、今申し上げたように高校卒業後の進路は経済的な問題に関わっております、非常にその子にとって大きな問題となっております。教室の卒業生の約 6 割が非正規雇用という形になっておりまして、これは昨年度文科省の方が調査した結果にも同じような事が言われております。

あとは家庭の問題で、DV 家庭がかなり多いです。その中で特に気になるのは父親が日本人の家庭において、DV が非常に多い。私も子ども支援センター、児童相談所あるいはシェルターで連携して、何人かの子どもたち、あるいは親御さんをシェルターに逃がすということもしております。私に関わったケース全てで父親が日本人だったので、日本側がその関係をどう取り上げていくかが、とても問題かなと思っております。

経済的問題についてですが、教室の場合は区と無料で行っておりますので、生活保護家庭あるいは母子家庭が非常に多いです。既に新宿の場合ですと、第二世代あるいは貧困の再生産が始まっているということもありまして、この問題は大きいなと思っております。

社会的問題と言いますと、情報不足によってなかなか就職をちゃんとできない、ビザの問題、国として移民という考え、言葉が使われていないということなどがあります。また一方で在日している外国人の中で、階層化が始まっております。貧困の再生産と、他方ではやはりお金のあるグループとないグループと二層化されているところが気になっております。

これは教室の様子です。向かって右側の写真は、教室を立ち上げた頃の写真(省略)です。左は今教育センターの方でやっている教室です。

NPO と致しましては先ほど紹介いただきましたように、2017 年に居場所を設立致しました。設立したことによって多くの問題も見えてくる一方で、解

決できる問題も増えてきたと思っております。

居場所「みんなのおうち」の様子です(写真省略)。毎回夕食を作って食べています。

自宅に学習机もないということなので、このように学習する場も作っております。これは先ほど表紙にあったのと同じ多文化交流会の様子です。

映像制作活動 2009 年から行なっております、今月も 16 日にこれをやることになっております(写真省略)。

あとスキーツアーを 2015 年は金銭的な問題もあって一旦中止しておりますが、毎年スキーツアーをやっております。

これは他言語で絵本の読み聞かせ、大久保図書館と連携して行なっております(写真省略)。

今年から行っておりますがキャリア教育(写真省略)。キャリア教育をする目的は先ほど申し上げた卒業生の 6 割が非正規であるということで、今回は四つのテーマに絞ってキャリア教育を開始しました。

これはちょっと自慢なんですけれども左側の子は教室を卒業した子で、川崎フロンターレで J リーガーに一昨年なりました。右側の子は昨年中学校卒業で、青森山田にサッカーでスカウトされて行きました(写真省略)。

最後に NPO の活動としてこの赤いところだけ見ていただければわかりますが(写真省略)、活動から得た宝物は、関わった子どもたちや人々が私やボランティアを育ててくれたということでこの教室の中で既に多文化共生は始まっていることです。ただそれをいかに地域に広めていくか、あるいは新宿全体に広げていくかというのは、まだまだ試行錯誤ということになっております。

ご清聴ありがとうございました。

関口: 小林さんどうもありがとうございました。NPO で実際の現場に関わられているということで、視点が非常に鋭くて、例えば子どもの学習の問題ですが、私たち日本語ができればいいかと思っていたら、日本語の学習と学校の勉強は別だというような視点だとか、外国人ルーツの世代で階層化が始まっている等、現場の本当に細かい点までピックアップしていただきまして、有意義な説明がありました。ありがとうございます。

さて次はキリーロバ・ナージャさん、もうこれは聞いていただくと、本当にクスクス笑ってしまうような説明になります。どうぞよろしくお願いいたします。

ナージャ: 皆さんこんにちは。ナージャです。10 分しかないので超マシガントークでいきたいと思えます。私はお二方と違って唯一学ぶ側でしたが、どういう生活を小学校・中学校から今まで送ってきたかをちょっと説明したいと思います。

まず、私が今まで住んできた国をご紹介します。ソ連(現在のロシア)に生まれまして、その後は日本(京都)、イギリス(ケンブリッジ)、フランス(パリ)。また日本(東京)に戻ってきて、アメリカ(ウイスコンシン州)に行って、日本(東京)に戻ってきて、カナダ(モントリオール)に行って、日本の色々な都市(札幌、名古屋、東京)に住んで、これからはどこに住むんだろうという感じになっております。

学年に置き換えて考えると、10 回以上転校してきました。小学校に入学しましたが、なぜかまた保育園に戻りまして、そのせいで次は小学2年生をスキップして、小学校3年生になりました。

これは不思議なことなのですが、小学校を3回卒業しています。どういうことかと言いますと、ロシアの学校は小4で卒業なので卒業しました。ところが、その後アメリカに転校したら小5で卒業で、「またですか」みたいな感じでまた卒業しました。今度日本に来たら、「小学校は6年間あった」という感じで、そろそろ中学生になりたいなと思いつつ、もう一度小学校に戻りまして、また卒業して、という具合でした。

ギネスに応募しようかなと思ったら、母親に卒業証明書があるかわからないと言われてまして、計画は頓挫しています。

その後、中学校・高校は3年ずつ、大学は4年間行っています。

親が必ず現地校に行きなさいということで、私は毎回現地校に通っていたんですけど、言語で表すとこんな感じの生活を過ごしていました。

最初はロシア語が母国語なんですけど、日本に来て日本語、そして英語、フランス語、日本語、英語みたいな感じで、毎年言語が変わっていました。もちろん何も分からないので、小学校の8割の時間は、何一つ分からないまま過ごして今に至るって感じです。

続いて、日本語、英語とフランス語、日本語という順番です。

日本語は覚えたのですが、最初は京都でその

後東京だったので、「君の日本語変だね」ってみんなに言われてました。どうやらそれは関西弁だったらしく、私は全然気づかなかったのでそうやって過ごしていました。英語でもイギリスからアメリカに行くと「発音が変」とか言われ、ほとんどの時間で何か色々なツッコミを受けながらも楽しくやってきました。

こういう生活をするとなんが起るかという、毎回先生が違うことを言うんですよ。違う国に行くと「前の国と真逆のこと言っている」と思うことがたびたびの日々を過ごしていました。

そのような暮らしをずっとしているとどういうことになるかと言うと、もう何が正解か全く分からないし、誰の言うことを聞けばいいかわからないし、毎回途方に暮れていました。でも途方に暮れてもしょうがないので楽しく、面白がるしかないと考えていたので、今から私が編み出した五つの切り口を皆さんにお伝えしたいと思います。皆さん、教育関係の方が多く思うので、釈迦に説法なことが多々あるかもしれませんが、ご容赦ください。

私が住んだことのある国は6か国ありますが、カナダは省きます。またヨーロッパばかりだったので偏らないように、この前モロッコの大学生にモロッコについて色々聞いてきたので、モロッコを含めてみます。ということで、日本、ロシア、アメリカ、フランス、モロッコ、イギリスの6か国について考えてみたいと思います。

まず一つ目は、一人で登校するかどうかについてです。

日本は「一人で学校に来なさい」と言われて、すごく違和感がありました。ロシアとかは絶対親と一緒に学校に来るので、最初は親が10メートルぐらい離れたところから覗き見して、うちの子はちゃんと学校に行っているのかみたいなことをやっていたのですが、先生に怒られて徐々に一人でできるようになりました。

6か国の中で学校に一人で行ったのは、日本とフランスしかなくて、あとは全部親と一緒に行きました。ロシアはもちろん親と一緒にに行くのが基本ですけど、アメリカはスクールバスか親の車で送ります。私は学校から徒歩3分の所に住んでいたの歩いで行っていたのですが、基本は親と一緒に。モロッコでも基本的に学校が家から遠いので、親が送っていくというのが普通らしかったです。

イギリスが一番面白くて、年度の初めに誰が送り迎えするかというリストを作らなくてはいけなくて、そのリストに名前が入っていないと、親であつ

で「この人と一緒に行ってもいいよ」と先生が子どもに言わないのです。そのため先生が保護者をほぼ全員分知っているという感じで、とても厳しいシステムになっていたのが面白いです。意外と世界で見ると一人で登校しない方が普通だと思ったわけです。

ちなみに、ちょっと脱線して、学校の校舎について見てみると、その形は全部違っています。日本の校舎は皆さんよくご存知ですね。ロシアは小・中・高同じ建物だったり、フランスは中庭があったり、イギリスは2階建てだったりします。

二つ目は、みんなより成績が良い方がいいという学校と、みんな一緒に勉強してみんな一緒に成績が上がるほうがいいという学校があるということです。

ロシアはもちろんスパルタ教育なので、自分の成績が良ければそれで良かったので、最初は、別の思想を持つ学校があることにすごいびっくりしました。

これはもしかしたら座席に関係するのではないかとちょっと思っています。

日本・ロシア・モロッコは似たような感じになっています。日本は 2 人くっつけて座ることがとても多いと思いますが、ロシアとモロッコも大体このパターンです。

アメリカ、イギリス、フランスは、みんな向かい合って座ってグループワークするんですよ。

アメリカは真ん中にソファがあってゴロゴロしてリラックスして学ぶ科目と、机に向かって書く科目と別れていて、算数以外はだいたいゴロゴロスタイルが多いです。

フランスでは、外国人クラスが学校にありました。だからフランス語がしゃべれない子どもたち、小3、小4、小5年生ぐらいが集まって向き合って座って、先生に「とにかく喋れ喋れ」と言われてましたが、当人たちは「いや、喋れないのですが...」みたいな感じで、身振り手振りで学んでいました。

これは予想通りの結果かもしれませんが、前に向いて座るタイプ(日本・ロシア・モロッコ)だとやっぱり先生に集中するので、個人の成績とか個人のできる度合いが計られることがとても多いです。他のフランス・アメリカ・イギリスでは、意外とみんなと一緒にできるタイプが多いです。

私がいたイギリスの学校だとテーブルごとに成績がつかました。テーブルごとに得意科目がバラバラな子が座ります、私はたまたま英語が苦手だ

ったけど隣の子は算数が苦手だったので、私に算数を聞くとか、そのようにわかることを教え合って学ぶスタイルでした。成績が一緒なので、自分だけでも意味がないってことでみんな教え合っていました。

アメリカは先生が意見を聞いてくるので、幅のある意見が大事だったりします。そうするとやっぱり個々の違う体験をした子が、そこでスポットライトが当たったりします。

フランスは同じ状況の子どもたちと一緒に学ぶので、自分はフランス語ができなくてどうしようみたいな感じが共通していて、「フランス語できないけど頑張ろうね」みたいな感じで、お互いに何語を喋っているか途中でわからなくなることもしばしばありました。

自分だけができるようになるのは、自分の凄く得意なものがあればすぐドンと伸びるけど、私みたいな現地の言葉がまだできない子にとっては馴染むのがちょっと大変でした。けれど負けず嫌いの部分が着火されたので、良かったかなと思います。

三つ目は、「何か意見をたくさん言ってね」というところと、「あんまり言わないでね」というのがあります。私は非常に人見知りなのであまり喋ったりしないのです。喋れないのではなくて母語でも喋らないのです。

アメリカでは「もっと意見を言いなさい、言いなさい」と特に言うんですけど、日本に来ると、「なんかあまり変な意見言うと、先生ちょっと困っちゃうんだよ」と言われたりしたこともありました。結構先生によるんじゃないかなと思いますけれど。

各国の先生についてですが、日本の先生は何でみんなジャージなんだろうという疑問から、ロシアの先生は何で体育の先生以外、みんな女の人なんだろうとか、モロッコは何で男の人はみんなひげもじゃなんだろうとか、色々な先生についての疑問があります。フランスはフランス語とその他の教科を教える先生が 2 人いたんですけど、なんで先生が 2 人もいるんだろうとか思ったりして。

これをさっきの質問に分けると、仮に「トップダウン先生＝意見言わないで」と、「ボトムアップ先生＝意見もつって」って呼んでいます。日本とロシアとモロッコは先生が知恵を伝授するので、みんなに均等にフォローしていくやり方をしている、あまりそこで変な意見を言うとまとまらないというか、一緒に学んでいくことの方が重要視されている感じがします。

やっぱりフランス・アメリカ・イギリスは、色々な意

見が出た方が面白いということで、逆に外国人の子どもがそこで変わった意見言うと、なんか「おお、そんな意見はなかった」って言って褒められたりもして、個性を評価する所が凄くあります。

フランスで私のいた外国人のクラスは、個性を大事にしたんですけど、普通のクラスはもうちょっと、多分トップダウン型なので真ん中に位置すると思います。そういうところにも先生がどんなことを引き出していか、その違いがあるなということが凄くありました。

四つ目ののはてなは、ある国では「それはわがままだね」と言うけど、けど他の国では「それは個性だね」と言うことです。私は「お肉を食べない」主義なんです。宗教でもアレルギーでもないのですが、12 歳から肉を食べていません。

イギリスのランチタイムでは、皆バラバラのものを食べています。給食の人もあるし、あと各々の弁当を食べる子どももいます。私は日本の給食だと食べる物がほぼなくて、1 年間牛乳だけ飲んで過ごすという体験をしたことがあるのですが、結構困りました。

そのシステムを考えてみたのですが、「給食の国」と「弁当の国」が分かれているようです。

ロシアと日本は給食も一緒のカテゴリーですね。ロシアは低学年だと、10 時 15 分ぐらいに朝食も出たりします。フランス、アメリカ、イギリスは弁当でも給食でも好きな方を選べます。モロッコは弁当を持ってくるか、何か買いに行くか、どこかで食べてくるかです。フランスは学校から出て家に帰って食べてもよし、買い出しもよし、と好きにできるということがありました。

こうバリエーションがあるのは何でだろうと思ったのですが、国によって食に対する思想も違っているようです。同じものを食べて行くことが大事だという考えは、日本とロシアではまだまだあるなと思っています。

多分アレルギーとか宗教の子への配慮はありますが、「主義」を持つ子どもへの配慮については、ロシアと日本はそんなにまだ理解度がないと思います。好き嫌いをなくしたり、同じものを栄養バランスよく食べるという理由がちゃんとあるので、それはすごくいいなと思いつつも、他の四つの国はやっぱり個々の食文化を尊重しているので、給食がだめなら持ってくるか帰って食べるとかっていうのは許されていたました。私が肉を食べないのを、個性だと判断するか、好き嫌いのわがままとするかは国によって分かれています。

最後は言葉の話です。さきほど、関西弁のことを話したんですけど、私は毎回行った国の言葉を喋れる状態で行ったことは全くありませんでした。「ハロー」ぐらいはわかったかもしれないですけど。そういう感じで来た子を、どうフォローするかが国によって違いました。私の時代の話なので今は変わっているかもしれませんが、システム化されているところと、されてないところが当時はあったのではないかなと思っています。

ロシアは特に対策はないです。多分外国人が当時そんなにいなかったっていうのはあるかもしれないですけど、基本は普通に教室に通ってもらって、そのうちわかるようになるだろうという淡い期待を込めていたようで、何もありません。

日本だと、東京外語大からロシア語専攻の若い女性の方が教えに来てくれていました。その時の私はたまたまそういう人がいたので、個別に月に何時間か教えてくれるみたいなのがありました。

アメリカとかだと皆さんご存知のように ESL というのがありました。クラスでも 1/3~半分近い子どもは母国語が英語ではないので、アメリカ生まれでも ESL に通う子が多くて、普通にみんなが英語を学ぶ時間に ESL に行きました。個別指導が初期のところはあるし、慣れてきたらグループで一緒に学び、文化とか食べ物とか何かお祭りとか、子どもが興味のあるモノを一人ずつ先生が見つけて行って、そこから英語に興味持ってもらうために努力してくれたのですごくやりやすかったです。

フランスはさっき言った通り外国人クラスがあったので、変なプレッシャーというかみんな喋れないから一人だけ仲間外れにされない感じがあって、それも良かったです。

モロッコはそもそも外国人がそんなにいないけど、ただアラビア語の学校とフランス語の学校があって、どちらの言語で学ぶかというのが選べる仕組みになっているそうです。

イギリスでは先生が私に英語教えてくれたことはなかったけれど、クラスメイトが同じテーブルにたくさんいるので、彼らから英語を学びました。そうすると子どもがしゃべりたい英語って、必ずしも先生が教えてくれる英語ではないので、変な英語ばかり覚えて過ごしていました。

このようにやり方がそれぞれありましたが、私は負けず嫌いなので指導されなくても絶対に負けずに上手くなるという気持ちでサバイブできました。でもやっぱりどうしたらよいのかというのは、結構難しい問題だなと思っています。

学校には色々な違いがあるけどやっぱり正解はないし、たぶん日本の子どもたちをフランスの議会方式に並べて日本語で喋ってくださいと言っても、そんな性格をしていないので難しいだろうなと思います。参考にはなるけど、別の独自の何かを考えていかなきゃいけないなと思います。なのでそれぞれの学校や子どもたちにとって、時代に合うものを、私たちは考えていかなければいけないところに来ているなと思います。

他方、学校の日本語教育で特別に教えてもらったことによって、私は日本語が喋れる様になったことに感謝をしていますので、何か今後も子どもたちのためにできることがあったらいいなと思います。

関口： ナージャさん、色々ありがとうございました。日本での色々な教育の課題を、大学の先生が必死になって研究していますけど、ナージャさんの話を聞いていると、もしかしたら先生のジャージを禁止してブランド服を着せると、半分ぐらい解決するんじゃないか思ってしまう。面白い視点を頂きました。ありがとうございます。

さて残り 20 分ぐらいになりましたけれど、私たちのユネスコの活動では、今後日本にいる外国ルーツの子どもたちに、どう関わっていくかっていうことが課題になってくるかと思っています。それで、既に先進的な活動されているお三方に、それぞれちょっとヒントをいただければと思います。

まずはナージャさんから。普通の私たちは、小学校の時に 5 回転校するという経験はないですね。でもその経験がない中で、疑似体験でもしてみても頭をナージャさんみたいに柔らかくする方法はどうしたらいいのかということ。

それから小林さんには、NPO としての小林さんみたいに、鋭い目で色々な課題を見つけることはどうしたら私たちのような一般の人でもできるようになるか。

それから三田さんには、小学校を緑化する時に色々な子どもたちの声を聞いた、1 万人ぐらいに聞いたというその同じ手法で、私たち NPO の人が地域にいる外国ルーツの子どもたちに聞いてみる場合、聞く方法はどんなことが考えられるか。

それぞれ 3 分ずつぐらいからでもお願いできますでしょうか。最初はナージャさんお願いできますか。

ナージャ： とても難しい問題だなとは思いますが、でも私みたいな色々な国で転校した子どもというか、

私ぐらいの世代の友たちに聞くと、みなが共通して一つの事を言っています。それはどこかのタイミングで、自分の武器というか、立ち位置というものを見つけれられるかどうかが、すごく分かれ目だったということです。

やはり外国人として来ると、他の人と違って何も通じない中でどうやって生きていくかと考えます。それまで勉強がすごくできたけれども、転校した瞬間にいきなり学年トップから学年ビリに必然的になってしまうわけじゃないですか、喋れないってだけで。そういうショックがすごく大きいのです。

特別扱いしてほしいと思うわけではありませんでした。私は逆にそういうのをあまり望んでなくて、むしろ私は普通の子と一緒に考えていました。ただ言語が喋れないだけだから、「先生もロシア語できないでしょ、私も日本語できない」みたいな感じに対応していました。あまり特別に教えてもらうというより、普通に過ごしている間に学んでいく、だから 1 年後には結構喋れるようになるし、成績も上がるみたいなことを体験していました。

小学校の時って学びに対するプレッシャーがそんなになかったんですけど、でも中学生になった時に、そろそろ本格的に勉強しないとまずいという事に気づきました。その時はカナダの学校にいて、テストとかもあったのですが、例えば何か調べてプレゼンテーションしてくださいとか、そういう授業がとでも増えます。例えば作文を書いてきてくださいとか。そうすると言葉はできなくても、どうやってそれを他の子と同じようにできるかということ画策していくわけです。

アイディアを使えば、全然喋れなくても絵とかジェスチャーを使えばいいものが作れる。作文とかもポエムにしちゃえば、そんなに語彙力いらんないじゃないですか。そういう風に工夫していったんですよ。自分には他の子にはない違う国の経験とかバックグラウンドがあるので、それを混ぜ込んでみて、そうすると個性が目立ってきます。私はこういうことだったらたぶん英語がまだできなくても、他の子と戦えるんだっていうのに気づいて、自分の立ち位置を発見しました。そうするとあまりそれが苦にならないというか、得意分野、立ち位置が分かっちゃったので、それを突っ走るというか、学習に応用していくということが大事でした。

ずっとアフリカで転校を繰り返していた帰国子女の子に聞くと、みんなそういう体験があって、そのグループや学校の中で、どういう立ち位置に自分はなると生きやすいかというのを、子ども自身が見

つけなきゃいけないので、それが見つかるきっかけが、大人たちのサポートによって得ることができるというなと思っています。

テストはマルバツだけど、意見を聞くとか作文とかは個性が出やすいので、何かその子が光る瞬間というものを見つけて応援してあげると、算数でも何でもいいんですけど、いいなと私は思います。

関口： ありがとうございます。次は小林さんお願いできますか。

小林： 質問いただいたことは、実は先ほどの最後のところで端折ってしまったところに書いてあったことなんですけれども、この子どもたちのことを地域で理解してもらおうというのは、なかなか難しい問題になっているのが現状です。

NPO として行政等にも色々提案している中で、新宿も多言語で相談窓口を持っているんですけれども、青少年に対する窓口相談というのがない、というところが非常に大きいかなと思います。

子どもたちが持っている問題というのは、家庭内の問題が非常に多い。例えば先ほど申し上げたように虐待の問題だったりとか、経済的な問題だったりということもありますが、それを行政の区役所の 1 階にある窓口に行って、「すみません」ということはなかなか言えない。

子ども総合センターはありますが、なかなかそこに足を運んで相談できる場所がない。現在「居場所」の方でそのような相談をしているのですが、やはりそのような場所が欲しいかなということです。

もっと一歩進めて言うのであれば、例としてその青少年たちをいかに地域で使っていくか。例えば避難所立ち上げのメンバーに彼らを入れていくとか、大体の子どもは卒業した学校が避難所になっているので、避難所立ち上げの場合にその子たちを使ってみたらどうだろうなということも提案はしていますが、なかなか実現していかないということもあります。

日本に来ている親御さんたちは、地域住民になろうと思って来ている方はほとんどいないです。経済的理由で日本に来ていますので、地域住民となって、あるいは町会に入るといった考えの方が非常に少ないです。その中で、やはり地域の方たちも、あの人たちはどうせ国に帰る人だと思っている風もある。ただ実際には、ほとんどが永住していくということもありますので、そこは地域住民としてお互いに歩み寄るのはどうしたらいいかと、そここのところ

の架け橋になっていくのが NPO かなと思っています。

それで例えば日本語さえできればいいんという話でもないし、かといって日本語が十分できないということも、日本語が非常に難しい言語ということもあります。社会というのは次世代の人たちにつなげていくと考えると、現在の時点では私たちが頑張るって次の社会を作っていく。そこは多様性を認める社会になっていかなければいけないのではないかな、ということです。全ての人たちが、傍観者ではなくて当事者になるということから、この問題は国際交流という視点ではなくて、地域問題ということで、私も含めて考えていかなければいけないのではないかなというふうに思っております。

関口： ありがとうございます。それでは三田さんお願い致します。

三田： 私ども豊島区は、今国際アート・カルチャー都市構想というものを掲げて、所謂多文化共生ということで、国際都市として恥ずかしくない街づくりをしていこう、学校教育もいかに多文化共生ということで進めていくのかということ、これからの大きな課題だと受け止めております。

それで二つほど私どもがこれからの方向を示すものとして考えていることがあります。

とある日本語教室を設置している学校で、研究発表をして、中国人のお子さんが非常に多い学校で、その時のゲストティーチャーは中国人のお子さんの親御さんで、通訳は子どもがやってくれました。そして日本の親御さんもゲストティーチャーをやる。例えば、お正月はどんな遊びをするとか、凧揚げやコマ回してどんな凧やコマの違いがあってどうやってやるとか、体験活動までやって大変盛り上がりました。

全部媒体になるのは子どもたちの通訳。学んだ日本語をそこで活かす。それから中国の文化から中国語を知った子どもたちが、中国の言葉を覚えるという風に、一方的に言葉を教えると言うだけじゃなくて双方に学んでいくその背後に、文化とか生活とかいうものをいっぱい感じて、これからのいい方向づけになるなということ、私どもは考えました。ちょっと隣の人に聞ける、あるいはすぐ周りに相談できるというチャンネルをいかに増やしていくかということは、大変重要な課題だと思っています。

それからもう一つ、昨年暮れから今年にかけて、ロータリークラブさんが周年行事で教育委員会と

何か連携してやりたいということで、ふるさとかるたを作るということになり、子どもたちに「絵かるた」と「読みかるた」の募集をしました。その狙いは外国人の子どもたちに、日本のことをたくさん知ってもらいたい、楽しく知ってもらいたいということで、カルタを外国人の子どもにプレゼントする。それから日本の子どもと一緒に遊んでもらいたいということ。

ついこの間の放課後対策事業で、放課後の子どもたちの教室の中でかるた大会をやりました。大変盛り上がりました。一緒に自分たちのふるさとの学校の周りの文化財や歴史について知ろうと、日本の子どもも外国人の子どももそういう意欲が湧き、盛り上がったと聞いております。やはりそうした子ども同士、そこで関わった親御さんが地域と一緒に生活を通して言葉と文化を理解していくということが、これからすごく大切なことだと考えております。以上でございます。ありがとうございました。

関口： 今のお三方のお話をまとめたいと思います。まずは三田さんの話で、子ども同士大人同士の接触、交流を増やすこと、それに対して工夫をするということ、これが一つのヒントだということでした。

それからナージャさんからですが、今外国人ルーツの子どもとしてきている子どもたちが、その状況をくると転換、大人の言葉で言うと価値転換するきっかけとして、自分たちの個性、生き方っていうか色々画策して工夫すること。これをやるのが助かったといわれました。それをいかに今日本にいる外国のルーツの子どもたちに、そういうチャンスを与えてあげようかっていう事が一つのヒントになったかと思えます。

最後に小林さんですけど、やっぱり NPO というのは架け橋になると。これがやっぱり民間ユネスコをやっている私たちの役割、架け橋でもあるかと思えます。

今日伺ったこの三点の結論・サジェスション、それからその前に頂いた色々な話、これらを私たちが咀嚼しまして、次の 10 年 20 年増えてくることが確実な、外国ルーツの子どもたちの教育、日本語、それから学習の問題から生活の問題に対応していくということ、を、少しずつ考えていければと思います。

このセッションは非常に面白いセッションでした。これで終わらなきゃいけないのが残念ですけどもこれで終わらせていただきます。どうぞお三方に

拍手をいただければ幸いです。

(文責:関口 広隆)

基調講演2

「2019 年 寅さんの学校論」

キーノートスピーカー:

山田洋次:映画監督

(敬称略)

司会: 皆様お待たせいたしました。これより映画監督山田洋次様による基調講演を始めさせていただきます。皆さんワクワクされていると思います。

映画「男はつらいよ」シリーズでおなじみの山田洋次監督でございますが、この「男はつらいよ」の新作が、今年の年末に公開されると伺っております。また 1993 年に、東京の下町にある夜間中学校を舞台に、様々な境遇の生徒と教師の交流を描いた映画「学校」シリーズを制作されるなど、教育問題にも深いご関心を持っていらっしゃいます。

本日は「2019 年 寅さんの学校論」というタイトルで、お話をさせていただきます。それでは山田洋次監督にご登場いただきたく思います。皆様大きな拍手でお願い致します。山田監督ようこそお越しくださいました。

山田: 皆さんこんにちは山田洋次です。今日はこのお暑い中ご苦勞様です。

世界寺子屋運動 30 周年記念と伺っています。今司会の方のご紹介にありましたけども、もう 20 年以上前 1992 年だったかと思いますが、「学校」という映画を僕は作っている。それは夜間中学を舞台にした物語



で、文字を読めない書けない生徒がたくさんいて、そこでの識字教育っていうのかな、そういうことにも触れた体験があるので、そんな思い出話みたいなことを、ここにいらっしゃるのは皆教育に携わった専門家の皆さんですから、聞き飽きたようなことかもしれないけども、お話しすればいいかなと思っています。

その前に僕は「寅さん」を、もうちょうど 50 年前の 1969 年から作り始めて、49 作まで作ったのですが、その中でも教育の問題っていうのは随分触れているのではないかと振り返って思います。といいますのは、寅さんの妹のさくらには満男という名の一粒種

の息子がいる。この少年が小学校から中学校、思春期を迎え、やがて入試の問題で散々苦しみ、そして青年期には恋をして、その恋に苦しんだりしながらやがて卒業して就職する。そこまでをこの映画は 27 年かけて作っているわけです。

彼、満男というさくらの息子の成長の過程で、寅さんっていうおじさんがそばにいる。このおじさんっていうのはなかなかへんてこりんのおじさんで、少年時代はずいぶん迷惑な存在だった。「なんで僕のおじさんはもっと偉い人じゃないんだろう」、「学校の先生とか弁護士とかお医者さんとか、そういう人じゃなかったんだろう」と思っていたんだけど、彼が成長するに従って実はとても頼もしい存在であることが分かってきた。だんだん彼の精神的な成長は、つまりだんだん寅さんっていうこのデタラメでいい加減でめちゃくちゃな男を認める、だんだんこう人間として認める。この人がつまり両親の持っている堅苦しい古臭い道徳観に風穴をぶちぬいてくれるような、とても素敵な人なんだということがだんだんわかってくる。

そのことで例えば彼が親には相談できないような恋の悩みについて打ち明けたり、それに対して的確な返事をくれたり、時として叱られたり励まされたりするということで、結果として寅さんというのは、彼の人間の成長にとってとても大事な教師であったんじゃないか。そういうおじさんというのは、特に男の子にとってはとても重要な存在なんだなことを、僕も作りながらだんだん考えるようになって。

「君たちはどう生きるか」っていう有名な吉野源三郎さんの本がありますけど、そこに登場するのもおじさんなんですよ。おじさ

んが自分の可愛い甥に色々教えるって形で、この甥が精神的に知的に、知的な世界を辿り始めるという、そういう風な形で哲学を教える本でしたけれども。そういう存在として寅さんがいるんだということを、映画を作りながら僕は発見していった。

満男という少年とおじさんとの関係。「寅さん」シリーズのそういう場面をピックアップして持ってきていますから、ちょっと僕の話の聞く前に観ていただければいいと思う。そうすると寅さんという映画を思い出してもらいだけのではないかと思います。ちょっと皆さんご覧ください。

(「寅さん」シリーズの一部上演)

ということでご紹介終わります。

僕が夜間中学の存在を知ったのは「寅さん」の最初の頃かな、まだ 1950 年代だったと思います。映画を完成させたのは 1993 年だけでも、かなり前、20 年以上前から僕はその企画を抱えて温めていたんですけどもね。1970 年代に僕はある人に言われて、「夜間中学というのは非常に面白いと思うよ」といわれて。

当時は今の夜間中学校とはだいぶ違いますね。当時はまだまだ日本の敗戦が後を引いていたから、貧困ゆえに学校に行かない、義務教育を終えないままに大人になってしまった人たちがたくさんいた。だからその人たちは字を読み書きできないままに社会人になっている。で、こういう人たちが随分この当時夜間中学に来て、もう一回というか、改めて勉強してその読み書きを習うという、そういう人たちが随分夜間中学校にはいたんですね。

今は来日した外国人が圧倒的に多いんです。その当時も多少は残留孤児と言われた人たち、あるいはその人たちの子弟がいましたけども、今みたいに外国人の多い学校ではなかった。どちらかというと、夜間中学っていうのは一番基礎になる読み書きから始まって、そういうことを教える学校であったわけです。僕は夜間中学ってものがあるんだって初めて知って、一度訪問してみたんです。荒川九中という、今でもありますけども。

僕が想像したのは、夜暗くなってからの学校ですから、しかも昼間働いている人たちがみんな働いた体を引きずるようにして学校に来て勉強する、なんか重苦しいようなそういう学校だろうと。十代の少年少女がピチピチと飛び跳ねているような学校と、正反対ではないかという風に思っていたんですけども、その予想はとてつもなく裏切られたことがあります。

というのは大変学校の雰囲気が出るんです。もちろん夜だから電灯はついてるし、生徒たちはみな学歴の無い、大体二十歳代・三十代・四十代、なかには五十代・六十代と白い頭のおじさんおばさんもいる。だけど教員室も教室もなんだか明るい。生き生きとしている。これは何だろうと僕は思いました。

それから不思議に思ってたんですけども、その明るさっていうのは、みんな学校に来るのが嬉しいんです。面白い、学校が。勉強が面白くてしょうがない。特に文字を覚えるってことが、字を書くことを読むことを覚えるってことがとても面白いし、嬉しい。それを教える側の先生たちも、とてもなんか教えることに喜びを抱いている。

教える人も楽しいし、学ぶ人たちも楽しい。だからこの学校はこんなに生き生きとして明るいなって事が、だんだん分かるようになってきた。

それは既に受験競争が始まっている時代でしたが、その昼間の学校が持っているある種の重苦しさ、昼間の学校の教室にある重苦しい管理体制から見ると、本当に全く別世界みたいに伸びやかであったわけです。

それに僕は惹かれて夜間中学を舞台にした映画を作ろうという気持ちになって、まあ何年も何年もかけて脚本を書いたわけなんですけれども。

この字が読めないってことがどんなに不便かってことも、いろんな人たちから聞きました。例えば「危険」という字が読めないから、機械に手を挟んで怪我しちゃった人がいる。病院なんか非常に困るという。外科、内科、小児科っていう字が読めないから、いちいち人に聞かなきゃいけない。区役所に行って届けをする時は大変困る。誰か一緒に行ってもらえればいいけど、行ける人がいない時はしょうがないから手に包帯をして、「私ケガして書けませんから、すいません書いて下さい」と言って区役所の人に書いてもらうとか、そういう苦労を皆んなしてきている。

しかもそれだけじゃなくて、もっともっと大きい苦労は、職場に行っても字が読めないって事で差別される、馬鹿にされる。職場だけじゃない、家庭を持っている人たち、子どもがいたり亭主がいたり、そういう人たちはその子どもや亭主からも蔑まれる。「お母さんは字が読めない」とのこと。そういう沢山の差別に苦しんだ人たちが、ここで勉強している。

ここでは皆自分と同じように苦労した人たちだから、みんな仲間である。自分を差別する人はいないわけですね。だからみんなのびのびと勉強ができる。字が読めなくて当たり前な学校だったわけです。

僕はそれからしばらくして 1990 年代に、「学校」という映画の制作に入んですけども、その時に夜間中学校の親しくなった先生に、何人か時々撮影所に来てもらって色々指導してもらったんですね。である時西田敏行が先生役で、生徒の返事に対して「それ違うよ、それ違う」って言ったんですね。そしたら先生が僕のそばに来て、「私たちは違うっていう風には言わないんですよ」って。「どういう意味ですか」って聞いたら、例えば年配の女性が、英語の授業でこれはどんな意味ですかって聞くと恐る恐る手を挙げる、手を挙げてなんとかさんと言われて立ち上がって返事をする。これはどれほど勇気があったらうか。

この人がみんなの前で立ち上がって自分の思ったことを口にするってことが、それまでこの人の人生には無かった事なんですよ、ほとんど。それがこの教室でできるんだ。だからその女性が手を上げて恐る恐る立ち上がったことだけでも、もう合格点なんですと。そういう風に思ってなきやいけないんですと。よく君は手を挙げたね、よく君は返事をしてくれたね。それでもう二重丸三重丸だよと。その答案の内容が違うということはもちろんある。でもそれはその次の問題なんだ、まずはよく返事したねって褒めてあげなければいけないんですよ、ということ言われたことがあるんです。

日本語っていうのは、本当に日本の字っていうのは難しいんだっていうことは、色々

な先生が言っていましたね。直線で書けるのはいいけど、いろんなこう曲がる、カーブするわけです。

僕は天王寺にある大阪の夜間中学校にもずいぶん行ったんですが、この天王寺界限というのは在日の方が多いから、天王寺中学校はオモニの学校ってよく言われた。もう8割がた在日のオモニたちが、40代50代の人たちが、みんな日本に来た頃は貧しくて学校なんか行けなかった。このオモニたちが生活が安定してきたので、今からでも遅くない、字を学ぼうって言うんで学校に来て、一生懸命勉強しているというオモニの学校って言われた天王寺中学校だったのです。

そこでの授業を僕はある日聞いていたら、国語の時間でしたね、飛行機の「飛」という字を、これは実に難しいカーブはあるし、チョンチョンはあるしもう難しいなあと、生徒みんな嘆きながら一緒に懸命書いているんだけど、ひとりのおばさんが手を挙げて「先生、飛行機はあんな重いものなぜ空飛ぶんやろなあ」と聞くんですよ。その女の先生だったけども、先生は「そんな難しいことあたしに聞いてもわからんわあ」っていう。「分からんでも先生やから答えなあかんで」って言われて、「わからんものはわからん、しょうがない」と言って、それでその先生は「しょうがない理科の先生呼んでくるわ」と言って、そしてその理科の先生を呼んでくるわけです。

すると若い先生が入ってきて「飛行機が飛ぶ原理ですか。それはねこういうことです」と言って羽根の断片を書いて、僕はできないけども、こういう柔らかいキレを起こしてフッと吹くとこれがこうフウと上がるわけですね。みんながびっくりする。飛行機の羽根というのはこういう断面になっている、でこれ

がジェット機の推進力で前に進むことで、こういう浮力というものがつくと、これによって飛行機は上に上がっていくんですけど、そういう説明を試してみんな感心して、「よくわかったありがとう先生」。

で先生帰っていくと、もう授業終わりのベルが鳴るとその国語の女の先生が怒るわけですね。「本当にあんたらと授業していると終わらへんわ。飛行機の飛だけで1時間かかってしまったやないか」と。そうするとその質問したお婆さんが、「そんなこと言うけど飛行機がなぜ空飛ぶかってことが勉強できたやんか。これから家に帰って孫に自慢できるわ」「そうやそうや」ってみんなが。そういうのが夜間中学の授業でしたね。

僕はその時ふと大江健三郎さんに聞いた話を思い出したんだけど、つまり教師の役割ってというのは、質問の内容に全部答えられなくてもいいんだと。その疑問がどういうジャンルに属するのか、その科学なら科学の中のどのジャンルに属するかってことを教えてやるのが、教師の仕事なんだってことを聞いたことがあるけど、まさしくその国語の女の先生は、「私は国語を教えている、日本語を教えている。だけどあなたの質問は、この国語のジャンルじゃなくて、科学のジャンルに属するんだよ」ってことを、そういう形で教えてやったんだなってことがその時に気が付いたわけです。

同じようにカーブしたっていう話があったのを思い出しますけども。これ東京の夜間中学でしたね。また松崎さんという面白い先生がいて、この先生の話なんだけども、「母」という字を教えたんですね。父の方はちゃんちゃんとやって、それにこうバツテンだからわりに覚えやすい。しかし「母」はこう変にカ

ーブしていると。どれくらいのカーブだって言われても「そんなん適当だ」って、「適当なんてないじゃないか」という非常に生徒には難しい。

で、一生懸命みんな書いて覚えていたんだけども、こうしてちょんちょんとやってこう引っ張ると「母だ」って言ったら、「ちょんちょんって何だ」って聞くんですよ。「ちょんちょん...なんだって言われても困るけど、お母さんのおっぱいだと思え」って言ったらね、その時も在日の年配のお婆さんだったんですけども、「先生、教室でおっぱいなんて、そんな品のないこと言っちゃいけません」って言うんですけど。「それはそうだけでしょうがないじゃないか、他に何かいいのあるか」「おっぱいなんて言わないで、それはお母さんの涙って言えばいいじゃないですか」って言ったそうなんですよね。

それで先生は「あつ」て思ったって言うんですね。このお母さんは、お母さんの苦勞をたくさん知っているんだと、そのことからずっとおっぱいじゃなくて涙を浮かべたんだらうなってことを教えられて、そのことを忘れられせんっていう話は聞いたことがあります。

あとそうですね、これも僕が見ていた授業なんですけど。社会の授業でしたね、憲法の幸福の追求の原理っていうのがある。その幸福の追求の原理について、生徒を前にしてその先生が教えていた。これは男の先生でね、なかなか面白い先生で、元気いっぱいの怖い大きな声ですぐ怒鳴りつけるような面白い先生でしたけども。「さあ幸福って何だ」という質問を發したんですね。

その時生徒が10人ぐらいいたのかな。一人一人答えるんだけども、やはり格好のいい答えをするわけです。抽象的な答えをす

る。あるいは年配の人が「私はどこそこに勤めておりました、今これ位収入があります。家のローンも払い終わりましたし私は幸せだと思います」みたいな返事をする。それが一つ先生に納得いかない。「そうか、なるほどもうちょっと他の返事ないか、答えないか」と言っているうちに、隅っこにじーっと黙っている生徒がいたんです。

その生徒はいつも口紅塗って色が白くて、黙ってちょっと目つきが怖いような、そういう娘さんでしたけど。その娘さんがその時じーっと黙っているんで、その娘さんの名前は何て言ったか忘れたけども、「何とかちゃん、黙ってないで君も答えろ、なんだい幸福って」そう言ったら、その娘さんがふっと顔を上げて「金だろ」って言ったんですよね。

で、その時にその先生はどんなに嬉しそうな顔したのか。「そうだよ、金だよ」って言って、「幸福は金に決まっているじゃないか。金がなきゃ幸せなんかないだろう」って言った時に、生徒全体みんなほっとしたような顔をしましたね。「そんなこと当たり前なんだ」と。

ただ授業で「金」なんて言えないから我慢していたんで、言えなかっただけで、「それは決まっている、決まっているよな」と共感が教室全体を覆った。僕はその時ドキドキしましたね。さあこれからどう持っていくんだらうってこの先生は。「幸福は金に決まっているよな」と言ってみんなが共感をした。そこからつまりもっとその幸福ってものが本当の意味について、授業を進めていくということは、大変な大きなチャレンジなんだろうな、この先生にとっては。

事実それは見事にその先生は生徒をリードして、幸福について考えることこそがどん

なに大事なことから事が、皆に分かるようになる。何が不幸で何が幸福かっていう問題、そのことを考えるって事が大事だし、そのためにこれから勉強していくんだってことをだんだんみんなが理解できてこと。それはとても僕にとって感動的な授業でした。

結果として僕は「学校」っていう映画をまとめるにあたって、それをクライマックスに持って行こうかなと。それについてみんなが議論しあおうと。幸福って一体何だろうというね。そういう風にこの脚本をまとめたのも、実際僕が体験した夜間中学校の授業であったわけです。

天王寺中学校の話は前にしましたが、天王寺には在日のオモニがたくさんいらっしゃる。で、給食になるわけですね。5 時半に始まって、6 時半の晩御飯が夜間中学の給食です。天王寺中学の給食は僕も一緒にご馳走になるんだけど、牛乳が一本と、袋に入ったアンパンとジャムパンみたいなものが小さな2個。それだけなんですよね。

非常にあまりにも質素なので、あまりにも乱暴なので、僕はみんなに話したんですよね。「毎日これですか」って。「そうやで」って言うから、「東京の夜間中学校はね、もうちょっと晩御飯は豊かですよ、給食はね。例えば牛乳がある。だいたいスパゲッティとかライスカレーとか必ずお皿に温かい食事があって、その他にフルーツやみかんとか甘いものがつくとか、それが夜間中学校の給食の普通のメニューですよ。大阪は何でこんなに簡単なんでしょうね」って僕が言ったら、オモニが「なんでそんな差があるんだらうね」って。

「どうしてなんだ」って言うから「どうしてって予算の問題でしょうかね」って言ったんで

すよね。「ってことはつまり予算が大阪の方が少ないってことか？」っていうので「そういうことなんじゃないかな」と。すると、「どうすれば予算を増やさせることはできるんや」って言うんですね。僕はそこまで考えていなかったんで「どうするって、結局教育委員会に行って訴えたりしなきゃいけないんでしょうかね」って言ったら、「じゃああたしたち行けばいいのか」って言うんですね、教育委員会に。

そういう質問を受けながら僕は大変驚いたことがあります。つまり簡単にあきらめない、それを解決するためにどうすればいいかって極めてその行動的なんですよ、この人たちは。

さっき言った松崎先生って人の話なんだけど、その人は夜間中学で働きたくて夜間中学に来た人なんですよ、教員になった人なんです。夜間中学の教員なりたくて教員試験を受けた。ところが 20 年ぐらい経って昼間の学校に転勤になった。で彼は昼間学校に行きたくなかったんですよ。しかしもう転勤の命令が、内示が来るのかな。

で非常に彼は悩んでいたならそれを生徒たちが知っていて、それで「松崎先生は私たちにとって必要な先生だし、松崎先生も昼間の中学に行きたくないんだから、そういう運動を始めよう」と言って、生徒がみんなで夜間中学のある駅前で署名運動を始めたんだそうですよ。「皆さん私たちの先生が夜間中学に残れるように署名をお願いします」と、毎日毎日彼らは疲れた体で、夜その駅前で立つ。

松崎先生も一緒に立ったんだけど、そのうちに彼は「私はとても悩み始めた」って言うんですね。「私と一緒に並んで声を枯

らして署名運動してくれているこの生徒たち、それぞれ皆自分の職場があって、働いているんだけど、私の方がはるかに有利な条件で働いています。私はとにかく公務員ですから、公務員としての報酬、公務員としての様々な利益を得ている。この人は皆フリーのアルバイトだったり、小さな町工場の臨時雇いだったり、そういう人たちが私のようなフル雇用でもなければ終身雇用でもない。この人たちがなぜまた私の仕事について、こんなに一生懸命応援してくれるんだろ。それはとても申し訳ないことじゃないか」と、とても悩み始めて、ある日「もうやめてほしい」と言ったことがあるんだそうですけど、この先生結局転勤せずに、生涯夜間中学校に残られて、いまは定年されています。

そういう風に即行動に移すというのかな、だったらどうすれば解決できるだろうかってことを考えて、即行動に移すということが、まあ夜間中学っていうよりもそういうことをした時代だなんていう風な気もするわけですね。1980 年から 90 年にかけて。

今の時代はそういう意味じゃ、日本人のメンタリティが変わってきてしまっている。まあ簡単に言うとみんなこうなんというのかな、大人しくなっているのはなぜだろうかっていうふうに僕は思います。

皆様映画館にいらっしやれば体験なさるでしょうけども、必ず映画が始まる前に、変なアニメーションが出てきて、「静かに映画を観て下さい」という教訓を垂れるんですよ。多少コミカルにやっているけども、とにかく「隣の人と大声で話をするな」とかね、「前の席を蹴っ飛ばすな」とかね。なんであんなことを言われなきゃいけないのか。それから繰り返し繰り返し「盗撮は犯罪です」な

んでこと。これから楽しい映画観ようとする時なぜ犯罪なんて言葉を画面に映してそれを聞かなきゃいけないのかと。僕はそう思います、大きなお世話だと思えます。

静かに見るか見ないかっていうのは、これ市民のモラルの問題であって、そんなことは幼稚園の子どもじゃないんだから、いい大人がスクリーンで説教されるってこと自体が、いかにも観客を馬鹿にしているんじゃないかと僕は思うんだけど、観客があまりそう馬鹿にされていると思わないというところに、問題があるんじゃないのかなと思う。

映画館の支配人に聞いたことあるんだけど、観客がその映画館で働いている人に「私の隣の人がうるさいから静かにするよう言ってくれ」って、そういうことがたまにあるそうなんです。あるいは「大きな声でいびきかかからやめるよう言ってくれ」なんて。そんな「隣の人なら自分で言えばいいじゃないかと思えます」っていうの。「あなた少し静かにしてください」とか「いびきかかないでください」とか。「それを言わないでいちいち私たちに言わせる、そういう時代ですね」というのを僕は聞いたことがある。

1960 年代から 70 年代にかけて、寅さんの第 1 作目は 1969 年だってことはさっき申し上げましたけれど、あの時代の日本人はもっともって考えてみれば元気だったなあと思います。映画館も非常ににぎやかで騒々しかった。寅さんの 10 作 15 作あたり、このころ寅さん人気あって客も満員だったんですけども、本当に皆よく笑ったし、時々「いいぞ」なんて声があつたりなんかしたりした。

「寅次郎あじさいの恋」っていう 29 回目の作品があるんですけども、それを上映した後で僕は大阪の天王寺の映画館に行った

んですけど、その天王寺映画館の館主さんが分かりにくい関西弁で僕にね、「あんた偉い写真つくりはったな」と。僕たち業界では映画のこと写真って言うんですけども。それでなんだろう、この人文句言っているのかなと思って「どういう意味ですか」って、僕はちょっとやや色をなして言ったら、「このあいだ小屋で客と一緒に写真観とつたらな」と。

「寅次郎あじさいの恋」という作品で、いしだあゆみさんがマドンナでした。彼女は伊根という小さな漁村の一人暮らしの未亡人で、小学生の子どもと一緒に暮らしている。寅さんと京都で知り合いになって、ある日寅が彼女は元気かなと思って訪ねていくという。泊まってらっしゃいと言われて泊められるって話なんです。お母さんはいるけれど、なんせ未亡人の家に一人で泊まるってなかなかのこと。寅は息子の部屋に泊まる。

で夜中にその彼女、いしだあゆみさんが息子の部屋にそっと現れて「すみません明日のランドセルを取りに来ました」と言ってランドセルを取る。これはかなり際どいシーンでありましてね、もし寅さんがその気になったら何とかなったんじゃないかという、寅さんシリーズにしては珍しい色っぽいシーンで、もちろん寅さんは狸寝入りでグーグーいびきをかいていて、いしだあゆみさんがちょっと失望したかのような顔して消えていくんですけども。

その場面のところでね、支配人が言うには、その天王寺っていうのは釜ヶ崎の労務者たちが酔っ払って、仕事のない人たちがよくお酒飲んで映画見に来るところでもあったわけで、その酔っ払った釜ヶ崎のおじさんが「寅！いてまえ！」って叫んだそうなんです。 「いてまえ」は関西弁でちょっと下品な

言葉で「やっちなえ」って言葉なんです。それでみんな笑ったんだけど、別の言葉が上がったという。「あほやなあ。こういう時にそういうことせんのが寅のええところや」って言ったら、みんなまた「わははは」と笑ったっていうんですね。

その支配人が、「こういうことはね、初めてやで」と。観客同士が議論してそれで皆喜んで。「あんたえらい写真作った」って言われたことがある。つまりその映画見ながら、そういう風に議論してそのことに皆楽しむ。その「いてまえ」っていう人間、男の卑しい気持ちと、「そういうことしちやいけない」っていう気持ちが、誰の心の中にもある二つの矛盾した気持ちとしてあるわけで、それが映画館の中で二人の対立的な意見として現れたという、そういうことだなと僕が思うんだけど、それを皆が感じて全員が喜ぶというか祝福するというのかな、そういう風に映画観ながら思ったことを口にするという風な観客が、この頃はたくさんいたってことですね。

今はそういうことない。ないどころか映画始まる前に「静粛に大きな声出さないで」とお説教されて、黙って映画を観るという時代になってしまった。どうしてそんなふうに日本人はおとなしくなってしまったのか、はっきり抗議すべき時に抗議しない民族になってしまったのか。ということ最近思うことがとても多いです。

このままでいいのか、このままでどうなっていくのだからって問題。そういうことを、かつて寅さんを作り続けた僕としてはとても思うんです。

寅さんっていうのはそういう意味では全くの自由人であった。いい加減で出鱈目でめちゃくちゃでもあったけど、時々十に一つづ

らいは正しいことを言うことはあつたらう。それを平気で彼は口にできるという自由さと奔放さをもっていた。それが寅という人間の楽しさで面白さであった。それ故にたくさんの失敗を重ねて繰り返し繰り返し、性懲りもなく 49 作も作ってしまったっていうわけですけど。

言わばその寅を通して、人間が自由であるということ、ものの考え方においても発言においても行動においても自由であるってことが、どんなに素敵なことで大事なことであるかを、観客は寅さんを通して思い続けたんだらうなって思います。

寅さんが終了してもう 20 年近く経つんですけれども、寅さんの妹のさくらさんとか、あるいは妹の亭主ひろし、前田吟、倍賞千恵子さんあるいは吉岡秀隆くんとか、みんな元気で今でも柴又に住んでいるんだらうなと思う。そして時々寅さんの話なんかするんだらう、今頃どこで何しているんだと思ったりするんだらうと考えたら、それでもう一回を作れるんじゃないかっていうふうに考えたのが一昨年でした。実はそれで色々考えて、去年の暮れにかけて寅さん第 50 作目を作ったんです。

クランクインが 69 年ですから、ちょうど 50 年目の今年の 8 月の末に 50 年目記念行事なんかありましたけども、50 年目に第 50 作を作って、この暮れに封切りになることになっています。最後に自分の映画の宣伝になりますけども、是非皆さんに観ていただければと思います。以上で僕の話を終らせていただきます。どうも失礼いたしました。

(文責: 関口 広隆)